
恋する乙女はピンクが嫌い？

ゆながりか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋する乙女はピンクが嫌い？

【Nコード】

N8568K

【作者名】

ゆながりか

【あらすじ】

ちよつと（？）変わった少女、あまねみやび天音雅の趣味は、「イケメンウオッチング」。そして、苦手なものは「ピンク」。『ピンクを見ると、吐き気が…』そんな雅が、ひょんなことから、男装して、執事になることに！そして、そのご主人様は、大のピンク好き！しかも、その屋敷にはイケメンがいっぱい！『ぴ、ぴぴぴ、ピンクウー！？』

そんな、ちよつと変わったラブコメディ。雅、ピンクに耐える！
！！

第一話 おお、イケメン！（前書き）

新連載！

まだまだ未熟な作者ですが、どうぞよろしく願いします！

第一話 おお、イケメン！

「おっ！！色男発見」

街角のとある喫茶店。

そこであたし、あまねみやび天音雅は、趣味を実行していた。

まあ、ここでいきなり引かれちゃ困るから、その趣味の内容は今は秘密

「あ、待ったあ〜？」

「ううん、今来たトコロ それに、カナちゃんのためなら何時間でも待つよ」

「ええ〜、本当お？」

「モチロン！」

「……チツ。彼女連れかよ……」

喫茶店の窓から、目の前の公園にいるカップルを、あたしが見ているとは、まだ誰も知らない。

そう、あたしは、その公園にいるカップルを見ているのだ。

あたしが目をつけたのは、彼氏の方。

身長はパツと見て、160〜170くらい。

体格は細身で、スタイル抜群。

顔は、細い目に白い肌、笑った瞬間に見える白い歯が特徴的。

髪は茶色、耳にはピアス、典型的なチャラ男。

それでもって、こいつのいいところは、もちろん顔がいいこと。悪いところは、ちよつと馬鹿っぽいこと。

……といったように、瞬間的にイケメンの能力をキャッチできる、
天音雅です

ま、要するに、あたしの趣味は、「イケメンウォッチング」。
そこらへんをうろついて、絶好のイケメンスポットを見つけたら、
そこでウォッチング！

つていつても、逆ナンする気はない。

ほら、テスト勉強で疲れたとき、目の癒しになるものを探すことな
い？

ズバリ、その目の癒しが、イケメンなんだよ！

「でも、あのイケメン、女の趣味悪〜っ」

……そうなのだ。

たいてい、イケメンには「女」がいる。

そして、いつも思うのだが……

ハッキリいわば、不細工……！！

そして、極め付けが……

「うえっ……！！ぜ、全身ピンク……っ！うっ、うええええええ〜
〜……！！は、吐く、吐くよあ〜！！」

あたしは、大のピンク嫌い。

気持ち悪い……！！

あんなぶりぶりした色、誰が好むわけ？

ああいうのが好きな人の気持ち、全くわかんないんですけど……！！

「ちょっと、お客さん」

「あ……。やつ、やつだあ〜、どうしたの、一真くうん」

「猫なで声使ってもダメ。っていうか、気持ち悪い」

「だよな？あたしも自分で言ってる吐き気が……！っていつか、この声を日常で使っている女が信じられないわ」

「……そこまで男っぱいオマエも信じられないがな」

あはっ

まあ、一真君つてば、怒った顔もカッコイんだね

あたしの目の前に立っている、超美形の人物……それが、橘一真たちばなかずまだ。

なんていうか、中学三年生のときに、絶好のイケメンスポットを探していたら、このお店とめぐり合ったわけ！

目の前には公園、そして店にはイケメン君が…。

なんて素敵なの！

っていうか癒されるうー。

「で、店の人がかなり怪しい目で見てるんで、店から出て行ってくれるかな…」

うつひゃあ、本気だ、怖いー。

目が光ってるし、笑顔で攻めてくるところがまたカッコイ……じゃなく、怖い！

そうよ、雅。

これは、カッコイイなどではなく、怖いよ。

たとえ、その笑顔がかっこよくても、たとえばムチャクチャ癒されても、決してイケメンなどとは言っては……

「聞いてるんですか、雅！」

「うん、もちろん見てるよ、そのイケメン顔！」

「……俺は、聞いてるのかといったんだが…」

あ、ヤバイ！

本気で怒らせちゃった？
よし、ここは逃げるが勝ちだよね！

「それじゃ、一真君のお言葉通り、帰らせてもらいまあゝす」
「……お金、払っていけ」
「バレた？」
「バレバレだ」

あはは、冗談が通じないなあ、一真君は。
とりあえず、お金を半額だけ支払って、逃げてきたあたし。
うーん、本当は四分の一くらいまで値段を下げてほしかったけど……。
まあ、イケメンだから許す！！！！

「さつてと、今度はどこのスポットに行こうかなあゝ」

パラパラ…と、手帳のめくれる音が妙に耳に残る。

この手帳は、この辺の絶好のイケメンスポットをあたしが丁寧に書いたものなのです！

これ、我が家の家宝にしたいよ…。

「あ、こことかいいかも！あ、でもなあゝ…」
「ちよつと、その君」
「あー、でも、やっぱりこっちの方が……」
「君！」

ふえっ？？？

いきなり肩を乱暴につかまれる。

ちよつと、何するのよ、乙女に向かって！

確かにあたしは髪もショートだし、男っぽいけど、乙女なんだから

ね！

「何ですか……って、あつ！……！」

「……どうかしたのかな？」

す、すごい……

カッコイイイ……！！！！

目も鼻もスリリとしていて、長髪に青い瞳が似合ってる！

ズバリハーフ！

っていうか外国人！

っていうか、美形！！！！！！

「何ですか！！！」

「え……つと、その……君に、うってつけのアルバイト……いや、仕事があるんだよ」

へっ……？

シ・ゴ・ト……？

でもでも、一応あたし高校生だし。

アルバイトならオツケー！

でも、仕事は……いいんだよね。

実はあたし、一人暮らしなんだよー！

家賃とか、イケメンウォッチングをするための電車賃とか、イケメンウォッチングをするための喫茶店のコーヒー代とか、イケメンウォッチングをするための……

と、とにかく、今お金に非常に困っている……！！

親からもらっているお金では、到底やりくり不可能！

だから、一応学校からの許可はとってある
っていうか、基本うちの学校は、校則ないしな…。

「それって、どんな仕事ですか？」

「……この、『桃原 スモモ』様が、『執事』を探していらっしやるんだよ」

……???

今、なんと……？

もも、はら、すもも？

またすごい名前だなおい……。

って、それはまだいいとして、執事って何だコラ。
ひつじの間違いか???

「そ、それで……？」

「君のような美少年を探して、『桃原 スモモ』様の執事になって
もらいたいんだよ！」

「……」

うん、状況がわかったぞ。

あたし、『男』に間違えられてるんだ。

それもそうか…。

あたし、さっきも言ったけど、ショートカット。

ピンとかゴムとか、全くつけてない。

それで、ダブダブのお兄ちゃんのズボンと、男物のティーシャツ。
これは、男に間違えられるわ……。

でも、美少年って…あたし、美しいのか???

「……どうだい、やらないかい？」

キラキラと熱がこもった目で見られる。

うーん、どうしよっかなあ。

こんなにイケメンな人に誘われてるしい……。
でもでも、お給料は？

「お金は、一週間に七十万……」

「あた……じゃなくて俺、精一杯やらせていただきます……!!」

うーん、七十万……ようするに、一日十万……。

なんていい響き！

これまでの生活とはおさらばだあー！

「そうですか！ちなみに、住まいはどうされますか？」

「……へっ？」

「要するに、貴方様が住む家です。もちろん、執事となれば、桃原様の屋敷に住むこともできます。ですが、もちろん今の家にも……」

「や、家賃はっ？」

「家賃は、給料から惹かれますが……せいぜい、月に十万程度でしようね」

そのとき、馬鹿なあたしの脳は、馬鹿をフル活動して、計算をし始めた。

一ヶ月だいたい三十日……。

一日十万だから、十万×三十は……。

さ、三百万！？

それで、三百万÷十は……。

「はい！俺、天音雅は、全力でご主人様のお手伝いをするため、屋敷に住まわせていただきます……!!ちなみに、そちらのお屋敷の住

所は……？」

「近くに、せいやがくえん聖夜学園が……」

ん？

どっかで聞いたことがある名前……って、あたしが通ってる学校だ
ああー！

お父様、お母様、見ていらして？

今にあたし……いや、俺は、大出世してみせるからね！

「俺、天音雅です！これから、宜しく願いますッッッ！……！」

第一話 おお、イケメン！（後書き）

この小説をのぞいてくださった皆さん、ありがとうございます！
『恋する乙女はピンクが嫌い？』、楽しんでもらえたかな？？？
ピンクが嫌いって人は、結構いるんじゃないかな。

あたしもその一人です！

吐き気はしてきませんけど、ちょっと、派手すぎるのはね……。

あと、イケメンウォッチング！

目の癒しですよね

まあ、たいてい彼女がいるんですけどね……（涙

えっと、話がズレた！

とりあえずは、よろしくお願いします！！！！

そして、呼んでくださった皆さん。

こんな未熟な文章、読みにくいと思いますが、どうぞ最後まで読んでください。

あと、読者の方からの声援がないと、あたしは生きていきません！
何度か、連載を打ち切ったことが……（恥ずかしい……）。

これは、そんなことにならないようにがんばるぜい！

ってことで、応援、よろしくです！！！！

第二話 はうっ、パラダイス！

「今日からこの屋敷に住まわせてもらっことになりました、天音雅ですっ！宜しくお願いしまぁーす！」

我ながら完璧な自己紹介。

さっすが、あたし！

じゃなくて俺！

「……それじゃ、次」

ぐはっ！！！！

な、なんだかこの人、厳しいよう…。

雅、悲しくなっちゃう…。

今、あたしの目の前にいる人は、あの日あたしに声をかけてきた人。

むちゃくちゃイケメンの、あの人。

名前は、なかはら中原レオ…だったかな？

「俺、わかまつ若松陽太！ヨロシク！」

また、この場に似合わない雰囲気の人だなあ…。

隣に座っている、若松君。

この人もまた、イケメンだあ…。

髪は茶髪で、プレイボーイっぽい。

ニコツとした細い目が、彼の顔を際立てているように思える。
身長は小さめだが、あたしよりは大きい…だから、150くらい？
顔は小顔で、少し日に焼けている。

健康少年…っていうか、スポーツ少年だな、これは。

「おっ？おまえ、かわいいーな！」

っ！！！؟؟？

は、はええええええ！

と、とんでもないところに来ちゃったような気がするよぉ！
だってだって、この若松君……

あ、あたしに抱きついてるー！！！！

んぎゃっ、気持ち悪い！！

イケメンだからって、調子に乗るな馬鹿野郎お！

「は、離して、くださいッッ……」

「ええゝ？えっと、おまえの名前って……」

「天音雅デス！よ、よろしくお願いします！」

やっと解放されて、一安心。

そうだった、これからは男として生きていくんだから、このくらいのことは承知で……。

「……橘一真だ。よろしく」

っ！？

さっきとは違う衝撃が、体中に走る。

タチバナ、カズマ……？

きっと、人違いだ。

橘って人は、日本中に結構いるはず！

一真っていう名前も、ただの偶然！！のはず…。

「……………っ！！おっ、おま……………っ」

ぎゃあああー！

気づいた、気づいちゃったよこの人ー！！！！

バッチシ視線が合ってしまったあたしと一真君。

何でここにいるんだ？と、目が言っている。

あー、これで、夢のパラダイスも終了？

女だってバレて、追い返されちゃう？

ノオオオオオー！！！！

「それじゃ、次……………」

「中原さんっ！！！！」

「……………どうしたんだ、天音雅」

「ちよつと橘君がおなが痛いと言っています！！！！だから、トイレに連れて行きます！」

「はっ！？俺、別に……………」

「痛いよね、橘君……………」

あたしに合わせる馬鹿！！！！と、目で合図する。
何とか伝わった…のかな？

「……………本当か、橘一真」

「え……………と…まあ、確かに……………」

「それじゃ、いつてきまあーす！！！！」

一真君の手を引っ張って、無理矢理連れて行く。
アッ！！！！

よ、よよよ、よく考えれば……ここって、男子だけの屋敷だし、ト
イレって、男子用しかないんじゃない……

あはは、当たり前 ビンゴか、うっれしい……わけねーだろおお
おおおお！！！！

「み、雅っ！」

「一真君、お願いッ！！」

「っな……！！！！??？」

思い切り一真君の服にしがみつく。

おねだりなんて、全然しないから、方法がよくわかんないんだよね
…。

たぶん、こうやって、ギュッてしてれば……

「あのね、ここはね、パラダイスなのっ！」

「……はっ??？」

「だからね、男ってことに、してほしいのっ！」

今こそ泣き所！！！！

っていうときには、泣けないものです。

人生そこまで甘くはねえぞ…。

そうですね、そうですね。

甘くないよ、しよっぱいよう……。

「いや、別に、女だとは言わないからいいけど……」

「ほ、本当っ!？」

「う、うわっ！！！！あ、ああ……」

なぜか頬を赤く染めて、あたしから視線をそらす一真君。
ん？どして？

つて……

あ、そつか。

今あたし、抱きついてるんだ。

別に、特に恋愛感情がないあたしにとっては、どうでもいいんだけど……

まあ、一真君は気にするんだな。

つていうか、ほとんどの男子、気にしちゃう？

「でも、おまえなんでここにいるんだ？」

「え？それは……」

というわけで、ことの成り行きを話したあたし。

中原さんに会って、仕事の話をして、お金の話をして、家賃の話をして……と、こんな感じ。

ちなみに、抱きついたまま話しました。

その間、一真君は耳まで真っ赤にして聞いてました。

アッ、純情イケメンも、かなり癒されるうゝ

あっ……！！

つていうか、これって、萌えつていうの？

「ふーん。全部、イケメンウォッチングのため……？」

「そーいうこと！あ、でも、ここの屋敷は美少年ぞろいだし、わざわざ出かけなくても……」

「……」

あれ？

どうして黙ってるんだろう…。

あ、やっぱり抱きついてるのが悪い？

うーん、結構気持ちいいからいいんだけど……

それに、そんなに意識してくれなくても……。

さつきから、本当に体中赤いんじゃないかと思うくらい真っ赤。何をすればこうなる???

それに、あたしには恋愛感情はないんだからさあ。

こつ、もう少し、男同士っぽくさー。

「……じゃあさ、雅」

「え？何？」

「女だつて言わないから、キスしてよ」

「……はっ!？」

い、今、純情少年とは思えない発言を!……!

あ、今までのが嘘だったとか!?

ヤダヤダ、ずるうーい!

「なあーんだ、純情イケメン君じゃなかったのか……」

「何言ってるんだ、おまえ……?」

「あ、なんでもない!で、キス?」

キス、かあ……。

実はまだ、ファースト残ってるんだけど……。でも、女ってバラされちゃ困るし……。

まあ、恋愛感情ないしな……。

「ほっぺたなら、いいけど?」

「え……っ!？」

あれ？

なんか変なこと言った？

あたしがOKすると、急に戸惑い始める一真君。

ちよっとちよっとー、キスしてって言ったのはそっちじゃん？

「…………じゃ、いくよ？」

こーいうのは、早めに終わらせておくに限る！

嫌なものは先派主義だから！

ほら、キスもどっちゃかっていうと、嫌なことじゃん？

「うえっ？ま、マジ？」

「マジだよー。口止め料、ってことでしょ？」

「ま、まあ……………」

「ほら、もっと顔近づけてよー。一真君、背が高いんだからさー」

「う、…………っ！あ、ああ……………」

だんだん、一真君の顔が近づいてくる。

んー、ほっぺたに、軽くすればいいんでしょう？

簡単簡単！

どんとこーい！

徐々に、顔を近づけていく。

後、数ミリ……………

「おおーい、トイレってど……………お、おま、おま、おま

……………」

……………へっ……………？

バーン、と、勢いよく扉を開けたのは、若松君、だっけ？
目を丸くして驚いている若松君は、一瞬で頬をばら色に染めた。

「ごめん、お前らがそういう仲だっというのは知らなくて…」

『はっ?』

「大丈夫、他の奴等には黙っておくから！恋に性別は関係ないって言うし！」

「ちよつ、ちよつと、若松君!？」

「ご、誤解だっ!!!」

「大丈夫、言わねーよ!」

大丈夫じゃないからー！

誤解だからー！

ついでに言っちゃうと、あたし女だからー！

完全に、男同士の恋愛だと間違われたな。

いかん、明日から若松君と顔を合わせられないよ……。

『はあー……』

ん？

隣でも同じようにため息をついている。

一真君も、嫌だよね、やっぱ…。

『はあー……』

第二話 はうっ、パラダイス！（後書き）

更新遅くなっちゃってスイマセン…。

いろいろと、忙しくて……。

でも、何とか更新できた！

登場人物は、雅と、一真と、レオ（ほら、金髪イケメン）と、若松陽太と、あと一人です！

その一人は、次回出てくる予定…。

たぶん、ね。

第三話 …… エイプリルフル？

「えっと……今日って、エイプリルフル、でしたっけ??？」

体のそこからおそってくる吐き気を何とか押さえながら、中原さんに言ってみる。

エイプリルフル……それは、人を騙してもいい日だ。
4月1日。

だが、今日は。

「何を言っているんだい、天音雅」

アハハ、ですよね。

今日は、4月1日じゃないし。

アハハ、でも、騙そうとしているんじゃないなら、これは……

「じゃあ何で、こんなところでこの色に出会わなければならな……
ッウップ……す、スイマセ、は、吐き気が……ッ。ウップ、げ
ほっ、ウゲエエエ……!!!!」

ピー、ただいま、この小説にも書けないような悲惨な出来事が起こっています。

みなさん、少々の間お待ちください……。

「……オホン。えっと、それで何でここにこの色が？」

「それより、この僕の膝にある物質を何とかしてくれないかね」

あちゃー、怒ってるよ、この人！

ううー、でもでもお、出しちゃったものは仕方ないじゃん？

あ、そういえば、今日のご飯は珍しく豪華だったのに！

もったいなーい！ー！！

「もったいないので今すぐ飲み込みま……」

「やめろ」

「……」

中原さんの膝へと口を近づけようとすると、手で封じられてしまった。

ブー！

中原さんのケチ！ー！！

「んー……。とにかく、目の前にそれがあると、もう一度 ピーー

してしまうんで、とりあえずそれを隠してください」

「……」

中原さんは、迷いもせず隠した。

うん、さっきので懲りたんだろうな。

中原さんの膝の上には、アレがのっている。

でも、それをタオルでこすっているのが、中原さんの几帳面さ（いや、誰でもやるけどね）。

あっという間に綺麗になった服（いや、まだ汚れてるけど）。

「それで、どうして、そのようなものがここにあるんですかっ！？」

そう。

そろそろ気づいているとは思うが、目の前にあったもの、それは……

ピンクの執事服

ウン、中原さん、一回は死んでもらわないとね

あたしの殺意を感じ取ったのか、中原さんは汗を流している（どうでもいいけど、汗をふいてるタオル、さっきアレをこすった奴だよ？）。

「それは、ご主人様のご命令だ」

「はあっ！？なめてんのアンタ！完全にあたし……じゃなくて俺をなめてるよね！？俺はそんな色見るとなあ、吐き気がおそうんだよ！ってか、一回死ねアンタ！ついでに百回地獄に行つて、閻魔様に百回舌抜いてもらえ！！……つつか、誰だよそのご主人って！どんな趣味だ馬鹿野郎お！」

おや？

あたしの手が、グーの手になっているぞい？

うんうん、殴りたいんだね。

オッケー、存分に殴っちゃえ！

「デメエ、ぶつ殺す……ッ」

「……ご、ごしゅ、じん、さま……」

中原さんが、真っ青になって助けを求めている。

その辺の奴らは、あたしの迫力におびえて誰も助けに来ない。ハント、まじめに殺すぞコイツ。

「そこまでにしたまえ！」

「…………ああ？」

完全に不良化したあたし。
でも、意外に合ってるかも……。
不良イケメンって、なんだか萌えるし

「その君、僕の執事を離してくれないかい？」
「…………」

とりあえず、中原さんを離す。
そして、後ろを向く。

なぜかというと……

ウッ！……………！！！！！！！！！！

き、キモ。

な、なぜに、アイツは………… アイツは、アイツは、アイツは…………

男なのにピンクを着ているのだああー！

確かにイケメンだが、ピンクはないだろピンクはあー！

見るだけで鳥肌、寒気、恐怖が一気に襲ってくるわああー！

テメエのせいで、こちらら意識を手放しそうになっただろおーがああー！！！！

「…………ぶっ殺す…………」

「ちょっ、雅、やめろ！」

「あ、一真君…………」

目の前に現れたイケメンに、正気を取り戻したあたし。
ウンウン、よかった、あのまま行ったら完全に殺してた。

やっぱり、ああいうのは、じっくり痛めつけてあげないとね……。

「おいおい、ヤバイよ、さすがにご主人に刃向かうのは」

「あ、えつと……若松君？」

「そうだよ、天音っち」

あ、天音っち……。

ううゝ、なんだか妙なあだ名をつけられてしまった…。

しかも、誤解されたままだし。

同性愛者か…あたし、女なんだけど。

だいたい、あたしと一真君が……？

……ありえないな。

「とにかく、大人しくしてろ」

「そーだよ、橘の言うとおり！」

そう言つて、ニカツと笑う若松君は、すごいかつこよくて。

あー、癒される……。

こんなところに、癒しのパラダイスがあつたなんて…。

雅、シ・ア・ワ・セ

「……オホン。諸君、我が屋敷に集まってくれてありがとう。心から感謝している。そして、僕がこの屋敷の主人、桃原スモモだ。よろしく」

……そう、今後悔しても遅いのだ。

中原さんに誘われた、あの時によく考えていればよかったものの。

桃原 スモモ。

ピンクは、別名で、『桃色』と言う。

そして、この男の名前には、その色の別名が二個も入っているのだ！

『桃』原 ス『モモ』

そう……あたしは、パラダイスではなく、地獄へと導かれてしまったらしい……。

「……僕は、この名前の通り、ピンクが大好きだ！」

この人とは、絶対に気が合わない。

「ついでに言うと、女子が嫌いだ！よって、男子にピンクを着せる事にした！」

……。
……。
……。

ん、帰ろう！

「……お金、十万……」

「っ」

「一週間働いたら、七十万……」

オ・カ・ネ

ヒッソリと影でささやく一真君。

やっぱりここは、少しがんばって、ピンクの衣装を着ようかな。

ほら、ご主人様のご命令には従わなければ！

ウンウン、たかがピンクで帰ってたら、ジ・エンドだよな。

「ん？その君は、ずいぶんかわいらしいね」
「へっ？」

そう言つて、この辺を見つめてくるご主人様。
えつと、かわいらしい人？

一真君は、クール系だし、若松君も、かわいいとは言えない。
ましてや中原さんは、もうカッコイイとしか言いようがない。

「え……と、誰の事？」

「おまえだよ、雅」

「えっ！？あ、あた……………俺！？」

「ああ」

あたしが、かわいらしい！？

まあ、男の巢に来てしまった今は、少しは可愛く見えるのかも…。

「君には、ピンクが似合う！」

「…………失礼したいですっ！でも、お金が俺を呼んでいる！つつこと
で、俺には黒い執事服を…………」

「よし、このピンクに更にピンクを盛りつけよう！」

「…………」

第三話 …… エイプリルフル？（後書き）

ウシ、更新！

なんだか読者が増えて、るるん気分の作者です
それに、なんだかこの物語は結構いい調子
きつと完結できるはず！

長編になるかも…わかんないけど。

何はともあれ、これで登場人物はそろった！

あー、ご主人様はかなりウザイ！

ピンクが好きな男って、いったい……。

第四話 パラダイスか、それとも？

「それじゃ、君にはこれだよ」

「ご主人様、ピンクをどうしても着なければいけませんか？」

「もちろん！」

「……」

最低最悪。

何この状況！

っていうか、どうしてあたしがピンクを！？

「俺も、ピンクを着るのは嫌だ」

おお、一真君……。

助太刀ですね！

ありがたき幸せ！

「俺も嫌だな」

若松君！

たとえ誤解が解けなくても、優しい君には感謝します！

「君達、ご主人様の前だぞ。言葉を慎みたまえ」

『……（ウザッ）』

中原さんの言葉、一つ一つがキツイ。

それはおそらく、さっき脅した恨みがこもってるんだろうな。

全く、嫌な人だ。

「とりあえず、この執事服を着るのは絶対命令だ。わかったな！」

『……』

「……着なければ、お金が……」

『はい！喜んで着ます！』

オーカーネー！

おお、かね！

つて、何言ってるんだあたし！

それにしても……

ピンクだ。

ピンクだピンクだピンクだピンクだピンクだ。

執事だよね、あたし。

男になってるよね、あたし。

なのに……

ピンク。

「レオ君」

「何ですか、ご主人様」

「君にも、ピンクを着てもらおうよ」

カチン……。

中原さんは、そんな効果音をつけて固まった。
うひゃひゃ、いい気味

あっかんべー、だ。

嫌な感じのイケメンさんは嫌いだみょーん！

「さあ、皆着替えるのだ！」

……え……？

周りの男達は、服を脱ぎ始める。
そう、あたしの目の前で。

うつひゃー、すごいスタイル！
さっすがイケメン

じゃーなーくーてー！！！！
脱ぎ始めたんだ。

み、みみみ、見えてる見えてるー！
何で女子の目の前で脱ぐの！？

って、あたしは男子だっけ。
いきなり大ピンチ！
っていうか、危険だあー！

「雅」
「ハッ！か、一真君……」

たった一人だけ、あたしの事情を知る人がいました！
一真君！
って……

いーやー！ー！！！！
何で上半身裸なのー！？
いや、確かにスタイルもいいし、肌も白くて綺麗だし……
って、ちがーうっ！

「あ、あわわわ……！」

「雅？」

「んぎゃっ！触るなヘンタァーイ！」

……あ。

その場が、一気に静まり返った。

それはなぜかって？

あたしの声が、大広間中に、響き渡ったから。

あたしの、「ヘンタイ」という言葉は、みんなに聞かれて、そして気づくと、たくさんの人がこっちを見ている様子。そしてその目は、一真君を睨んでいて。

「おい」

「はっ！？」

一人の男の人が、一真君の胸倉をつかむ。つて、どどど、どうなってるの？状況が全くわかんない！

「ヘンタイ行為はやめてもらおうか」

「……はっ？？」

ヘンタイ、行為？

あ……、あたしが、叫んだ「ヘンタイ」って言葉？一真君もそれに気づいたみたいで、目を白黒させてる。

「ごっ、誤解だ！俺はヘンタイ行為なんて……」

「さっき天音ちゃんが言っただろ！なー、天音ちゃん」

「へっ！？え、と……」

ごっつい男の子にニコツと笑いかけられて、あたしもしどろもどろだっただってー、ごっつくても、イケメンだし。

んー、カッコイイ

「とにかく、 Hentai にはオシオキをしなくちゃな」

「はあっ！？ちょ。 待て！誤解だ！誤解なんだあああ！」

バキッ。

うわ。

あのごっつい人、ドアを壊したよ。

一真君、顔に青筋立ってるし。

その場にいるみんなが、冷や汗をかいていることは間違いなかった。

「あーあ、ダメだねー。こんなところで手を出しちゃったら」

「え？あ、若松君！」

手を、出す？

ドーイウコトデスカ？

「たとえばそういう仲でも、やっぱりこういうところじゃダメっしょ」

「あ、そうそう！それ、誤解だよ」

「え？」

目を丸くして言う若松君。

カ・ワ・イ・イ

「別に、俺と一真君は、そんなんじゃないし。ただ、あの時はちょ

つと、一真君に頼まれて……」

「たっ、頼んだぁ!？」

「え……?う、うん……」

変なこと言った?

目は丸いどころか、完全に見開かれている。

うーん、何かおかしいかな?

「ただ、キスしてくれって頼まれたただだし……」

あたしが女つてことは隠して言う。

ウン、完璧

「き、きききキスウ!？」

「う、うん……」

「……そりゃあ、ヘンタイだ」

あり?

なんだか、一真君がヘンタイになつてるような気がする……気のせい、かな?

でも、今のは完璧な答えだったよね……うん、完璧だよ。
さっすがあたし!

「……ま、着替えないとな」

「あっ」

そうだった。

すでに着替え終わっている奴らもいる。

あたしは、Bカップの小さな胸をさらしで隠している……が!

結局、脱ぐとバレる。
だから、ヤバす。

「ん……と……ちょ、ちょっとトイレ！」

ダッシュだ！

ピンクの執事服を持って、トイレに猛ダッシュ！
目指すはトイレの個室。

とりあえず個室なら、着替えられる……！！

+++++

「……着たけど、さ……」

トイレの鏡に映っているあたし。

鏡の中のあたしは、ピンクの執事服を身にまとっている。

「はぁー……」

どうすればいいの？

ピンク……吐き気は何とか抑えてるけど、これ以上は……。
やっぱり、やめようかな。

でも、金銭的にも、これはストライクゾーンだし。

「……がんばるしか、ないよね」

「その通り」

「うぎゃっ！って、何だー、一真君かぁ」

一安心、だね。

でも、目の前に立っている一真君の頬がはれているような気が……

「あつたりめえだろー！アイツに何かしらねえけど殴られて、ヘンタイ扱いされて、二度とお前には手エ出すんじゃねえぞとか言われて、何度けられたことか！テメエのせいだぞ！」

「ヒィーッ！すすす、スイマセェン！」

こ、怖いー！

珍しく怒ってるよ！

いっつも怒ってるけど、まじめに怒ってるー！
んぎゃああー！

「その後も、若松陽太に、『おまえって、ヘンタイだったんだな……』とかつぶやかれて、むっちゃ寒い目で見られて……意味わかねーよ！……！」

「あ、アハハハハ……」

「笑ってる場合かぁー！」

「エヘッ」

「ごまかせるわけねーだろー！」

ぶうー。

いいじゃん、ちょっとくらい。

だいたいさー、事情を知ってるのにー、あたしの目の前で服なんて脱ぐからー。

そうだ、一真君はもともとからヘンタイさんだから、皆からヘンタイと呼ばれても、仕方のないことなんだ！

なのに、あたしに八つ当たりして……うん、懲らしめる！

「一真君」

「なんだよ！」

「……キスするから、許して？」

「……………はっ？」
「あたしのファーストキス、一真君に奪ってほしいの」
「……………」

目が驚きに満ち溢れ、顔が真っ赤になっていく一真君。
おう、耳まで真っ赤じゃん？
グッジョーブ、純情少年

「ダメエ？」
「……………別に」
「じゃ、目を閉じて？」
「……………」

素直に目を閉じる一真君。
これまた素直だねー。
でもね、一真君。

世の中、そこまで甘くはないんだよ……………。

「……………やっぱり、 Hentai……………」
「……………っ！……っな！」
「 Hentai Hentai Hentai Hentai……………」

思いつきり叫んだ後、デコピンをする。
トイレの中に、すごくいい音が鳴り響いた。

「い、いつてえええー！」
「キヤアアアアアー！ Hentaiー！誰か、助けてくれえええー！」
「……………！？ちょ、雅！？」

そっか、あたしが抱きついた人って、若松君だったのか……。

その類は、なぜか少し赤く染まっている。

そーいや、一真君も純情少年だっけ？

世の中の男子って、純情なんだな……。

「でも、そういうのされて、ヘンタイになった気持ちもわかるよ」

「……どうして？」

「我慢、できなくなるからかな」

……？

第五話 男はナデナデが好き！？

「それでは、君達の仮の住まいを紹介する。一つの部屋に二人で住んでもらう……だから、二人で家賃を払えばいい」

ふーん。

なんだ、結局二人で住むのか。

と、思ったあたしが馬鹿だった……。

「で、デカイ……」

今まで貧乏暮らしをしていたあたしにとって、目の前にある部屋は、豪邸以外の何でもなかった。

てつきり、すごい狭い部屋を想像してたんだけど……

シンデレラとかの、屋根裏部屋とか。

ベッドをどっちが使うか決める……みたいな、貧しい生活かな、と
か思ってたけど、予想よりはるかに上！！！！

「えー……それでは、番号順で行こうか。一番は二番の人と……と
いうふうに、部屋分けをしていく」

えっと、それなら、あたしは五十三番だから……部屋が一緒は、五
十四番の人かな？

誰だろう……

「五十三番の奴、いるかー？」

なにつ！？

ナイスタイミング

やっぱ、あたしって運がいいのかも！

「ハイ、ここです……って……わ、わわわ、若松君！？」

なんと、人ごみを掻き分けてこっちにやってきたのは、若松陽太君だった。

偶然！

「おっ？天音っちか！」

「そっかー、若松君と一緒になんだ。よろしくね」

ウン、なんだかこれから楽しくなりそう。

だって、若松君すごい明るいし！

それに、見ず知らずの人と一緒に住むのって……気まずい……。それなら、若松君のほうがいいよね。

「俺達の部屋、二〇三号室だっ」

「へえ。ってことは、二階？」

って、二階まであるんかい！

どんだけですか！

まあ、それはそれ、これはこれ？

「俺と一緒にの部屋、嬉しい？」

急に、若松君がニヤニヤした表情で聞いてくる。何を言っているんだ、この人は。

そんなの……

「嬉しいに決まってるじゃないですか」

「……………え……………」

「若松君と一緒にだと、テンションが上がります。だから俺、若松君のこと、好きですよ」

「す、すすすす……………好き!？」

ん？

なんだか、周りがシーンとした空気に包まれたような……………？
しかも、みんなが若松君を睨んでいるような？

「みなさん、どうかしたんですか？」

「ど、どど、どうかって、俺のこと、す、すすすす……………」

おお、顔が赤い……………。

首まで赤い気がする……………

「天音ちゃん、そんな奴はやめておけえー!」

「ソイツやめて、俺にしない？」

「……………俺、天音ちゃんのこと好きだったのに……………」

「くっそおおー!うらやましいぞ、若松陽太あ!」

……………えつと……………？

これまた、勘違い???

別に、そういう意味で言っただけじゃないんだけど……………

ま、いつか

「　　おい、雅」

「……ッ!? あ、あははは……か、一真君?」

ウゲゲゲゲ……ヘンタイさんだよー。

ヘルプミー!!!

つて、そうじゃなくて……

なぜかあたしの後ろで怖い顔をしている一真君。

ウーン、カッコイイ……。

きゅん……。

つて、そーじゃな〜く〜てー!!!

「えっと、何の用?」

「……本当に、好き、なのか?」

「……はっ?」

「だ、だから……ソイツのこと」

ああ、若松君?

この人も勘違いしてるし……。

つて、何もそこまで不安げにならなくてもいいのに……。

「一真君」

「え……?」

大人びた顔つきとは違って、なんだか小さい子供のような雰囲気。
カワイイよう……。

だって、すごいカッコイイ目なんだけどね、ウルウルって、こっち
を見てくるの!

もー、かわいくって、かわいくって………

「大丈夫だから。泣かないで？」

とりあえず、抱きつきたい衝動を抑える。
だってだって、本当にかわいいんだよ？
でも、今は……

背伸びをして、ナデナデする――！！！！

「ツツツ……！ちよつ、みみみみ、雅い！？」

「ほらほら、おとなしくしててよー」

「うつ、うつ……！」

ニヤハ、カワイイ

真っ赤になってこらえている一真君。

キュン……

カ・ワ・イ・イ × 100

「うつ、うつうつうつ、うらやましいぞ、 Hentai 野郎お！」

「俺もナデられたい！」

「うおおー！！！！天音ちゃんのためなら、俺、何でもする――

！！」

「ってゆーか好きだあああ！！！！」

「ぐはっ。もっ、萌ええええ〜」

ありやりや？

どうしたんだろう？

あ、もしかして、みんな……

「みなさん、もしかして……………ナデナデされたいんですか？」
『…………え？』

「それならそうと言ってくれればよかったのにー。その程度のお願

いなら、俺が叶えてあげますよ?。」

アハハハ、にしても、ナデられるのが好きって、みんな変わってるんだな!。」

あ、もしかして、一真君もそうなの?
だって、なんだかニヤけてるし。

「あ、あの、天音っち?。」

ノソノソ、と、顔を赤くした若松君が近づいてくる。

「あ、そうそう! 若松君、さっきの好きは、そういう意味じゃありませんからね?。」

「ふえ?。」

若松君の口から漏れた、不思議な言葉に、少し笑ってしまう。
な、何でそんな言葉が?

「ほら、友達として、です! だから、俺は、ここのみんなが、大好きです!。」

『……………つぎゃあ 天音ちゃん、好きだあああー!!!!!!』

第五話 男はナデナデが好き！？（後書き）

更新遅くなっちゃって、スイマセン…。

最近、いろいろ忙しくて……。

こんな物語を読んでくれている方がいることに驚きです！
っていうか、感謝感激……！！

それでは、またのご来場をお待ちしております

第六話 兄よ、消え失せる。

「終わったあ~~~~！」

「お疲れ様、天音っち」

あー、疲れた。

さすがに仕事はキツイかも。

執事になって初仕事。

そして、だいぶこのピンクにも慣れてきた……………

わけない!!!

うー、今でも自分がこんなものを着ているなんて、信じられない。
だってだって、この色には嫌な思い出が……。

「アハハ、天音っちって、本当にピンクが嫌いなんだね」

「モチのロンです！」

「あ、アハハハ……」

苦笑いの若松君。

それもそうか……こんなにピンクが嫌いな子って、そんなにいないもんね……。

それもこれも、全部アイツのせい……

「でも、天音っちがピンク嫌いなのって、意味あるの？」

「意味……ですか？まあ、無いと言えばウソになりますね……」

「へえー！どんなエピソードがあるの？聞きたーい！」

「俺の話なんて、つまんないと思いますけど……」

何はともあれ、あたしは『ソイツ』とあたしの物語を話し始める。そう、それが、全ての始まりだったのだ……スイマセン、大げさです。

「俺には……兄妹がいるんです。……兄が」

その兄こそ、俺がピンク嫌いになった理由……なのだろう。

「お兄ちゃあーん！」

「みいゝやあゝびいゝゝゝ」

「キャハハ」

小さい頃、あたしは兄が大好きだった。

そして兄は……世間で言う、「シスター・コンプレックス」。
つまりは……

「雅ー、大好きだあゝ！」

「きゃっ、お兄ちゃんってばー」

……あたしに、甘かったのだ。
というか、ズバリ、おかしかった。

馬鹿丸出しな感じで、はたから見れば、相当なアホ兄妹だったろうな！。

そういえば、兄はもとからアホだったけ？

「お兄ちゃん」

「なんだい、雅？」

ニコツと兄に笑いかけられ、あたしもニコツとする。
それを見た兄は、顔をニヤニヤさせてこう言ったのだった。

「雅の言うことなら、お兄ちゃん、何でも叶えてあげる」

……その言葉に、当時五歳（幼稚園児ですよ！）のあたしは、目をキラキラさせて、こう言ったのだ…。

「それじゃあねー、雅、智君のお嫁さんになりたあ〜い！」

……ええ、確かにマせていましたとも！

あたしはそのころは恋する乙女で、男の子が大好き（それは今もだけれど）！

恋愛感情で男の子を見た回数、それは幼稚園の頃だけで、三十を超えるほど…。

そつ、それはとにかく、あたしはそう言ったのだ。

智君の、お嫁さんになりたい、と。

その時は、智君が大好きだったのだ。

……かっこよくて。

ある意味、初恋、なのかな???

で、兄は、見事に固まった。

「な……、何を言ったんだい、雅？」

「あのねえー、雅、さと……」

「んぎゃああー！！！！みつ、みみみ、雅がおかしい、おかしいよママァーン！」

……実は、マザコンだったりもしたの？

そんなことを考えたのは、小学一年生でした。

おお、なんとマセた一年生！

「お兄ちゃん？」

「うつ、ウソだよな？だって、雅はお兄ちゃんと結婚するんだもん
な？」

こんな問題発言、現代社会が認めません！

でも、あたしはそれを毎日言い聞かせられていたので、そういう法律があるのだと信じていたのです。

法律…雅は、お兄ちゃんと結婚すること

……とっても素直だったよ、昔は。

とにかく、あたしは信じていたのだ。

だから……

「うん 雅、お兄ちゃんと結婚して、智君とも結婚して、昌喜君まろ喜とも結婚するの！だって、智君と昌喜君に、プロポーズされてるん

だもん」

……結婚の意味がわかってなかっただけ！
別に、魔性の女とかじゃないよ！
本当だよ！！！！

「み……や、び؟؟？」

「お兄ちゃん？どおしたの？」

「……………」

そして、兄は、恐るべき行動に出た。
なんと……

あたしに、ピンクのウェディングドレスを着せて、式場に向かったのだ……！

……式場は、結婚式場です……。

「雅、さあ、お兄ちゃんと近いのキスをしようか？」

「えー？嫌だよう、だって、智君が……」

「ミヤビ？」

ッ……！！

さ、寒気が……。

だって、あの時の恐怖が今でも忘れられないんだから！

氷のような目で、しつこくネバっこく、あたしを見つめてきたあの目が。

今でも、あたしをとらえているような気がして。

「お兄ちゃん……？なんか、怖いよ？」

「そうかい？ お兄ちゃんね……雅を奪うためなら、何でもやるよ」

[illegible]

そのとたん、あたしは逃げ出した。

ピンクのウエディングドレスを着て。

兄が、手をのばしてきて…。

そして、すぐに捕まえられて、キスされようとする……それでも、何とか逃げ出す…。

そんな繰り返し。

とっても怖かった。

とつても、とつても、とつても怖くて。

もう一度と、ピンクは着ない！

そう誓った、幼稚園時代……。

「……ってわけです」

「た、大変だね、天音っち」

「はい。その兄、本当に俺に甘かったんですよ」

「でも、天音っちも一応男なのに、助走させるなんてね」

あ
.....
○

そ、そうだった…あたし、男なんだ。
ヤバ、バレそうかも……。

「もしかして、天音うちって……」

「あ、あの！これには、ワケがあつて、深い事情が……」

ヤダヤダ！

お金がほしい！

イケメンのそばにいたい……！！

「もしかして……」

「うわあああー！」

「……昔から、女の子みたいだったの？」

「うわあああ……って、へっ？」

い、今、何て？

女の子、みたい、だったの……？

つ・ま・り……

「バレ、てない……」

「何が？」

「ううん、何でもない」

よかったー…。

いくら若松君とはいえど、兄の話はもう二度とごめんだ。
それにしても……

今頃、どうしてるんだろうか。

お兄ちゃん……元気かな？

お兄ちゃんの名前は、あまねいつき天音一樹。
とんでもない、シスコンだ。

第七話 現実逃避ですよ、ハイ。

「ねえねー、天音っち、お風呂どうする？」

「あ、えと……」

「住み込み専用の銭湯があるらしいよ？スゲエよね」

「あ、あの、俺は……ッ」

ヤバイ。

ヤバイよ、今。

だって、なんだか知らないけど、お風呂と一緒に入ろうと誘われて
いる状況。

ちなみに、ここには、住み込み専用の銭湯と、各自部屋についてい
る普通の風呂があります。

勝手に銭湯でも何でも入れっ！

とは言えないので、とりあえず苦笑い。

「ん……とね、えっと……俺、住み込み専用の銭湯、行かなくても、
いい、デス。あ、の……他人と、一緒に入る、とか、ありえない、
しッ」

きつと今、あたしの顔は真っ赤になっているであろう。
いやいや、だって、男子と一緒に風呂なんて……

見たいつー！

男の子の入浴シーン……か、カッコイイんだろうな……。

イケメンウォッシングをかかさずやっているあたしとしては、これはぜひとも行かなければならないチャンス！

な・ん・だ・け・ど……。

男の子と一緒に風呂に入る……ということは、当然、「あたしの着替え」とか、もつと言えば、「あたしの入浴シーン」……つまりは、「あたしの裸」が見られてしまうわけで。

そうになったら、一環の終わりなわけで。

パラダイス消滅！

タララー、ズツチャ、タラリタララー……。

とつ、とにかく……！

夢のご一緒入浴は無理……！！

「天音っち、本当にいいの？」

「モッチロン！俺、一人でのんびり入る方が好きだし……って事で、じゃーな！」

若松君がしつこく聞いてくるけど、丁重に断っておく。

だって、パラダイスの消滅は嫌だから

「さーてと、お風呂に入ろうつと」

若松君がいなくなったので、何の心配もなく服を脱ぐ。

そして、その瞬間、思い出してしまった………ピンク、の事を。

ううー、は、吐き気が……ッ！

急いでピンクを脱いで、お湯につかる。

っひゃあゝ、癒されるう

「んゝ、気持ちいい…」

あー、そういえば、お兄ちゃん……。

小学校の頃から兄が嫌いで、それなのに兄が追いかけてきて……

はあー……。

「あたしって、案外苦労してたのかな…」

今更！？

とかいうツツコミは禁止！

ほら、あたしって、案外鈍い……のかっ！？

「アハハ、まさか、このパラダイスに兄が攻め込んでくるわけないしねゝ。今頃、他の女の子と遊んでるのかなゝ」

そう、その時は、ほんの冗談だった。

本当に、冗談っていうか、独り言っていうか……

な の に 。

アイツは……やってきた。

「みいいいいーやあああーびいいいいー！」

……。

アハハハ、やだ、何この冗談〜。
笑えねー、まじめに怖い〜。
でも、まさか現実なわけ……

「雅いいい！」

バンツ！

あ、アハハハハ……やだ、現実なわけ……

「みいやあびい？ “お兄ちゃん” が、迎えに来てやったぞ」

ゾクツ。

現実、なわけない。

いや、なわけないと願います。

ってか、ありえねー、まじめにないよ、この展開。

作者の馬鹿野郎ー！

「どうした、雅？ 知らず知らずの内に、こんなに大きくなっちゃって
かわいくなっただね〜」

ピタ。

……あり？

な、何だ、今の、「ピタ」は。
いや、「バンツ」とか、「ゾクツ」くらいなら我慢できるよ？
でも、ピタ、って……

「もうー、胸もこんなに発達して、お兄ちゃん嬉しいよう」

ム・ネ……？

今、何て言ったの？

胸。

それで、あたしの胸に添えられているこの手は何？

じょうきょうりかいしました…

……現状理解。

い……い……い、い、い……

「き……きや……、きやあああああああ！……へ、へへへ、へ
ンターイー！」

い、い、い、い……いやあああああ！

バチン！

お風呂場に、ビンタとあたしの悲鳴が響いたのは、言うまでもない。

「い、痛いなあ、雅ってば」

「お、おおお、お兄ちゃん！？」

「ひっさしぶりい」

「……。んぎやあああー！！！」

往復ビンタの音が鳴り響く。

そうすると、さすがに人が駆けつけてくるわけで。

それが、運がよいのか悪いのか……。

「どっ、どどど、どうした雅！」

なぜか……なぜか、駆けつけてきたのが、一真君でした、チャンチ
ヤン

「……キヤアアアー！！！！と、とにかく出てけ馬鹿野郎オオオ！」
「雅！？……ぶぶっ！（鼻血が飛び出る）み、みみやびい？き
よいちゅは、ぢやれえ？（み、雅？こいつは誰？）」
「ムム！おまえは雅の何だ！俺は、雅の婚約者、そして兄の天音一
樹だ！」

ううー、頭が痛い……。

お湯につかっていたので、全裸は見られなかったけど……

鼻血で、お風呂場が真っ赤だよ…。

それに、お兄ちゃん？

何でここにいるのよおおー！！！！

「あー……、め、めまいが……ッ」

「えっと、あなたは、いったい……？」

俺は今、かなり焦っている。

目の前に立っているこの男、いったい何者なんだ！？

俺は橘一真、執事だ。

それも今日から。

まあ、金銭上、この仕事は結構ストライクで、このお屋敷にいる。

「おまえこそ、何者だい！」

「おつ、俺は……ッ」

立っている男に指さされて、余計にとまどう。

俺は……

「……雅の、友達、だ」

な、なんか、友達って言葉が胸に突き刺さるんですけど！？

あー、もう、なんか意味わかんねー……。

俺、どうなっちゃってるんだ？

ここにやってきた時から、なんだかおかしかったんだ。

雅に、その……キス、とか、されそうに、なって、その……。

少し、嬉しかった、のか？

いや、そういう経験がないわけじゃねーし、むしろ結構経験豊富な

方だけど、なんか……調子が狂う。

あと、雅が他の奴と話してても、いらつくし……。
あー、わけわかんねえっ！

「ふーん。僕は、雅の兄だよ」

「さっきも聞きましたけど……兄ってことは、兄妹きょうだいですよ？結婚
できないんじゃない？」

「僕と雅は、家族の壁を乗り越えるのさ！」

……そう言う割には、雅がスツゲエ嫌そうな顔だったんだが……？

「とにかく、雅の友達、に負ける気はないからね！」

ビシツと言われお手、なんだかへこむ。

目をそらしたところにあつたのが……

「ぶっ！」

本日二度目の鼻血ブー。

目をそらしたところにあつたのが、その……ッ！
し、した、した、した……下着、だ。

ピンクの、ブラジャーが、置いてあつて、なんか、その、生々しい、
つつーか……。

うぐあ、俺、とまどいすぎだろ！

「……？……ああ、下着かい？雅の下着くらい、どつってことないね
！何て言ったって、僕達は兄妹だから」

鼻を鳴らして笑うお兄さんに、なんだかムカついた。

ケンカを、売っているらしい。

「……負けません。友情は熱いんですよ？」

売り言葉に買い言葉、こつちもケンカを売ってみる。
少しだけ、お兄さんの表情が変わった。

「お兄ちゃんに、一真君！着替えられないから、部屋に行つてよ
！」

『はい』

待つてろよ、雅。

俺が、おまえを奪い取る。
お兄さんの手の中からな。

第七話 現実逃避ですよ、ハイ。（後書き）

更新遅くなりました……スイマセン。

忙しいんです、アタシも！

……ハイ、ごめんなさい……。

第八話 ん、ウザイ

「ん、ウザイ」

「いや、そんなツンツンしてる雅も、カワイイ」

「……ん、ウザイ!!!」

さつきからそんな会話ばかり。

とりあえず、パジャマに着替えて出てきたものの、目の前に広がる光景を見たときは、かなり焦った。

……………なぜか、兄と一真君が、あたしのバッグから……………あたしの下着を、取り出して、奪い合っていたのだ。

テメエ等、何やってんだよオオオオオオ!!!

だいたい、兄は元からヘンタイだったけど、一真君は、そこまでじやなかったじゃん？

何いきなりヘンタイ争奪戦に参加してるのよアンタ。

それに、なぜに下着!?

いやね、まだ服なら、「ヘンターイー!」で、五発程度殴れば気が済むよ?

でもね、乙女の下着にさわるとかね、まじめにありえないから。

ストーカー行為として、警察に通報するから。

いや、世界のキモイ奴ベストファイブ!くらいなら乗れる気がするし!

「あ、あの、さ……」

「何、一真君!」

「あつ、あれは、誤解だからっ！俺は、ただ…」

「あれのどこに誤解を生む要素が！？わかるのは、アンタ達があたしの下着を勝手に取り出して奪い合ってたことよ！ついでに言えば、ヘンタイってわかるから！ズバリ、ヘンタイよ、ヘンタイ！この世に存在する価値なんてないんだわ！いくらイケメンでも、ヘンタイだとイケメンの価値が下がるってものよ！全世界の、不細工だけでもじめ君に謝りなさいッッッ！」

ビシッと決める。

ハイ、ここでの、「不細工だけどまじめ君」などによる苦情はお断りです

これを読んでいる方々の中に、そうゆう方がいたら、まあ……許してエ

「ま・とにかく、お兄ちゃんも今日からこの執事だからな 雅と一緒に仕事できるなんて、一樹感激イ」

……ヘッ？

えっと、今、なんかおかしな声が…。

「これで、お兄ちゃんと雅は永遠に一緒にいられるよ」

……ナンデスト…？

「あの、兄？」

「雅ってば、お兄ちゃんって呼んで」

「……兄よ、今なんと言ったのだろうか。少しばかり耳が遠くなくなったよ」

「だーかーらー……」

ここで、ニツコリ。

兄の満面スマイル。

あー、少しドキリとしたけど、トキメキはこない！

「お兄ちゃん、ここで働くことになったヨ」

な、な、な……

「な、何だとオオオオオオオオオー！」

なぜか重なった、あたしと一真君の声。

それでも、今はそんなことはどうでもよくて。

兄の言葉だけが、頭の中でエンドレス…

「ハタ、ラク……？兄、が？あたしと、一緒、に……」

「ちよっ、雅の兄さん、どーかしてんスカ！？アンタと雅が一緒なんて、夜中に忍び込んでピイイーツ、や、ピイイーツ、とかし
そうじゃ……」

「何言ってんのよツツツ」

なぜかその場にあったハリセンでツツコミしてから、兄に向き合う。
兄の目は、希望に満ちあふれている（今あたしの目は、絶望に満ちあふれているであろう）。

「オホン。兄よ、本気？」

「モチロン、本気絶対マジ！」

……ヤバイ。

何がヤバイって、兄は働くということができない体質なのだ。たとえば、お手伝い。

小さいときにやらされたアレ……とても簡単なはず、だ。だが、兄は……

「おかあーさん、お皿を洗えばいいのぉ？」

「あら、一樹はいい子ね。やってくれるかしら……。ッ!？」

「トリヤ!」

ガシャーン、バーン、ごーん! BGM。

「ちよ、いつ、き……?」

「ハイ、お皿、洗ったよ?」

「えと、その、あの……」

「でもね、疲れちゃったから、お皿で手裏剣してイイ?あと、コップも使っちゃダメ?お箸でヒーローごっこは?」

「い、一樹……。もう、やめてちょうだい……」

「???」

後ろには、割れた皿、コップ……おられた箸、グニヤリと曲がったスプーン、刃の部分が切断されている包丁……。

こうして、母は二度と兄にお手伝いをやらさせませんでした、チャンチャン

「ってわけで、兄はお願いだから家にいて!ほら、お金はあげるから!」

「だいじょーぶさ、僕ももう大人だよ。昔みたいなヘマはしない」

「そ、そうだよ雅。雅の兄さんだって、子供じゃないんだしさ」

「そ、そうかな、一真君」

ウー、確かに兄も成長したみたいだし、少しくらいなら……

「大丈夫、“皿の手裏剣で的を当てられるようになった”から」

……だ、ダメだこれは。

進歩してねえええー！！！！（っていうか逆にダメ度が上がってるよ兄！）

「……兄よ」

「なんだい、雅」

ニツコリと満面の笑みで振り向く兄。

その笑顔を見て確信する。

コイツは、本物の馬鹿だ、と。

「……これ以上、ダメ度を上げないでね」

「????」

「でも、これ以下って事は、ナイよね？人間、沈むところまで来たら浮上するって言うし……」

でも、兄の場合はどうだろうか。

例え、そこが海底の一番下であっても……兄ならば。

「フッ、心配するな雅。僕は、今度は箸ヒーロー……この技を磨いてこの地にやってくる差！」

……兄ならば。

海底の一番下であっても、その土を潜って下へとやってくるだろう。まるで、底なし沼のように。

「雅？どうした？」

馬鹿の底なし沼……そんな言葉が、頭をちらつく。
そして、あたしは……

あたしは、馬鹿の底なし沼に、片足を踏み込んでしまったのかもし
れない。

そんな不吉な考えが、浮かんでしまい、顔が青くなるのを感じた。

第八話 ん、ウザイ（後書き）

うー、ノロノロ更新……。

まるで、カメ。

いや、カタツムリに近いかも…。

ゆなかりかカタツムリ……？

キモチワルッ！

と、とにかく、これからもがんばりまーす……。

第九話 一緒にオネンネ？

「たっただいまあー！天音っち、お風呂入った……って、誰？？？」

「あ、若松君！」

「よう」

「……君が、雅と同じ部屋の住民か」

いや、兄、思いつきり殺意がこもった目で若松君を見ないで。
ホラ、若松君思いつきりおびえてるし！

「あと、えと、天音っち？」

「はい、何でしょうか若松君」

「この人……誰？」

あー……。

説明しなくちゃいけないのかな……。

嫌だな、嫌だな……。

「……あにです」

「え？」

「……兄です」

「あ、あに……って、お兄さん！？ま、前に話していた、あの、天音っちのことが大好きって言う？」

「……そうです」

チラッと兄を見る。

「雅つてば、お兄ちゃんの事話してくれてたんだね」と、キラキラ目線で見ってくる兄。

ああ、どうか夢であつてほしい……。

「ハア―イ、君達、元気か―い？」

『あ、ご主人様！』

そこに、どピンクの衣装を着てやってきたのは、あたし達のご主人様。

寝間着もピンクで、吐き気が舞い踊ります…。

「えっと、ご主人様？本当に兄を雇うのですか？」

「もちろんさ」

「……」

ご主人様の声とウインク（下手だな）が、胸に突き刺さりました。あー、まじめにこの仕事やめようかな…。

「……ご主人様」

後から入ってきたのは、金髪イケメン（きゃっ）の中原さん。うう、いつ見てもカッコイイ……。

「おお、レオ！いいところにやってきたな」

「……………それより、いい加減にこのピンクの服を何とかしてください！」

「嫌」

くくっ。

な、なんか、中原さんがピンクって……………

似合わないえええええー！

他の人もそう思ったのか、必死に笑いをこらえている人、数名。若松君なんて、そっぽを向いてるけど、肩震えてるし。そんなことを言うあたしも、手で口を押さえている状態。

だが、ただ一人だけ、常識を知らない人がいた……。

「ぷはっ！な、何ですか、そのピンク！似合わないですね……！」

……そう、兄だ。

ただ一人、笑い転げる兄に、中原さんもムツとする。つていうか、中原さんの後ろに炎が見えますー、なぜでしょう？

「……ご主人様、この、非常に失礼で礼儀をわきまえていない常識知らずの無礼者……は、どこのドイツですかっ!？」

「ああ、新しく入った執事だよ」

「……………もう、勝手にしてください……」

あ、炎が消えていく……。

ご主人様に言葉の水をかけられて、しばんでいく炎。そして、燃え尽きたところで、中原さんは去っていった。

ドンマイ、中原さん。

「さて、本題だ！雅君……！」

「は、はいっ！？な、何ですか？」

いきなり名前を呼ばれてとまどうあたし。

その様子も関係なく、ご主人様は、ビシッと一言、こう言いました……。

「今日、僕の部屋に来なさい！一緒に寝ようじゃないか！」

……は、はiiiiiiiiiiiiiiiiiiii！？

目がテンになっているあたし達。

誰もが話せない状態の中、たった一人動いた人……それは……

もちろん、兄でした。

「をい、おまえ！うちの雅に手エ出そうなんて、百年早いんじゃないボケイ」

「手？そんなものは出さないぞ？」

「ああ？ツテメエ、しらばっくれようと言っのか？」

ああ、空気を読まない達人の兄……ある意味尊敬します。

「えっと、ご主人様？」

「なんだい、雅君」

「えと、ですね……。なぜ、俺と一緒に寝ると？」

「そりゃ、君がカワイイからさ」

あー……こりゃ、ウザいわ。

「えっと、手を出すとかじゃなくて、ですよね？」

「ああ、モチロンさ。男に手を出すような馬鹿がどこにいらんだい？」

いや、あたし女ですから。

ツツコミたかったけど、そんなことを言ったらここから追い出されてしまうので、我慢我慢。

「……まあ、いいですよ？俺は別に、誰と一緒に寝てもいいですし」

「ええええええええええ！！」

「よし、じゃあ、早く僕の部屋に來い！ いわば抱き枕だ！」

「はい」

ラン、ラン、ラン と歩いていくご主人様の後を歩くあたし。

ま、お金のためだし、いっちょやってやるうじやないの。

「それじゃ、皆さん、行ってきますね？」

あ

「ご主人様、待ってくださいーい！」

この空気は、さすがの兄も壊せなかつたみたい……。
そんなことを考えながら、あたしは広い廊下を歩いた。

第九話 一緒にオネンネ？（後書き）

うひゃっ、この前の更新から、こんなにも時間が…。

スイマセン……。

うう、こんな自分を呪いたい！

と、とにかく……。

いつも謝罪ばかりで、今度こそは、きちんと書きたい！（たぶん無理）

きつと、書いてみせるぞ！（絶対無理）

ウーン、でも、少し面倒くさいかも（その調子じゃ無理だな）

ま、こんな私を見守って……。

第十話 一緒にオネンネ？

「さ、おいでよ」

「ハイハイ、ご主人様」

ピヨコ、と腕を広げられて、あたしはノソノソと布団に潜り込む。
なんか、子どもっぽいなあ、ご主人様。

ニコニコツとして、寝ようとするご主人様に、あたしもニコリ。

……そう。

この、ご主人様が来ている“ピンク”の寝間着さえなければ、上出来なのだけれど。

「ご主人様、本当にピンク（うえっ）が好きなんですネ」

「ああ！ピンクはかわいいからな！」

この人、純粹にピンクがすきなんだな…。

あたしとは逆だ。

「あ、そうだ！君のパジャマもピンクにさせてあげるよ！」

「結構ですから」

ジャージに、ダボダボのTEEシャツという、のんびりスタイルの
あたし。

ピンクなんて着たら、背筋ゾクゾクで眠れないし！

「ご主人様、女の子苦手なんですよね？」

「……ああ」

「どうしてですか？」

「そりや……、僕が、ピンク好きって言ったら……馬鹿にしたから」

そりやそうだ。

あたしも、その場にいたら確実に大笑いして、からかっている。

「まあ……確かに、“変”ですからね」

「ぐっ！……！つちよ、ハッキリ言いすぎ……っ」

「だって、女の子が着ても色が濃いピンクを、男の子が着たらかなり色の濃さが増しますから。だいたい、男子でピンク好きなんてちよつと引きます。男として、それはどうかと思いますよ」

「んぎやつ！い、今、言葉の刃が突き刺さった……」

「それに、気持ち悪いし」

「んぎゅっ！」

「ウザイし」

「はぐっ！」

「オカマっぽいし」

「ぎゃあああ！」

あたしの言葉に、いちいち飛び上がるご主人様。

ああ、なんかもうボロボロなんですけど……。

気のせいか、少しやつれてません？

「だけど………人それぞれ、ですからね。まー、ピンクが好きで

も、いいと思いますけど」

「えっ……」

なぜか驚いた顔をするご主人様。

まー、さっきまであたし、言葉の刃をグサグサ刺してたしな。

「ま、いいんじゃないですか？」

「……僕、をつ……。認めて、くれるのかいつ？」

ミトメル？

どう意味だ、それ。

そんな疑問を胸に抱き、ご主人様の顔を見ると……

泣き笑い？

そんな顔であたしを見ていた。

すぐるように……おねだりするように……。

「……認めるも何も、それがご主人様……あなたでしょう？」

認めたくない。

ピンク好きの男子なんて。

でも、そんな気持ちとは裏腹に、なぜか飛び出てきた言葉。

それはきつと、ご主人様が涙目であたしを見つめてきたから。

すべては、ご主人様が悪い……。

「うつ、ふえ……ん……」

女の子みたいな鳴き声を上げて、なぜか泣きついてくるご主人様。
この、弱虫！

とは、この場面ではさすがにいえなくて。
どうするか迷った結果、髪をなでるくらいしか、あたしにできることはなかった……。

「ん……」

ん？

何だ、この感覚。

何かが、体にくっついてる？

シーツが巻き付いた？ いや、そんなはずはない。

…それなら、これは何？

眠気が、一気に吹っ飛んでいった。
今まで開くのをためらっていた瞳。
でも、この状況を確認するために、嫌でも開かれる。

そして、飛び上がろうとしたのだが……

「んーっ!?」

あたしは、声にならない悲鳴を上げただけなのである……。

えっと、どういう状況？

起きあがれない、飛び上がれない、叫べない。
よって、ピンチを切り抜けない。

つ、つまり、あたしの体に今、何かが巻き付いている。
その何かっていうのは……………

「ぐ、ごすじうはま!? (ぐ、ご主人様!?)」

声を出すと、頭に巻き付いている腕が、きつくしまった。
そして、よりご主人様と密着。

そう……あたしはなぜか、ご主人様に抱きつかれている。
しかも、体が完全密着。

ズバリ、手も足もでない状況って感じた。

そういえば、ご主人様、「抱き枕」とか言ってたっけ？

あのときは言葉の意味を考えなかったけど、こういうことか……!!
!!

……しかも、Ｔシャツのおなかの部分がめくれていて、少し変な状況に見えなくもない。
裸とかじゃないけど。

っていうか、断じてありえないし！

一応今あたし、男だし！！！！

「ご、ご主人様、起きてくださいっ」

「んうゝ？気持ちいいゝ」

ぎゅっ。

これまた、思いつきり抱きしめられて、心臓が飛び出しそう。
とき、とき、ときっ……。

ご主人様イケメンだから、ときめかないことはないのだが。
だが……、

ピンクウウウウウウウウウゝゝゝ！

そう。

この甘々な雰囲気をぶちこわしにたくはないのだが、あたしはピンクが嫌いだ。

よって、このピンクの寝間着を着たご主人様に抱きつかれているのは、許せることではない。

っていうか、気持ち悪い……ッ。
は、吐き気が……。

「ご主人様、朝です」

ダンッ。

ものすごくいい音をたてて開くドア。
そこには、金髪イケメン……というか、中原さん。

「な、なかはらさ……っ」

「失礼しました。ごゆっくり」

……って、ご、ごゆっくりいいー！？
待て、待て、待て……！！
誤解、誤解、誤解……！！

っていうか、助けてえ！

ヘルプ・ミー！

金髪イケメン、カムバアーク！

第十話 一緒にオネンネ ? (後書き)

遅くなりました…。

テヘ

って、かわいくないですね…。

第十一話 初！s c h o o l デビュー

えっと、これって、「冗談???」

目の前にデーンとそびえ立つ物は、黒い車。
それは……ものすごおおおく、長いのだ。

「でかッ」

た、たかが学校に行くだけなのに……。

そう。

今日は、執事になって初めての、「高校」に行くのだ。

せいやがくえん
聖夜学園。

校則が全くない、少し(?)変わった学園。

なかなかのお嬢様学校なので、庶民のあたしは入れるわけがない
……の・だ・が！

実はあたし、勉強は得意。

というわけで、奨学特待生として、この聖夜学園に入学したので
す……。

「はあああああ~~~~」

でも。

入学した時あたしは、「女の子」だったのだ。

今は、れっきとした「男の子」。

だから、あたし……雅ちゃんは、「転校」したことになっている。
そして、今の俺……天音君、が転入してくるのだ。

「ああ……こうなると、あのすばらしいスクールライフが懐かしい
……」

女の子の友達、たくさんいたのになあ……。
今度は男友達ができるのか……。

あ、バレないかな……。

「うー、バレたら、パラダイス、があ……」

「雅」

「え???」

あ、イケメン……じゃなくて、一真君。
どうかしたのかな?

「お前、聖夜学園の、“女子生徒”だったんだろ」

「うっ、」

「つてことは、バレたらヤバイよな……」

はぐっ!

こ、言葉の刃が……ッ。

ほえええん、そんなに言わなくても……。

「ほらよ」

「……………」

ポイ、と投げ出された物を空中でキャッチ！
って、コレ、何？

渡された物は、黒いぶちメガネ。
何、コレ……。

「それかければ、少しはごまかせるだろ」

「あつ、ナルホド！」

「パラダイス、消滅されちゃ困るらしいし」

そう言つて、ニヤリと不敵に笑う一真君。

ああ、カッコイイ……！

さっきまでが、「不幸のどん底」だとすれば、居間は、「幸福の頂上」とでも言えいいのか。

「ありがと、一真君」

そう言つて、ニツコリと笑みを向ける。
すると、一真君は一気に真っ赤になつて……

「っ、べ、別つ、に……！たいした、事、じゃないっ！オッ、俺、はっ」

うつひゃー、ツンデレかよ！
なんか、カワイイ……。

真っ赤な顔でアレコレと言ひ訳をする一真君は、まさにツンデレ！
こつつまりはあたしというのは、主人公がやるはずだけど、いつか

「ん、ツンデレLove……」
「はあ！？」

いゃん、そんな表情で見ないで…。
本当に、カワイイんだから

「よし、これできつとバレない！パラダイスは永遠不滅、ララララ
ラ」

ああ、踊りだしたい…。
にしても、さっすがイケメン君！
考えることが違うよね、うん。

「それじゃ、しゅっぱあーっ！」

+ + + + + + + + +

「このクラスに転入生が来たぞ。入って来い」

そんな先生の言葉から始まった、あたし……。いや、俺の新しいス
クールライフ。

運がいいのか悪いのか、転入したクラスは、前にあたしがいたク
ラス……。つまり、バレる可能性がアリアリなわけ。

「やあ、みんな、よろしく」

あ、ご主人様……。

どピンクの制服を着て（そんな制服あるの！？）現れたご主人様
に、クラスはざわめいている。

それもそうだ。

いきなり現れた転入生が、イケメンで、それなのにピンクの制服

を着ていたのだから。

「桃原スモ君だ。なんと、あの桃原財閥の息子さんだ。今までは、海外にいたので、この学園には入っていなかったそうだよ。みんな、仲良くしてやってくれ」

『ハニー!』

へえー、ご主人様、海外にいたんだ…。
ってことは、英語とかペラペラ？

「で、この人達が桃原君の護衛……つまりは、執事ということだ」

教室中が、ザワザワ、ザワザワ……。

まあ、ね…。

いきなり、ピンクの執事服を着たイケメンが登場したら、驚くよな…。

あたしも、もしクラスの人達だったら驚いていたと思う。

今は、あたしがこの「ピンクの執事服を着た意味分らない人」というレッテルを貼られているので、驚けないけど。

「どーも、若松陽太って言います！よろしくな〜っ」

「橘一真だ。よろしく」

このクラスに入ったのは、あたしと若松君と、一真君とご主人様。ご主人様が指名した、らしい。

でも、何であたし????

「どうも。俺、天音雅です。どうぞよろしく」

さて、バレるか……っ？

パラダイス消滅か、それとも……

「アマネ、ミヤビ？　そういえば、そんな名前の女子がいたっけ……」

「あー、いたいた！　懐かしいね」

「っていうか、すごいな、名前一緒とか」

「ある意味運命だね」

ば……、バレてない！！！！！！

ヤッタね、やっぱりパラダイスは、永久に続くよね！！！！
グッジョーブ

メガネの威力はすごい！

そう思っで一真君を見ると、一真君は指で「グッド」とやっていた。

おう、グッドだよ！！！！

「それじゃ、その四人は後ろに席を用意したから。桃原スモモ君を守るようにして、三人が座るように」

『はい、先生』

ヨシ、なんだか順調？？？

第十一話 初！s c h o o lデビュー（後書き）

スイマセン、更新遅れました……。

えっと……。

すいません！……！！

っと、ここで宣伝。

あたしは、連載を三つ（ウツヒヤ〜）掛け持ちしています。
ひとつは「恋する乙女はピンクが嫌い？」。

そして、「神様に恋愛の休日を」という話もあるんです。
今度はソッチを更新する予定なので、よろしくデス。

第十二話 モテモテな“俺”

も、モテている……ッ。

「あもう、雅クンのお、好きな食べ物はある、何ですかあ？」

「天音クン、すごく肌がキレイね。髪もサラサラ！女の子みたい」

「好きデスッ！付き合ってください……！」

モテモテだ、俺……。

そう。

あたしは、同姓にモテている。

いやあ、みんなカワイイけどさ……あたし、百合ではありませんから……！！

健全な女の子ですから……！！！！

「ご、ゴメン、みんな……ッ。えと、中杉さんに、前田さん、東美也さん……」

『私たちの名前、覚えてくれたのおお……』

そりゃ、この前まで同じクラスだったし！

とはいえないので、ニヘラつとほほえんでおく。

「私い、メガネフェチなんですう」

「私もあ」

「黒いぶちメガネとか、私のハート直球ど真ん中！」

め、めがねふえち……？
マジかよ…。

『きゃあ~~~~！』

『イツヤア〜ン！』

え…？

隣から、黄色い悲鳴が。

あ、一真君と若松君……？

さすが、イケメン！

モテモテだなあ。

「みんな、とってもカワイイんだね」

と、甘あ~~~~い言葉を言っている、若松君。

につこりスペシャルスマイルと一緒に、甘い言葉……女の扱いに慣れてるよ、この人…。

「どけ、邪魔」

と、クール（というか冷酷）な言葉を言っているのは、もちろん一真君。

相変わらずクールだ…。

「おい、僕の事を忘れていないかい？」

あ、ご主人様。

「あ、ご主人様”じゃないよ！ひどいよ、君たちの主人を忘れるなんてツ。ほえええゝん、ひどいよう…」

面倒くさいな、この人。

でも、突然泣き出したご主人様を、女の子が取り囲んでいる。

「カワイイですー！！！」

「ずっきゅん・ラブ・ラブ！」

「ピンクは嫌だけどお、かつこいいから許しちゃう」（許すなッ）
「お金持ちなんて、素敵」

うお、意外と人気者？

目の前にいる女子達に、ご主人様はおびえて……そして、こつちをウルウルとした目で見てくる。

……って、それは、助けを求めていますか???

「……ハア……」

しょうがない、な。

女の子、苦手なんだよね…。

「ご主人様、学校、探検しましょうか」

「……、うん……」

ああ、ピンクを着た状態で、そんなカワイイ顔されても…。

カワイイけど、カワイイけど……！！

確かに、カワイイけど！

ピンクは許せないッ！

「雅ッ」

「天音っち！」

「一真君、若松君！」

どうやら、女子の相手に飽きたらしい。
イケメン、飽きるの早い！！

『ご主人様、行きますよ！』

あたしはご主人様の右手を、若松君は左手をもって、走り出す。
ちなみに、一真君は、あの鋭すぎる目線で、迫ってくる女子を倒している（一真君が睨むと、マゾの人もそうでない人も、殺られるのです！）。

「つて……」

み、んな、足、早い……。。

女子と男子の差は大きいな、やっぱり。

「ええ〜？天音っち、もうダウン？」

「も、無理いいい〜」

へにゃん……。

砂漠にいるみたいに、暑い……ッ。

何故か、オアシスの幻覚が見えるんですけど…。

「仕方ないな〜。ほら」

「ふえ………？」

若松君が、屈む。

何をするんだ???

「ほら、おんぶしてやるよ」

「お、おんぶう!?!」

はぁ~~~~!?!?

何、普通に女の子をおんぶするなんて言っちゃってる訳???

って……あたし、今、“俺”じゃん。

……それなら……、いつか。

「お願いッ!」

バーン、と背中に乗れば、若松君の口から、「うつ、」と、うめき声が……。

失礼な!

っていうか、若松君、背中大きい。

男の人って、みんなこうなのかな……。

なんか、すっごく、暖かい……。

「天音っち、意外と重……」

「んだとお、コラぁ。それ以上言ったらぶっ殺す!」

くっそぉ~~~~。

みんなして馬鹿にするんだから、ムキー!

「でも……」

「ん？どうした、天音っち」

「ありがとう」

若松君の耳元で、そうつぶやくと、若松君の動きが止まった。
気のせいかな、耳も手も真っ赤。
顔が見えないのが残念…。

「雅、大丈夫か？」

「雅君！」

「あ、一真君とご主人様！」

「……あ、橘に、ご主人様……」

まだほのかに赤い顔で、ピョコピョコと手を振る若松君。
ずきゅんっ、カ・ワ・イ・イ

第十二話 モテモテな“俺”（後書き）

よし、更新〜〜。

やっぱり、クーラーいいなあ…。

クーラーをガンガンに効かせた部屋で、ゴロゴロしながら小説を書く……。

シアワセ

第十三話 友よ、あたしは女だ。

「にしても、アイツ等ウザ…」

そんな言葉をつぶやいているのは、“もちろん”一真君。
ああー、そんなこと言ったら、せつかくの美少年が台無し…。

「まあ、確かにしつこいよね…」

わ、若松君までっ。

そんな、全国の美少年ファンの夢を壊すような事を言わないでっ！

ちなみに、“アイツ等”とは、クラスの女子のことです。
はははっ、みんな、ドンマイ！

「でも、僕はそんなに嫌いじゃないけど…」

おお、さすがご主人様！と、言いたいところだけど……

そのピンクを好んで身にまとっている時点で、全国の美少年ファンの夢を壊している……！！

と、あたしは言いたい。

まあ、とにかく、何はともあれ、女子からは無事逃げ切れたわけ

です、チャンチャン

「あのなあ、雅、オマエ、のんきすぎるぞ」

あきれた一真君の声。

でも、イケメンはこんなことを言っても様になってる。

実は、さっきの、「にしても、アイツ等ウザ……」も、結構かっこよかったのですう!!!

「あ、天音うち？何か、別世界に飛んでる気がする……」

若松君、気にしないでいいよ。

今あたし、「イケメンの世界」に飛んでるから！

「あ、あのっ……!!」

ピーーーンッ！

この声は……っ。

瑞穂^{ミスホ}……!!

「ちょっと、いいですか？」

上目遣いであたし達を見るその姿は、完全に恋する乙女。
にしても、瑞穂……懐かしいなあ……。

青木瑞穂^{アオキミスホ}、あたし達と同学年で、同じクラス。

瑞穂は、あたしの、“親友だった”。

今は、あたしが男装しているの、“女子”として瑞穂と話すこ

とはできない…。

あ、でも、メル友なので、毎日メールで会話はしてるけど…。

「あ、天音君につ、お話、が……ッ」

「……はっ？あ、あた……俺っ？？？」

う、嘘でしょ…？

いやいや、瑞穂の“お話”っていうのが、“告白”とは限らないし。

でも……この、真っ赤な顔から考えると……やっぱり、告白？？？

とか何とか、のんびり考えている間に、瑞穂に連れて行かれたのは、体育館裏。

ああ、告白の定番だねえ。

……いや、告白と決まったわけじゃないし……！

「えっと、俺に、何の用かな？」

とりあえず、笑みを崩さずに聞いてみる。

ここは、相手の出方を伺うのです！

「好きですっ！一目ぼれしました！付き合ってください……！」

……出たあー！

やっぱり、告白だったのかー。

瑞穂ー、あたし、雅だよー。

男じゃないよ、女の子だよー。

アンタのメル友の、雅なんだよ、気づいてー。

「あ、アハハ、瑞穂ちゃん。気持ちは、うれしいんだけど…」

瑞穂ー、アンタが恋したのは、女の子です！

「ごめんね。俺、そのお……」

「いつ、いいんです、別に！いきなり、付き合っていただけでなくても！あ、あの、友達からいいんです！だから、とりあえず、携帯の、メールアドレス教えてください！」

み、瑞穂お…。

友達からでいいんです！って言われても、もともと友達だから！絶対あたしの笑い方ひきつつてるよ…。

「メールアドレス、ね…。いいよ、別に」

とりあえず教えておけば、おとなしくなるよね…。

親友と話すのは楽しいけど、この状況で瑞穂と話すのはキツイ…。

「あ、ありがとうございますっ」

その後、メルアドを教えてから気づいたこと。

そういえば……あたし、“女”としても、瑞穂にメルアド教えてるよ？

「やった、メールアドレスゲット……。……って…あれ??？」

「どうかしたの、瑞穂ちゃん？」

瑞穂ちゃん、って呼び方疲れる…。

でも、一応今は初対面だし…。

のほほんとしていると、瑞穂が冷めた声で、つぶやいた。
その言葉は、あたしを凍らせたのです……。

雪女並みの言葉だよ、ホント。

「……このメールアドレス……“雅”と一緒にだ……」

……。

ば、ば、ば……バレたあああああああ！

「み、ずほ、チャン？」

「……そういえば、同じ名前って言うのも、おかしいわね……」

さっきまでの甘ったるくて、女の子特有の声とは違い、今の瑞穂の声は、まるで……魔女。

瑞穂の長い髪が、波打って、目も怪しいくらいに光って、口はおかしいくらいに笑っている。

「そっか、そうなんだ。私、天音君の正体が分かっちゃったあ……」。

ね、雅」

ニツコリ笑顔で聞いてくる瑞穂。

こ、怖い……怖いよ！

っていうか、笑顔で攻められるのがこんなにも怖いなんて思わな

かったよ、ホント。
さっすが魔女！

「雅？だあれが魔女だって？」

「……聞こえてた？」

「うん、独り言が、すごく大きな声だったからね」

……殺される……。

「いや、瑞穂、これには訳が……」

「訳？それじゃ、じっくり聞かせてもらいましょうか、その、“訳”とやらを」

「話せば長くなりますので……」

「あら？今日は私、暇なのよ。だから、放課後、十分に聞かせてもらうからね」

……なぜでしょう。

瑞穂はニツコリと笑っていて、本当ならば天使の笑顔のはずなのに……。

今、あたしには、悪魔の笑顔に見えます……。

第十三話 友よ、あたしは女だ。(後書き)

ああ、怖い怖い。

瑞穂ちゃんの怒る姿が目には浮かびますね、ホント。
ニツコリと笑いながら、ナイフを持っている……

あ、鳥肌が…。

ではでは (久しぶりに早い更新をしたので、疲れました)

第十四話 女の戦場

「で？私の初恋を奪った雅は、何を奢ってくれるのかしら？」

そ、そんな……っ。

奢りを請求するなんて、悪魔です！

「ちよっ、ここは冷静になろうよ瑞穂」

「これのどこが冷静でいられるのよっ！一目惚れした相手が女だったなんて、世間の恥さらしじゃない！それもこれも、アンタのせいよ、雅」

ニッコリと笑顔のまま、冷たい視線を送ってくる瑞穂。
ふえ~~~~ん、怖い……。

それでは、瑞穂が怖いので、現実逃避……つまりは、現場説明をします！

えっと……ここは喫茶店です。

温かい太陽の日差しが降り注いでいますとも！

ちなみに、ご主人様達には、「デートなんです」と言って、仕事をサボらせてもらいました。

一真君だけは、事情を知っているので、「友達にバレやした~~~~」
「と言って了解をもらっています。」

フッ。

まさかこのあたしが、ピンクを身にまとい喫茶店に来ると思わ

なかったさ。

実はこの店、“元”^{もと}一真君のアルバイト先です。

第一話で出てきた、あのお店ね？

瑞穂にイケメンウォッチングを手伝ってもらった事もあるのだけれど、「くだらないわ」という一言で片付けられてしまった…。

悲しい！！！！

「現実逃避している間に悪いんだけど、雅。この、『夏のオススメマンゴー』など盛りだくさんの、スペシャルフルーツパフェ！」を奢ってもらうからね」

それって、この店で一番高いものなのでは……？
そう思っ、反論しようとしたら、あの冷たい眼差しが帰ってきたので、すぐごと引き下がる。

ああ、女は怖いね（あたしも女だけど）。

「ご注文はどちらにいたしましょうか？」

「あた……俺は、このオレンジジュースを……」

「『夏のオススメ マンゴー』など盛りだくさんの、スペシャルフルーツパフェ」と、フルーツゼリーと、チョコレートケーキと、ショートケーキと、それから、コーヒーお願いします」

「俺は、何もいりません……」

ああ、財布の中身が……。

何も知らない店員さんは、ニコツと笑って去って行きました。
店員さん、あなたは幸せそうですね……。

「……雅。アンタ、何で男装してるのよ」

「これには、深あゝい事情があるのです。カクカクシカジカで……」

小説は、「カクカクシカジカ」で事情が伝わるから楽だね。
でも、お金があつという間に飛んでいったこの寂しさは、紛らわせないね。

「ふーん……。つまり、お金目的で執事になった、と…」

「そうなの！」

「そして、イケメンになってしまった、と…」

「そうなの！」

「で、私の初恋を奪った、と…」

「……………」

まだ根に持っていていらっしゃるんですね、瑞穂サン。
怖いよ、女の執念…。

「まあ、アンタの男装、様になってるからね」

「そう？」

「ええ。でも、私の初恋を奪った事だけは許せないけど」

そっちが勝手にあたしに恋したんじゃない。

自業自得じゃん。

「何か言ったかしら、雅」

「滅相もございません！」

結局、瑞穂の前では、頭が上がらないあたしなのである…。
微妙に悲しい？

「失礼します こちらが、パフェに、ゼリーに、ケーキに、ケーキに、コーヒーでございます」

店員さんがまたまた、スマイルでお届け。

目の前に置かれたスイーツが、一瞬にして、瑞穂のお腹の中へ…

…。
ああ、昨日の収入が……ッ。

「にしても、雅って、女泣かせよね…」

「???」

「さっきの店員、アンタを熱い眼差しで見てるわよ」

「っ、ええ!？」

う、嘘ッ!

瑞穂に言われて、振り向くと、確かに店員さんが、あたしを見ていた。

っていつか、頬をポツと赤く染めて……。

あ、恋する乙女発見。

「よかったわね、モテモテで」

「よ、よくないよう……」

「ったく、迷惑してるのは私なんだけど?」

「え???」

どうして、瑞穂?

そりゃ、初恋を奪ったのは悪かったけどさあ……。

それって、そんなに迷惑?

「あの人、私に明らかに嫉妬してるわ」

「しつと……、」

「そうよ。だから、このパフェにも、マスタードにワサビに唐辛子が入ってるわ」

「……ッ!？」

ますたーど、わさび、とうがらし……。

そういえば、マンゴーにはコッソリとマスタード。

キウイには、これまたコッソリとワサビ。

そしてなんと、苺のアイスかと思いきや、アイスの中には唐辛子の粉が……。

か、辛そう……。

「すごい、ね……」

「すごい、ね……じゃないわよ！私が辛い物も好きだからいいけど、もし嫌いだったら、どうなったたのかしら」

そう言いながら、辛いパフェを食べ続ける瑞穂。

び、美女なのに……。

何て言うか、すごく……たくましい。

そして、あの店員さんは……と。

チラリと様子をつかがえ、店員さんは悔しそうに瑞穂を睨んでいる。

瑞穂は、その視線を受け流し、パフェやケーキを黙々と食べ続ける……。

ここ、怖いよ……。

ここ、戦場だ……。

どうやらあたしは、女の戦場へと紛れ込んだらしい。

第十四話 女の戦場（後書き）

怖ッ！

雅、ドンマイだ…。

っていうか、店員さんも、瑞穂も、怖いよ……。

第十五話 瑞穂VS兄…

あたしは、場違いな所へと来てしまった……。

「お客様、ワタクシと遊びに参りましょう!」

「なあーに言ってるのよ、このへボ店員! テメエはさっさと激辛パフェでも運んどけっ」

「言ったわねっ」

「あつたりまえでしょ!」

目の前で繰り広げられる熱戦。

笑顔の店員さんVS瑞穂……。

ああ、他のお客さんからの視線がキツイ……。

「雅っ、行くわよっ!」

「まあ、雅君とおっしゃるのですね! 素敵なお名前ですわ!」

あ、店員さんの目が輝いた。

そして、瑞穂の冷たい視線が……。

『雅! 何してるのよ、さっさと引き上げるわよ!』

『む、無理だよ~~~~』

『どうして!?!』

『どうしてもこうしても、う、腕があ~~~~』

『うでえ!?!』

……ちなみに、上の会話はすべて目で行われています。

「腕が、どーしたって言うのよっ」

たまらなくなつて叫んだ瑞穂。

そして、あたしの腕をバツと握り……

「ッ、ヒィ、ギャッ！……！」

……そーなのです、そーなのです、そーなのです……！！
実はさつきから、あたしの腕に、怪しい物体が……。

本当ですから！

なんか、腕が妙に重いな、とか思つて、チラツと腕を見ると……
何かが、あたしの腕に捕まっているのです。

そして、その“何か”とは………

く、黒いオーラを纏^{まと}つた、“兄”iiiiiiiiiiiiiiiiiiii！！！！

「な、何この人！？」

さすがの瑞穂も、顔を真っ青にしている。

それもそうだと思います、ハイ。

「み、雅！説明しなさい！！！！」

「キ、きゃあ！」

店員さんが、カワイイ悲鳴を上げて逃げていきます。

あの店員さんを追い払えたのはいいけど………よけいに変な奴

が来てしまった…。

「雅！何なの、コイツは！」

「……………ん」

「はあ！？」

「……………ちゃん」

「はあ？ちゃんと言いなさい！」

「お、お……………お兄ちゃんだよ！！！」

ピシッ……………。

一瞬で凍り付く瑞穂。

大きな瞳が点になって、口が開いてます。
間抜けだ…。

「お、お、お……………」

「お兄ちゃん」

「み、雅の？」

「うん。恥ずかしながら」

呆然とする瑞穂。

そして、未だに腕にしがみついている兄。

神様、この状況、どうにかしてください……………。

「み、雅のお兄ちゃんって……………！この、ストーカーっぽくて、すごいジメジメした空気背負っていて、気持ち悪い人が？」

そうだよ、お兄ちゃんだよ。

あたしも自分で認めたくないけど、お兄ちゃんだよ。
血がつながってるよ、悲しい事に。

「みいいーやああーびいいー」

「お、お兄ちゃんっ!？」
「ぎゃっ!」

あ、み、瑞穂!

さすがの瑞穂も怖くなったようで、一歩一歩後ずさっている。
そういえば、さっきからお店のお客さんが少なくなっているよう
な……?

ま、まさか……

みんな、あたしを置いて逃げるつもりですかっ?

「ごめん、雅っ!」

「瑞穂おっ!」

ついに走り出した瑞穂。

っていうか、置いていかないで!

何でもするから、お願い!

「あたしの初恋を奪った事は、コレでチャラにしてあげるから!と
りあえず帰るねっ」

「み、瑞穂……!」

ひどいよひどいよ!

瑞穂は、ついに喫茶店から逃げていったのです。

少しは、『友達だから、一緒にいるよ』とか言っただけだった!

それより、この兄を何とかして！

「みーやーびー」

「お、お兄ちゃん……」

「お兄ちゃんを置いてデートに行くとは、どういう事だぁ！」

……へ？

デート…？

あ、そういえば、ご主人様達には、「デート」って言ったっけ？
で、それを兄が知って、ここまでやってきたと…。

……つまりは、ご主人様達のせい、だね。

「お兄ちゃん、デートじゃな……」

「罰として、今からお兄ちゃんとデートしろっ！」

「はぁー！？」

「行くぞ雅ッ」

「っ、ちよつと、待つ……」

だから、デートじゃないって！

しかも、相手見たでしょ？

女だよ、瑞穂は。

髪長いし、美人だし、いくらお兄ちゃんでも、女と女がデートするなんて勘違いするなよっ！

あたし女だって分かってるだろ！

「お兄ちゃん、ストップ！ストップ、ストップ、ストップ！」

「さぁ、雅、行くぞっ！夜景の見えるレストランで食事だ！愛を誓い合うぞ！ついでに結婚だ！」

第十五話 瑞穂vs兄…（後書き）

ははっ、お兄ちゃんが暴走してるよ…。
かわいそうな雅。

と、ここで、なんか改めて自己紹介？

レギュラー

天音 雅

橘 一真

若松 陽太

桃原 スモモ

って感じかな。

その他はレギュラー未満？

中原さんや瑞穂ちゃん、お兄ちゃんもレギュラー未満です。

レギュラーの皆さんは、雅ちゃんとラブ になる可能性があるで
しょ？

中原さんは、可能性がきわめて薄いし、瑞穂は同姓だからないし、
お兄ちゃんは論外だし。

ってことで、レギュラーはあの四人ですよー？
たまに中原さんが入るかもしれないけど。

今更だけど登場人物紹介

「ハイ、どうも！あたし、この小説の主人公、あまねみやび天音雅だよ！よろしく！」

いやー、作者が急に、『登場人物紹介やる！やるやる！やるーよ』なんて言い出したから。
っていうか、ただ単に、小説書くのが面倒くさくて、これ始めただけかもしれない。

「ま、とにかく、紹介していきますね」

まずはあたし！

あまね

みやび

天音 雅、高校一年生です！

ピンクが大ツツツツ嫌い！

とある事情で、ピンクだらけのお屋敷に、“男”として入る事に好きなものはイケメン、趣味はイケメンウォッチング！

髪はショートカットで、学校では、男装がバレないように、メガネを装着！

「それでは、次だね！ー真君！」

「どうも」

「……」

「……」

「……」

「……」

何か話せよっ！

と、すごく無口な一真君です。

では、紹介行くよ〜〜〜！

「俺、橘^{たちばな}一真^{かずま}。高校一年生だ。一応、執事として働いている。後は……」

「イケメン！！！」

「黙れ雅」

ヒドイよ〜〜〜。

あたしへの態度がすごく雑になっている気がします…。

「橘は、天音っちに恋してるんだよね」

「はあ！？」

ここで登場したのが若松君。

ちよおつと待った！

若松君の登場は、もう少し後からなんだけど……

「男と男の叶わぬ恋。天音っちを影から見つめる一人の少年……」

「黙れっ！」

「そんな〜。一真君が俺に恋なんて、あるわけないですよ」

赤面している一真君。

イヤン、かわゆい

「じゃ、次は若松君の紹介ですね！」

「うん。どーもー、俺、若松^{わかまつ}陽太^{ようた}！スポーツ大好きで、最近は特に、サッカーにハマッてるぞー！」

いかにも健康少年だしね。

健康的に焼けた肌に、細い目、笑った瞬間見える白い歯がポイント！

茶髪で、チャラ男っぽい。

「そーいえば、天音っち。最初、『あたし』って言ってなかった？」

「あ……、」

「???」

「……そつ、それでは、次にいきましょー！」

ば、バレるかも……！

ヤバイな、これは。

「我らがご主人様です！」

「やあ。僕がこの屋敷の主人、ももはら 桃原 スモモだ。よろしく」

そう言つて、ピンクを見事に着込んでいるのは、もちろんご主人様。

「ピンクが好きで、女子が嫌いだ。あと、美少年は嫌いじゃない」

……まさかのBL？

えっと、ご主人様は、慎重はやや低めで、イケメン。

「天音雅。まだか？」

「あ、中原さん。えっと、じゃあ、勝手に自己紹介してください」

「なかはら 中原 レオ。この屋敷の執事のチーフ……つまりは長た。おな 世間からはイケメンと呼ばれている。年齢は二十三歳。ご主人様が小さい

頃から、この屋敷で働いている。よろしく」

「わー、超短い自己紹介。
さっすがまじめ人間！」

「天音雅。何か言ったか？」
「いいーえ、何にも！」

中原さんの、「冷たい目線」攻撃で見られたら、さすがに怖い。
人を凍らせる力があるよね、ウン。

「次は……」
「ハイハイ、ハ〜イ！！！！お兄ちゃんダヨ〜！」

げげげげげ〜！！
あたしが、ピンクの次に嫌いなもの（っていうか人）……それは、
お兄ちゃんだ。

「雅い〜。お兄ちゃんに対する扱いがひどい気がします〜」
「黙れ兄貴」
「あ、アニキ……ッ！？ダメです、そんな汚い言葉を使っちゃ！」

涙目で睨むなッ！
キモイし。

「ふえ〜〜ん。雅が汚い言葉を〜」
「うつせえ兄貴」
「……もついいもん！勝手に自己紹介するからね！」

はい、ぜひそうしてください。

「僕は、天音あまね 一樹いつき。雅が大好きで、雅の婚約者さ！この男だらけの地獄から、雅を連れ出すためにやってきた勇者で……」
「はい、ストゥップ。間違った紹介はやめようか、兄」
「お兄ちゃんって読んでくれない……」

あー、ウザイ。

一回死んで欲しい。

「ちょっと、雅。私の事忘れないでよね」
「あ、瑞穂……」

長い髪に、鋭い目、スラッと伸びた手足に、整った顔立ち……。そう、これは、スーパーアイドル瑞穂ちゃんです。

「バカな解説してんじゃないわよっ！」

うぎゃっ！

な、なんか今、スリッパが頭に……。
瑞穂、スリッパであたしを叩いたの???

「さ、さすが瑞穂、凶暴……」

「何ですって？」

「な、何でもございません……」

怖い怖い。

あの、氷のような目で睨まれると、さすがのあたしも凍えてしまっ
うよ。

「えっと、この子は、青木あおき 瑞穂みずほ。クラスでも五本指に入る程の美

人で、性格はキツめ、だけど、やっぱりモテモテ少女なんだよ」

「そう。そんなに美人の私の、初恋の相手が、“女の子”だったなんて。ほあ〜んと、男装している雅が恨めしいわあ。一生呪ってあげるから、覚悟してね」

そんなこと笑顔で言われても……。

苦笑いしてから、涙が出そうになる。

ああ、何で親友に、こんな事言われてるんだろうか……。

「ま、とにかく、そんなこんなで、この紹介は終わり！これからもがんばるので、よろしくお願いしま〜す！」

『よろしく〜〜〜』（全員合唱）

第十六話 デートかピンクか。(前書き)

今回短いです。

第十六話 デートかピンクか。

私が好きなものはイケメン。
そして嫌いなものはピンク。
今更だけど確認しておこう。
そして、現在状況。

「……兄、何これ」
「イヤン、雅つてば お兄ちゃん、って呼んで」
「うっせえ兄貴」

その年で語尾にハートマークつけんじゃねえよ！
気色悪いわ！

目の前には、兄。
兄は結構カツコイ……たぶん。
まあ、この性格だから、そんなにモテないけど。
そして……兄の手にあるのは、ピンクのワンピース。
………いつの間にこんなの用意しやがったんだ…。

まあつまりは、好きな物イケメンと嫌いな物ピンクに挟まれる状況であります！

「で、お兄ちゃん」
「雅、ラブリー」
「兄貴。まさか コレをあたしに着ると言っているワケないよね」

あたし、自分の気持ちで、「お兄ちゃん」「兄」「兄貴」を使い分けてる。

「え？雅なら似合うと思うけど、どうしても嫌なら、これでもいいよ」

……ピンクのメイド服……？

どこかにやってくれ！お願いだから！

世界の果で、いや、宇宙の果てまで捨ててきて！

「雅？だいじょう……」

あたしのあまりの剣幕に、心底驚いている様子の兄。

「……雅って、ピンク嫌いだったの？」

.....は???

脳天気すぎる発言に、言葉を失うあたし。

だって、そうでしょ？

いくら兄が馬鹿だとはいえ、ここまで馬鹿とは、誰も思っまい。
っていうか……

「誰のせいであたしがピンク嫌いになったと思ってるのよぉ！」
「え？誰のせい？」

デメエじゃ！

とは、さすがに言えないので、深呼吸。

スー、ハー、スー、ハー……。

「さあ、お兄ちゃん。ご主人様のおうちに帰りましょ……」
「ダメだよ。だって、僕と雅は、これからデートじゃないか」

でーと・・・？

デートって、あの、恋人がする奴ですか？

キスとかしたり、夜景の見えるレストランで（甘すぎて砂吐きそう……）、「君の瞳に乾杯さ」と言う奴の事？

「却下」

「ええ〜〜！いいじゃんいいじゃん！あの、瑞穂とかいう女の子とデートしたなら、お兄ちゃんともデートしようよう〜」

「アレはデートじゃないし！瑞穂はただの女友達！喫茶店でおしゃべりしてただけ！」

「ソレもデートだよ！とにかく、このワンピースかメイド服に着替えなさい雅！さもないと……」

さもないと……？

い、いつたい、どうなるんだ……。

「一週間、ご主人様のピンクだらけの部屋で過ごす。ご主人様の“抱き枕”として」

……。

い、い、い……嫌だあああああ……！

前に入った時は、現実逃避していたが、ご主人様の部屋はもちろんピンク。

あたし達専用の部屋は、ピンクではないのだけれど……あそこは、ピンクなのだ。

あのお屋敷で、ピンクから逃げられる場所は、あたし達専用の部屋しかない！

全てがピンクのご主人様の部屋で、しかも抱き枕として過ごすなんて……耐えられない……！！

「で、で……デート、します……」

「じゃあ、ワンピースかメイド服を……」

「わ、ワンピースでお願いします……」

ああ、天音雅、一生の不覚……。

第十六話 デートかピンクか。（後書き）

どうも、ゆながりかです！

最近、感想くれる人がいて、すごく嬉しいです！

ありがとうございます！

本文では、雅の好きなものはイケメン、嫌いな物はピンクとしか書かれていませんが、本当は……

好きな物 一位 イケメン

二位 妄想

三位 お菓子

嫌い（苦手）な物 一位 ピンク

二位 兄

三位 高いところ

です！

それはさておき、これから一週間〜二週間ほど、更新できません！（キッパリ）

海外旅行に出かけるのです〜（グフフ）。
それでは、さようなら〜！！！！

第十七話 デートは嫌い、兄も嫌い

ま、前が見えない…。

目の前が、暗闇で覆われている。

「お、兄ちゃん……」

「何だい？」

「どうして、アイマスクされてるの？」

なぜか、アイマスクで目をふさがれた状況。

そして、ピンクのワンピース（……何も言わないで。悲しくなるから）を着て、パンプスを履いて、髪はウィッグ（つまりはカツラ）をつけている。

まあつまりは……完全に、“女の子”な状態な訳で…。

「それはね、これから、とっても素敵な場所へ連れて行ってあげるから、だよ？」

あたしは、思いつきりショートカット。

だから、男に見えていたから、長い髪になれば、女の子に戻る訳である……。

「素敵な場所、って……？」

「あ、エレベーターガールさん、最上階お願い」

「かしこまりました」

エレベーターガルってことは、エレベーターに乗るってことよね。

ん……???

えれべーたー？

う、え、あ、う、お、う あ……

「う あー！ー！ー！」

アイマスクをしていても分かる、この感覚。どどん上へと上がって行くんだ……。だ、誰か、助ケテ……。

あたしは、昔から、高い所が大嫌いだった。ピンクやお兄ちゃんも嫌いだけど……それは、理由があつてこそ。でも、高い所は、本能的にダメ。

「お、お兄ちゃん、ド、シテ……っ」

アイマスクをしていて、何も見えないけど、それでも、目が開けられない。

耳をふさいで、うずくまる。

ワンピースなんてどうでもいい、クシャクシャになっちゃえ。パンプスも脱げちゃえばいい。

ウィッグだつて取れば、少しは頭が軽くなる。それでも、恐怖は消えない……。

「っ、」

「お兄ちゃんはね、雅を手に入れるためなら、何でもやるんだよ？」
「あ、兄…ッ」

ッ……！

「最上階にきました。お降りください」

「さ、雅、降りよう」

「い、嫌ッ！」

反射的に兄の手を振り払う。

嫌い、嫌い、嫌い、嫌い……！

どうして、こんなひどい事を…？

怖い、怖い、怖い、怖い……っ。

「雅、おいで」

「ヤだっ」

兄が、倒れていく。

それは、あたしが、アイマスクをはずし、兄を突き飛ばしたから。
そして、エレベーターガールさんも突き飛ばした。

兄とエレベーターガールさんは、もつれ合って、最上階のロビー
へと転がっていった。

「サヨナラ、お兄ちゃん」

一階のボタンを押し、エレベーターが閉まる……。
さ、下がってる……。よ、よかった…。

あたしは、やっぱり、高いところは苦手だな。
でも、降りられてよかった。

これ以上、高い場所にいたくない。

そう思っ、油断したその瞬間……。

…え、エレベーターが、止ま、った……。

いや、一階で止まってくれればいいんだよ。
二階と三階も大丈夫。

でも、この止まった階は、最上階の一個下。
つまりは……

「全然、変わってない、しィ……」

や、ヤバイ、クラクラしてきた…。
エレベーターの壁にもたれかかる。
正直、倒れそうなんですけど…？

そのとき、扉が開いた。

「……あ、あれ？雅？」

こ、この声は……ッ！

「か、一真君！？」

「どうしたんだよ！？雅、お前、あの女子と話してたんじゃないっ
てか、顔色悪いぞ？」

ピンクの執事服…。

ああ、何で倒れそうなのに追い打ちをかけてくるかなあ…。
それ以上こっちに来たら、間違いなく吐く……。

「ぐ、ごめ、ん…。とりあ、えず……ここに、来ない、で…ッ」

あ、っていうか、カツラかぶってるのに、あたしだってよく分かってるね。

しかも、ワンピース（ぐえっ）なんか着てるのに。

「は？」

おい、あたしの言葉は無視か。

足を止める様子がない一真君。

クラクラする、倒れそう、気持ち悪い、めまいが……。

「も、ダメエ……」

「うわっ！」

ついに私は、その場へと倒れ込んだ。

ああ、エレベーターの冷たい壁が痛い……。

第十七話 デートは嫌い、兄も嫌い（後書き）

たっだいまゝ！

おかえりー、という声が聞こえてきそうです。

更新遅くなってスイマセン。

まあ、旅行だったしね

第十八話 従姉妹のミヤコ

……び。……やび。……雅っ！

「ん……むう……」

眠い。

何だろう、このクラクラした気持ち。

まるで、高いところにいるみたい………って、た、たたた、高いところおー！？

「ギャッ……！」

「あ……。み、雅が、起きた！」

あ、一真君。

ハイ、起きましたとも。

高いところなんて、眠っていられませんから！

「あ、あたし、一階に行く……」

「待てよ、雅！」

って、よく考えればここどこ？

さっきまでのエレベーターとは違って、どこかのベッドの中。
しかも、超豪華じゃない？

「そういえば、一真君、どうしてここに？」

「ご主人様のお屋敷に帰ったら、急にパーティーの予定が入って……。俺たちは護衛として着いてきたんだ。それで、その会場がこの階で、ここはその医務室。で、何で雅はここに？」

「それは……」

お兄ちゃんにデートに連れてこられた事を話す。

全く、ひどい兄だ。

……げ、現実逃避していたけど、やっぱりクラクラする……。

「雅……、大丈夫か？」

「おーい、橘ー、女の子の具合大丈夫かー？」

「具合が直ったのなら出て行ってもらうんだぞ」

「ご主人様、そろそろお時間でございます」

一真君が何か言おうとした瞬間、若松君とご主人様、そして中原さんが出てきた。

……みんな、あたしが、「男の天音雅」とは気づいていないみたい。

ってことは、女のフリして、さっさとここから出て行った方がいいかも。

「お、おいつ、若松も、ご主人様も、中原さんも、少し静かに……」

「おっ？この子、カワイイね！ってか、天音っちに似てるかも？」

「確かに、天音雅には似ているが、女だろう。即刻退場してもらえ」

「ですが、迷い込んだ病弱な少女を退場させるというのは、桃原財閥に泥を塗る事になりますか……」

ご主人様、女には容赦ないな…。

ってか、中原さん、「迷い込んだ病弱な少女」って……。

……ここは、ごまかそう！

「はいどうも ワタシイ、天音雅君の従姉妹イトコの、天音ミヤコアマオトです
！雅君とは、よくそっくりだねって言われますう」

女の子独特の、甘ったるい声。

今日だけはあたし、アマオトミヤコとして頑張るぞ！
っていうか、さっさと一階に下りたい……。

「お、おいっ、ミヤビ……じゃなくて、ミヤコ、じゃなくて、ミヤ

……」

「ミヤコ、ちゃん……？」

「従姉妹か、ナルホドな」

「それでは、この少女にはパーティー会場を散策してから、退場し
てもらうことにしましょうか」

「あ、それ、超おいしい考えですう。っていうかあ、ミヤコ、う・
れ・し・い」

き、気持ち悪い……。

自分の言葉に吐き気が。

女の子してるのって、すごく疲れる……。

「じゃあ、ミヤコちゃん？俺が案内するよ！」

若松君？

無駄に張り切っていますが、何故……？

「それで、メールアドレスとかも教えてくれないかな？」

……こ、これは、微妙にナンパ？

第十八話 従姉妹のミヤコ（後書き）

雅ならぬミヤコ！

ミヤコは、若松のナンパを振り切れるのか！？

第十九話 パーティー脱走計画？

目の前に並べられたご馳走。

次から次へと出てくる、ステーキ、スープ、サラダ、デザート……。

「う、うま、そう……」

口から漏れた言葉に、若松君が首をかしげる。
いけない、今は女の子だった。

いや、もとからあたしは女子だけど！

「どうしたの、ミヤコちゃん？」

「うっ、ううん、何でもないのお……」

いけない。

涎なんて垂らしてちゃダメだね、うん。
よおし！

「あ、あのお、ミヤコ、ちよっとクラクラするのぉ。だからあ、あ
そこの椅子で座ってるねえ？」

「え、あ、そう？じゃあ、俺は、食事をとってくるから。待ってて
ね！」

「うん、分かったあ」

……女の子って、大変だな。

いつもこんな声を出すなんて、あたしには到底無理！

まあ、とにかく、若松君がどこかへ行った隙に、エレベーターで一階に下りるとするか。

「えっと、エレベーターエレベーター……」

うー、なかなか見つからない…。

広すぎてワケ分かんないや。

さて、どうしよう……。

辺りを探し回るか、とりあえずここで若松君を待つか、一真君を捜してエレベーターの場所を教えてもらうか……。

んー……。

「一真君を捜そうかな…」

一番安全だし。

若松君に見つかったら、ただじゃ済まされなさそう…。
そう思いあたしは、椅子から立ち上がった。

ああー、クラクラするー…。

こんなビル、いつ倒れるか分からないのに。
みんなよく平気でいられるよね。

「一真君、一真君……。あ、いた！」

かずまくん、と叫びながら走っていくと、周りの人がみんなあたしを見た。

????

なんか、注目されてる????

「どうした、みや……こ」

「あのねー、エレベーターの位置を覚えてくれる？あたし、高所恐怖症で……」

あたしのフラフラな状態を見るとすぐ、一真君はエレベーターの場所を覚えてくれた。

そしてなんと、自分も一緒に屋敷へ帰るとまで言い出したのだ。そこまでしてくれなくても……。

「みや……こが、」

「あ、雅でもいいよ？人がいないときは」

「雅とここで会った時、俺、エレベーターに乗ろうとしてただろ？実は、このパーティーを抜け出すためだったんだ。屋敷の中にも、お留守番執事がいるし……」

「そうだったの？」

ふーん……。

それなら、一緒に来てもらおうかな……。

夜に女の子の一人歩きは危険だし……（これは、“お兄ちゃんに捕まる”という意味の危険です）。

「じゃ、よろしくお願いします、だね」

「おう」

そう言つて、あたし達はにこやかに笑い合った。

+++++

その頃、広いパーティー会場で、若松陽太は一人で歩いていた…。

「あつれー？ミヤコちゃんはい？」

片手にステーキ、片手にデザート類を乗せた陽太は、椅子に座っているはずのミヤコがいなくて、その近くをうろついていたのである。

全く、酷いよなあ。

勝手にどこかへ行っちゃうなんてさ。

「ミヤコちゃん……」

陽太の悲しい声が、パーティー会場に響く…。

せっかく、カワイイ女の子に巡り会えたと思ったのに。それにしても、本当に可愛かったなあ…。

天音っちを女の子にしたら、あんな感じなんだろうか…。今度、女装してもらおうかな…。

「ってか、マジでミヤコちゃんどこ行ったの!？」

第十九話 パーティー脱走計画？（後書き）

ゴメンナサイ、少し更新遅れました…。

一週間も待たせていましたね…。

ああー……。

私の責任感のなさには、自分で呆れてしまいます。

第二十話 突然のハプニング（前書き）

ワイ、二十話！

二十話にふさわしく、今回は、大進展かな？

第二十話 突然のハプニング

作戦1：おびき寄せる。

「桃原さあーん！」

「ん？えつと、君は、天音雅の従姉妹の……？」

「ミヤコでえゝす！あのお、ミヤコ、そろそろ疲れてきたのでえ、帰ってもいいですかあ？」

女子特有の甘ったるい声で話しながら、ご主人様の気をそらす。

あたしがご主人様と話している間に、一真君がパーティー会場を抜け出すはず。

ご主人様の気さえ逸らせば、誰も一真君を気にとめない！

「ああ、できれば即刻退場してくれ。それじゃ」

「はあゝい」

うし！

作戦2：一真君がエレベーターで待つ。

「一真君！」

「雅！早く乗れ！」

「うん！」

幸い、近くには誰もいなかった。

よっしゃ、脱出ー！

「よ、よかったー…。もう、高くて高くて、気絶しそうになっちゃった…」

「いや、雅一回気絶してたし」

冷静なツツコミを入れる一真君。

こんなに高いのに、よくそんな平常でいられるなあ。
少し感心します。

「ここって、十一階だったのか…。道理でクラクラするはずだ…」

十一、十、九、八……。

表示されている数が、どんどん小さくなっていく。

そして、七階になったとき……ハプニングは、起こった。

ガタンッ

『へっ？？？？』

え、エレベーターが、止まった……。

どうやら、故障したらしい。

っていうか……数の表示が「七」で止まっているんですけど！？

二人とも、怖がるよりも驚く方が先立ったみたい。

同時に情けない声を上げて、現在状況に気づくまで、数分かかってしまった…。

「ぎ、ぎう、え、う　あ……きゃあああああああ……！」

珍しく女らしい声を出すあたし。
ってか、どうなってるわけ！？

叫んだところでどうにかなるわけじゃない、そうは分かってるけど！

分かってますけど……！！

でもでも、怖いものは怖いんだから！

このままずっと動かなかつたら？

もし、ここで死んじゃったら？

「いやあああああ……！！！」

涙がこみ上げてきて、世界が滲んで見える。

鳴咽が漏れて、床に滴が垂れた。

へたり込んで、立ち上がれない。

もう、何も聞こえない。

足、手……体中が震えている。

「……雅。…雅……！」

……誰？

目を閉じて、耳をふさいで……何も見えないし聞こえない、暗闇の状況で、誰かの声が聞こえる。

その声を聞いた瞬間、何故だか、「大丈夫」って思えた。

本当は、全然大丈夫じゃないんだけど。

「カ……か、ずま、くん……？」

「そうだよ。俺だ。大丈夫か？」

大丈夫じゃない。

怖い。

助けて。

そう思ったのに、あたしの口から出た言葉は、「大丈夫」。

一真君、気づいてよ。

あたし、大丈夫じゃ、ないんだよ。

「大丈夫じゃ、ないだろ！」

……ッ！！！！

ずっと閉じていた目が、開かれた。

無意識に。

その声にすがるように、一真君を見ると、一真君もあたしを見ていた。

「……自分一人で、ため込むなよ。俺も、力になりてえよ。怖い時は、怖いって言えよッッッ！！！」

叫んでいた。

あの、冷静な一真君が。

心の底から、叫んでいた。

「……いよ……。こ、怖いよっ！」

一真君につられるようにして、あたしも叫ぶ。
そしたら、なんだかスッキリした。
本音を口に出すなんて、久しぶり。

そう思った瞬間、また、エレベーターが揺れた。

「うおっ」

「キャッ」

ずっと立っていた一真君が、倒れ込む。

……あたしに向かつて。

どンドン近づいてきて、そして……

「つつ……」

ガン、と膝をぶつけたらしい一真君。
それはいいけど……

あ、あああ、あたしに、倒れ込んでる!?

つつつつ、つまり、なんか、あたしの肩に、一真君の頭が乗っか
つていて……。

一真君の吐く息とか、首筋にかかって、ゾクってした…。

「え、あ……ごっ、ゴメン、雅ッ」

「あ、えと、いいよ、別に! うん、大丈夫大丈夫。お、重くないし
……」

そうじゃないだろあたし!

心臓がバクバクなってるのは誰のせい？

一真君のせい！

……でも。

一真君はどうやら、膝が痛くて動けない様子。

つまり、微妙に押し倒されているような格好で、このままいなくてはいけない…。

だから、一真君のせいなんて言っても、この状況が変わる訳はない…。

「……雅…」

え……？

ち、近ッ！

声のした方を見たら、整った顔が間近になって、すごく驚いた。

どきっ、どき。

「雅……。俺……。俺……。ッ」

ウィーーン…。

そのとき、エレベーターの扉が開いた。

第二十話 突然のハプニング（後書き）

どうですか？

ふふふふふ、恋の予感、ですかね…。

ああ青春…。

あ、そうそう！

今更なんですけど……

100ポイント達成、ありがとうございます……！！
ワイワイ！

と、いうことで、「第二十話記念」と、「100ポイント達成記念」をかねて、今度は番外編でもやろっかなー、と。

それでは、お楽しみに。

番外編 ラブラブ？遊園地！の巻（前書き）

このお話は、本編とあまり関係はありません。
こつこつのいいやゝ、と思う人は、素早くここから出て行ってくだ
さい。

番外編 ラブラブ？遊園地！の巻

その1：ラブラブ？はい、アーン の巻 ー スモモ ー

「ふんぎやお〜」

世界がまわって見える。

あれ、ボクは誰？

ココはどこ？

「ご主人様、大丈夫ですか？」

僕の隣で、笑いながら、コーヒークップを回しているのは、天音雅だ。

この場に似合わない笑顔で、そしてものすごい勢いで、回している。

ちなみに、コーヒークップに乗っているのは、僕と天音雅だけだ。その理由は、十分前にさかのぼる……。

+++++

「ご主人様、ここは一体？」

目を丸くする天音雅。

それもそうだろう。

なぜならば、ここは……

「我が桃原財閥が誇る、『スモモもモモもモモの内遊園地』だ」

そう。

僕、桃原スモモの父が作ったこの遊園地。

みんなに愛されますように、と願いを込めて、遊園地の乗り物全てがピンクだ。

「どうした、天音雅？心なしか、顔色が悪いようだが…」
「いつ、いいえ、何でも、ございま……っ」

天音雅の顔が真っ青。
乗り物に乗ってもいないのに、すでに乗り物酔いか？
情けないなあ。

「ところで、ご主人様」
「ん？」

「……俺達、はぐれてしまったような気がするのですが……？」

……。
ハゲレル……？

違うな。

僕達のはぐれたのではなく、橘一真と若松陽太がはぐれたのだ！
全く、哀れな庶民だ……。

今日は、中原もついてきていない。

よって今、この場には二人きりということになる。

「とりあえず、ご主人様。あの、“唯一ピンクじゃない乗り物”！

の、コーヒークップにでも乗りましょうか」

ん？

ああ、あのコーヒークップは、まだ塗り替えが終わっていないのだな。

まだこの遊園地は、開園していないから当然だ。
明日開園なのだが、一足先に、僕が点検をかねて、乗り物に乗ることになったのだ。

「いいぞ。行くか」

「はい」

+++++

フッ。

コーヒークップなんて、所詮子供の遊び……

そう思った僕が阿呆だった。

「んぎゃおおおー！！！」

クラクラする。

怖い、怖いぞっ！？

目が回ってきた……。

でも、天音雅は、回す手を止めてはくれない。

しゅ、しゅしゅ、主人に向かって、何ということ……！？

「ぎゃあああああああ！」

結局、最後の最後まで、コーヒークップは回り続けていた……。

+++++

「全く！主人に向かってなんたることを！？」

「スイマセンってば」

時と場所は変わり、ここはレストラン。

昼食タイムという訳だ。

「はあ……。これからは、こんなことはないようにな」

「ハイ……」

少しうなだれる天音雅。

これで、少しは気が晴れた。

というか、本当にコイツは、僕を主人と思っているのか？

明らかにピンクを軽蔑したその瞳。

そして、お金儲けという目的だけで働いているような様子。

「本当に、天音雅は、僕を困らせてばかりだ……」

「????」

……こんなに、カワイイし。

本人は意識していないのかもしれないが、天音雅の瞳は、まるで女のような感じがする。

そして、華奢なその体。

サラサラの髪に、整った顔立ち……男とは思えない。

まあ、男だからこそ、僕がこんなに親しくしてやっているのだが。

「まあとにかく、食事にしましょう?」
「ああ……」

今日は、遊園地の中にあつた、イタリア料理。
日本人の舌に好まれるように、本場の料理とは少し違った味になつている。

一応お米もあるし……。

「うん。なかなか上手いな、天音雅」
「……お言葉ですが!!」

んぐつ?
いきなり、挑むような目線で僕を見てくる天音雅。
何なんだ、一体……。

「そろそろ、天音雅つて、フルネームで呼ぶのはやめてくれませんか?俺のこと、雅でイイっすから」

敬語なのか敬語じゃないのかわからない。
でも、その迫力に連れられて、「あ、ああ……」と頷いていた僕は、
情けないのだろうか……?

「じゃ、じゃあ、雅。食事の続きをしようか……」

パスタは上手いなあ……。
だが、ピザも捨てがたい。

本場のピザは、生地も上手い。
そして、このイタリア料理は、本場の味に近い。

「んー!おいしい……」

頬が緩んでいる天音雅……じゃなくて、雅。

この笑顔を見て、「可愛い」と思わない男はいないだろう。
例えその口が、パスタのソースで汚れていようとも。

「全く、食べ方が下手なのだな、雅は」

「えっ、そーですか？」

「ああ。口についておるぞ」

「ええ！？あ、本当だ…」

ふふふ。

こうなったら仕方がない。

この僕が、直伝に、“食べさせてやる”とでもするか。

「はい、アーン」

フォークで、雅のパスタをすくい、差し出す。

雅は、目を丸くさせてから、一瞬、顔が赤くなった。

でも、すぐに平常心を取り戻したようで……

「えっ、と……。い、いただきます…？」

パクリ。

僕が差し出したフォークに、かぶりついた。

……何というか……自分からやってしまったが……これは、かなり、恥ずかしい、な。

おそらく今、僕の顔は赤いだろう。

「ご主人様？早く食べたいのですけど……？」
「……ッ。わ、わわわ、わかった……」

かすかに…… 本当にかすかにだが、フォークを持つ手が震えてしまった。

そのせいで、パスタも上手くすくえない。
フォークを持って、あれやこれやしている僕に差し出されたのは

……

「はい、アーン ですよ、ご主人様？」

差し出されたのは…… 雅がすくった、パスタだった。

「ッ、な……！？」

「ほら、お返しです。はい、アーン」

こ、ここ、この僕に、何という事を……。
そうは思ったが、口が勝手に、雅の持つ、フォークの元へと動いていく。

も、桃原財閥の跡継ぎが、こんなことをしては、いけない……
っ、けど……！

「あーん……」

欲望に駆られ、パクリと食べてしまった。
上手い。

「おいしいですか？」
「まあ、な」

「よかった」

「そう言って笑う雅が、「すごく」可愛く見えてしまった。
この、小悪魔め！」

番外編 ラブラブ？遊園地！の巻（後書き）

どーですか？

ご主人様視点の雅ちゃん。

小悪魔だー、と思う人、多数いると思います（笑）

ご主人様って、こんなキャラだっけ……。

私の書く小説は、何故か、キャラがどんどん崩れていきます……（涙）

それは、才能の無さ……？？？

番外編 ラブラブ？遊園地！の巻

その2：ラブラブ？お化け屋敷！の巻 〱陽太〱

「あつれー……？？？」

見覚えのある顔を見つけた俺は、情けない声を出していた。
俺って、こんなキャラじゃなかったのに…。

「天音うち？」

「アッ！若松君…」

よかった。

てつきり、はぐれたと思ってたよ。

遊園地に着いた瞬間、近くの店員さんに捕まって、お店に引きずり込まれてしまったのだ…。

その後、延々と愚痴を聞かされ…。

橘も、ご主人様も、天音うちもいなくなっちゃって、『俺ってば、迷子！？』とか思ってしまったが……気のせいだったみたいだな！

「よかった。あた……お、俺ってば、迷子になっちゃったみたいで…」

あた……？？？

「あた」って、どういう意味だ……？？？

「俺も、近くの人に捕まっちゃってさ……。はぐれたと思った」

「俺は、ご主人様と食事していたんですけど……『アーン』ってやったらご主人様、逃げちゃって……。どうしてかなあ……」

……悩殺、だっただな。

ご主人様の赤い顔が目には浮かぶようだ。

天音っち、自覚ないんだな……。

「あつ、ここで会ったのも何かの縁、ってことで、アトラクション行きましようよ！」

アトラクションかあ……。

ジェットコースターとか、苦手なんだけどもなあ……。

メリーゴーランドとか、少女趣味だし……。

「あれっ、あそこに、お化け屋敷が……」

え……？？？

天音っちが指さす方向には、ピンクのアトラクションの中でも、比較的薄いピンクの、『お化け屋敷』があった。

……薄いピンクのお化け屋敷……って……、迫力無いなライ！

「若松君、あれにしましょうよ！」

キラーン、と目を輝かせた天音っち。

そつえば、ピンク、嫌そうだったもんなあ……。

濃いピンクよりは薄いピンクの方が好きなんだろうな。

「いいよ。行こう！」

それに。

お化け屋敷って、デートの定番じゃん？

女の子が、「キヤー！」って、腕に抱きついてきたりしてさ。

まあ、天音っちは男だけど、いつか。

女の子みたいな顔してるもんな。

……だが俺は、お化け屋敷を甘く見ていたようだ。

+++++

「キヤー！！！」

こんな、女みたいな悲鳴を上げたのは、天音っち……ではなくて、俺だった。

こ、ここに、怖いよ怖い！

お化け屋敷って、こんなに怖かったっけ???

そっぴや、俺が最後に入ったお化け屋敷は、すっげえしょうもないお化け屋敷だったかも。

幼稚園の時、その先生達がつた、子ども向けのお化け屋敷。

それに比べて、これは、かなり怖い。

「キヤーーーーー！！！」

俺、情けない……。

天音っちは、淡々としている。

お、男らしい……ッ！

「若松君、大丈夫ですか？」

……この台詞、俺が女だったら、クラッときてるのかも。

でも、同姓同士なので、意味なし!!

「だ、だい、ダイジョーブッ!」

グッと親指を突き出した瞬間、横からピンクの生首が。

「ピンク嫌いー!ー!ー!」

「キヤー!生首怖いー!」

……前者の声が天音っち。

後者の声が俺。

天音っちは、ピンクの生首をパンチした。

吹っ飛ぶ生首。

俺は、生首を見て、天音っちに抱きついた。

「全く、お化け屋敷までがピンクなんて。どうかしてますね!」

いや、それどころじゃないし。

怖すぎるっしょ。

「お化け屋敷はもっと、こっ……黒くて、暗くて、『うらめしや』
って感じの……」

お化け屋敷を熱弁する天音っち。

それよりも、早くここから出ようよ…。

「うらめしや……」

「ハッ!ー!ーな、何故にピンクの落ち武者が!？」

「怖い……!ー!ー!」

後ろから飛び出してきたのは落ち武者。
だけど、ピンク。

おもしろいかもしれないけど……怖い……！

「きゃあああああ……！」

「落ち武者さんは、どうしてピンクに？」

「ウツ！そ、それはですね、話すと長い事に……」

「きゃああ……！寄るな来るな触るな……！」

「ナルホド。ご主人様が、ピンクにしろと言ったのですね。かわいい
そうに……。怖い雰囲気は全く出ませんね」

「そうなんです……。お化け専門なのに、仲間には笑われるし……。確
実に、お客さんにも笑われます……」

「キヤー……！早く逃げないとっ……！」

「もうこうなったら、諦めましょう。素敵なお化け役はもう、無理
なのです」

「……そつ、そうですね！これからは、歌って踊れるお化け役を目指
します！」

「キヤアア……！助けてえ、助けて……！」

「それでは、歌って踊れるお化け役を目指して、頑張ってください
！」

「本当にありがとうございます、ピンクの執事さん。これから、頑
張ります！」

はあ、はあ、はあ……っ。

さ、叫びすぎて、疲れた……。

しかも、俺が怖がっている間に、天音っちは、落ち武者さんの悩みを解決してるし。

「あー、楽しかった！それじゃ、出ましようか、若松君」

「え？あ、出口だ！イヤッター！」

バンザイ、としていると、天音っちが、何かを思いついたように手を打った。

????

どうしたんだろう……。

「若松君、怖いなら、出口まで、手をつないで行きましょうか？」

「え、ええ！？いつ、いいよ、別に……」

「よくありませんよ。さっきから抱きつきかれてばかりで、疲れちゃったんです」

「あ、ナルホド……」

確かに、ずっと抱きついてたな、俺。
本当、情けない……。

「はい、手、つなぎましょう？」

「……」

差し出された手に、俺は、自分の手を重ねた。

……違う！

この、顔がだんだん赤くなってきたのは、天音っちのせいじゃないぞ！

あ、暑いんだっ！

……それでも、この胸の鼓動だけは、言い訳が聞かなかった。

余談。

半年後、新聞には、『大人気！スモモもモモもモモの内遊園地。そのお化け屋敷では、歌って踊れる落ち武者さんが！』という記事が載っていたという。

めでたしめでたし……？？？

番外編 ラブラブ？遊園地！の巻（後書き）

言い忘れましたが…。

このお話は、本編とは関係ありません！！！！
では！

番外編 ラブラブ?遊園地!の巻(前書き)

今回長いかも、です。

番外編 ラブラブ？遊園地！の巻

その3：ラブラブ？観覧車！の巻 ー真ー

「あああああああああ！！！！」

その姿を見つけた瞬間俺は、自分でも気づかずに叫び声を上げていた。

俺の叫び声に、奴等^{ヤツラ}は振り向く。

「あれっ、一真く……」

「ゲッ、橘！？」

そろそろわかりだと思うが、奴等（その姿）とは、雅と若松の事である。

そして、雅達は、手をつないでいる。

若松は、明らかに嫌そうな顔をした。

おそらくそれは、手をつないでいるところを、俺に見られたからであり、見られちゃマズかったからだろう……。

「みつ、みみみ、雅！！！！」

頭ではよく分かっている。

これが、どういう事なのか。

雅と若松の後ろには、お化け屋敷があり、それは、二人で入ってきたという事だろう。

きつと、雅がお化けを怖がって、若松に抱きついて、「若松君、あたし、怖い……」とか言って、若松が、「大丈夫、俺がついているから」とか言いやがって……。

くっそ~~~~!!

「雅、お前、若松と……一緒に、お化け屋敷に、入ったのか???」
「うん」

俺が、ありったけの理性を振り絞って（すでに若松を殴りたい衝動でいっぱい）聞いたというのに、雅は普通に頷いた。
そんなに簡単に認めていいのかよ!?

「若松君が、俺の腕に抱きついてくるから、こうして手を繋いでいるんだよ。ほら、抱きつかれるよりは、手繋いだ方が楽だし」

……はっ???

若松が、雅に、抱きつく……?

逆なのでは……?????

でも。

雅なら、お化けとか全然平気そうだな。

「ハハハハ。お化け屋敷って、意外と怖いんだなあ」

少し恥ずかしそうに笑う若松。
っていうかよお……

「いつまで、手え繋いでんだよ!!!」

繋がれている手を引っぺがし、若松を睨む俺。
おびえる若松、俺をなだめる雅。

…そついや、ご主人様は？

「あ！君達!!!」

『ご主人様!』

噂をすれば。

ジェットコースターの辺りから近づいてきたご主人様。
どうやら、みんなはぐれていたらしい。

俺も、遊園地に来た時すぐに、雅達とはぐれてしまったのだから。
……情けないことに、迷ってしまったのだ。

少しボーッとしている間に、雅達はどっかに行ってしまうし。
とにかく、大変だった。

「全く、探したんだよ」

「ご主人様、お昼ご飯の時、どうしたんですか？勝手にどこかへ行
っちゃって」

「え、あ、その、あの……っ」

「ププツ。ご主人様、恥ずかしくなっただんでしょう」
「なっ!？」

ご主人様、雅、若松の3人で、訳の分からない話をしている。
ごめん、意味分からん。
何の話をしてるんだ？

「あー…。橘は知らなくていいと思うよ（アーンした、とか聞くと、絶対怒るよな）」

若松が苦笑いと言う。

知りたいんだけど…？

「とにかく、みんなそろったところで、観覧車に乗ろう！！！」

ピシッ。

ご主人様が言った瞬間、雅が固まった。

雅、高所恐怖症だっけ…。

「え、あの、その、帰りましようよ、ご主人様…っ」

「えー、何でえ？俺、観覧車乗りた〜い！」

「うん。やはり最後は、観覧車だろうな」

事情を知らないご主人様と若松は、のんきな事を言っている。気づいてないのだろうか、コイツ達は。

…雅が、かすかに震えていることに。

顔は真っ青になり、目線もオドオドしている。

体は震え、足場も少しふらついていた。

こんな状態の雅が、観覧車なんかに乗ったら、どうなるんだよ…？

「ご主人様、観覧車、乗らなくてもいいんじゃないですか？」

俺がそう言うと、何故か若松とご主人様が同時に睨んできた。

「何を言っているんだ、橘」

「観覧車と言えば、デートの定番だぞ」

「その観覧車に乗らなくてどうする！」

「君も、雅との愛を深めたいのだろう？」

『だから、乗ろう！』

最後はしっかりハモった。

はぁ~~~~。

「雅、大丈夫か？」

雅はまだ震えている。

「つたく、コイツは、悩みを一人で抱え込みすぎなんだよ。」

「俺にも、頼れよ。」

「少しくらい、いいところを見せたいじゃん。」

「あた、俺、でも、その……ッ」

高所恐怖症、という言葉が、雅の口から出ないのは、プライドのせいだろう。

自分一人で、何とかできる、というプライド。

でも、そんなプライド、俺の前では、捨てて欲しい。

「雅。大丈夫だって。俺が着いてるから」

「ご主人様や若松に、聞こえない程度の音量。それでも、雅には聞こえていたようで。」

「か、ずま、くん……???」

目を瞬きさせている。

そんなに驚かれても、な…。

「あのさ。俺の前では、弱いところを見せてもいいよ。ずっと強い自分でのって、意外と疲れる、だろ？」

実はそれは、雅の弱いところが見たいという欲望でもあったりする。

もっと、お前のことが知りたい。

これが、「好き」という感情なのかは、まだよく分かんねえけど。

俺は、お前のこと、もっと、知りたいんだ。

「……観覧車。乗りましょう」

小さな、小さな声で雅がつぶやく。

やった、とハイタッチをする若松とご主人様。

そんな二人は、とりあえず置いておいて。

二人に見えないように、雅の手を握った俺。

もし、手を離されたら、あきらめようと思っていたけど。

雅は、俺の手を、もっと強く握ってきた。

「……行こう」

「…うん」

「夜景が見られるかな」

「僕も、夜景が楽しみだよ」

お気楽な二人。

雅は、俯いてしまった。

でも、耳が赤いから、顔も真っ赤なのだろう。
そして俺も、おそらく、顔が赤い。

「大丈夫、だからな」

「うん……」

手を、強く握ってくる雅。

そんな雅を、どうしようもなく可愛いと思ってしまう俺は……
「イツのことを、好き、なのだろうか？」

「一真君、ありがとう」

「え……??？」

雅が、ありがとう、とつぶやいた気がする。

何となくだけど。

その言葉が、とても嬉しく感じた。

これが聞けるなら、少しくらい格好つけてもいいかな、と。
思った俺はやはり、雅に、少しは恋愛感情があるのだろう。

番外編 ラブラブ？遊園地！の巻（後書き）

番外編終了〜！

やっと書けた……。

構想を練り始めてから、2週間は経っています。
時が過ぎるのは早いなあ……。

そんなこんなで、とりあえずは、本編に戻るのです！
今度番外編を書く時は、本編が完結した時でしょうね、たぶん。
では！

第二十一話 抱っこして？

そう。

エレベーターの、扉が、開いたのだ。
壊れていたはずなのに。

「あら……？？？」

素敵なドレスを着た奥様が、エレベーターの中で、「にゃーん」
な行動をしているあたし達を不思議そうに見ている。

ああ、違うんですよ奥様。

これには、深あゝい事情があるんです。

「青春ねえ」

いやいや、違いますから。

別にあたし、一真君とこういう、「にゃーん」な事をしたいわけじゃないんです。

たとえ今、リアルに押し倒されつつある状況だとしても。

むっっちゃ顔近いけどね！

「お、おお、おわわわわ！あの、えっと、これには、深い事情が……」

あたふたわめいている一真君。

あーあ、そんなにわめいたら、本当に、変なことをしていたと思われるってしまうじゃないか。

馬鹿だなー。

「いいのよ、隠さなくても。ワタシだって、若い頃は、道ばたで堂々とキスをしていたわ」

……やけに物わかりのいい(?)奥様だなあ。

にしても。

さつきから、「七階」で止まっていたはずのエレベーターは、すでに「六階」となっている。

あたしの知らない間に、動いていたとか？

アッ！

さつきの衝動は、エレベーターが動いたからかあ。

「って、納得してる場合かよっ！」

何故か、一真君につっこまれてしまった…。

どうして、あたしの心の声が聞こえたのでしょうか……ねえ、一

真君？

まあ今は、それよりも……

「あの、一真君」

「ん？」

「そろそろ、どいてくれる？」

「……………ッ!？」

数秒間、動きが停止した一真君。

固まってる…？

その後、耳まで真っ赤になった一真君は、急いで、離れようとした。

……“離れようとした”……が、足を打っているらしい一真君は、動けないらしい。

「……ごめん、雅」

「何？」

「……俺のこと、抱っこして」

「……はっ??????」

ちよ。

ちよ、ちよちよちよ、ちよおおおおお~~~~と、待った！

それは、アレですか？

あの、「お姫様抱っこ、して？」っていう、おねだりなのですか！？

あたし、女だよ！？

一真君、男だよ！？

性別逆！逆逆逆~~~~！

「しっ、仕方ねえだろ！？このままじゃ、ずっとこの格好だぜ？こ
うなったら、コレしか方法ないだろ！」

……まあ、確かに。

徐々に、エレベーターにも人が集まってきたているし。

そりゃ……このまま、っていうのは、嫌だけどさあー。

「いくらなんでも、抱っこはないでしょ！だいたいあたし、女の子
！そんなに力は強くありませんええええん！」

そう言うのと、一真君はあからさまに嫌そうな顔をした。
しょうがないじゃん！

とりあえず、誰か心優しい人が来るのを待つて、それから……

「み~~~~や~~~~び~~~~!!!!」

……あたし、今、何て言っただけ……？
誰か心優しい人……。

確かに、心優しいのかもしれない、
でも！
でも!!!!

それが、“兄”だとしたらあたしは、喜んで、一真君をお姫様抱
っこしていたであらう。

「雅~~~~!!!!」

……ウザ。

この世界から消える。

消えてチリになりやがれ！

「お兄ちゃんは、お兄ちゃんはなあ！雅を、こゝんな冷たい子に育
てた覚えはないぞ！」

「冷たい子に育っちゃいました」

「お兄ちゃんを突き放すなんて、言語道断！」

「兄がこんなところに連れてきたからでしょう?」

ウツ、と言葉に詰まる兄。

だが、次の行動は素早かった。

ドンッ!!!

という音がしたかと思うと、一真君が兄に突き飛ばされていた。
オイオイ……。

「雅?大丈夫かい?変な奴に押し倒されて、怖かっただろう?さあ、正直に言うんだ。ファーストキスは奪われたかい?もしそうなら、僕が消毒を……っ」

「ハゝイ、兄よ、キモイ事はやめようね」

だいたい、一真君は足も痛そうなのに、兄に突き飛ばされて、肩とか腕も痛そうじゃない。

これじゃ、もう立てないね…。

ん????

……そうか!

「お兄ちゃん!」

「みつ、雅…。やっと、お兄ちゃんのお嫁さんになる決意ができたのかい!?!」

「違えよ馬鹿!……あのね、一真君を、お姫様抱っこして、お屋敷まで連れて帰って欲しいのお」

一瞬、目が点になる兄。

うん、予想通り。

「ダメえ？」

必殺、上目遣い！！！！

それをした瞬間、兄は、気持ち悪いくらいに（いや、気持ち悪かった）ニヤけた。

…スケベ親父！

「仕方ないなあ。雅の頼みだからなあ」

よっ、と、兄が一真君を担ぐ。

一真君は目を白黒させて、呆然としている。

「じゃーねー、一真君、兄」

「雅ー、デートはまた今度なー。お兄ちゃん、待ってるからー」
「み、雅！？」

……よし！

それじゃ、帰るかな。

第二十二話　これは恋なのか

無事、エレベーターから救出されたあたしは、のんびりと夜の街を歩いていた。

あー、よかったあ。

もう、今後一切高いところには行かないようにしよう。

「そつえば、もう、秋なんだなあ……」

半袖の服が寒くなってきた今日この頃。

夜空を見上げると、星が二つほど輝いていた。

ここは都会だから、あんまり星が見えないな……。

「って、何一人で黄昏^{たそが}れてるのよ、あたし！」

乙女になつてる場合じゃないし！

夜道は変態さんが多いから、早く帰らないと……。

でも。

考えなければならぬことがある、と思う。

それはもちろん、あたしと、一真君のこと……。

一真君は、とても格好いい。
モテる。

たまに優しい。

……でも、恋愛の対象外だったはず。

ここで、“はず”と言ってしまうのは、さっきの出来事があったから。

今までは、どんなにかっこよくても、どんなにモテても、どんなに優しくても、関係なかった。

だって、一真君に、恋愛的な興味を抱いている訳じゃないから。

好きじゃないよ。

だって、だって……一真君は……。

「一真君は、違うもん」

ろくな理由もないけれど。

何故かは知らないけれど。

一真君は、違うはず。

違う……よ、ね????

「あー、もうっ！意味分らないし。あたしに恋とか一生無理ー！」

空に向かって叫ぶ。

誰か、助けてよ。

この、恋なのかそうじゃないのか、よく分からない場所から。

もともと、一真君のことは、嫌いじゃなかった。

むしろ、好きだった。

けどそれは、“ときめき”とは違う。

友達として、イケメンとして、好きだった。

でも……、本当に、そうなの？

「ぐあああああ！分かんないよ！」

髪の毛かきむしる（いかん、将来ハゲてしまう！）。

やっぱりあたし、考えること苦手だ。

こうなったら、当たって砕ける、って事で……『ねえねえ一真君。あたしって、一真君のこと、好きなのかな？』って聞いてみるとか？

……いや、無理。

一真君、顔が真っ赤になって、『は、はあ！？そっ、そんなの、自分で考える！』って言うに決まってるし。

……うーん……。

「こういう事を相談できる友達といえば……」

若松君……は、あたしと一真君の関係を、BLだと思ってしまうからダメ。

ご主人様……も、若松君と同じ。

中原さん……は……たぶん、ダメ？

お兄ちゃんは、論外。

となると……？？？

「瑞穂に、相談してみようかな」

青木瑞穂。

あたしの唯一の親友。

友達が多いが、親友まで上り着いたのは、瑞穂だけである。

「よしっ、こういう時こそ、メールで……」

『瑞穂。聞いてよ。あたしって、恋してるのかなあ???』

用件だけ打ってメールを送る。

よし、送信！

すると、その後すぐに、瑞穂から返信がきた。

『はあ！？いったい何言ってるのよアンタは（?|?）っていうか、雅が恋するなんて、チャンチャラおかしいわ。何がどうなったら、そういう考えにたどり着くわけ？理由を教えなさい!!』

かわいらしい顔文字付きで返ってきたメール。

ああ、女の子っぽい。

『メールじゃ伝えきれないよ……。瑞穂お、今から、どこかで会わない?』

瑞穂のメールに、素早く返信を送った。

ちなみに、さっきからのメールのタイトルは、『恋って何?』。

『それじゃ、のビルの地下に、深夜でもOKの喫茶店があったから、そこにしよう!』

ラジャー！

こうしてあたしは、瑞穂と恋愛談義（いわば恋バナ）をすることになった。

第二十二話 これは恋なのか (後書き)

第二十三話 好きってなあに？

「瑞穂お〜」

「雅、どうしたのよ？」

クラシックなムードが漂っている喫茶店に、あたしのマヌケな声が響く。

あ、今、コーヒー飲んでる人から、嫌な目で見られた。

「瑞穂……恋って何？好きって何？愛って何？？？」

「はあ！？」

一気に責め立てると、瑞穂の頭にはてなマークが。

「アンタ、何考えてるの？」

「一真君のこと」

「……何があつたの？」

瑞穂の目が真剣だ。

これって、あたしの話を、本気で聞いてくれるんだよね？
少し嬉しいかも。

「あのね。」

今日、瑞穂が逃げちゃった後にね、お兄ちゃんに会ったんだ。そしたら、デート！とか言って、夜景が見えるレストランに連れて行かれたの。

あたし、高いところが苦手だったから、逃げ出したんだけど……」

そして、そこで。

あの人に、会った。

「一真君に、会ったんだよ」

一真君を思い出して、鼓動がはねる。

うわ、ヤバイ。

あたし、まるで恋してるみたい。

「それで、ご主人様の、パーティーに行つて、そこから、一真君と二人で抜け出そうとして……」

「ふーん？」

興味があるのかないのか分からないような反応。

瑞穂、冷めてるね…。

「それで、エレベーターに乗ったら、エレベーターが、急に止まっちゃつて。あたし、高いところ苦手だから、何も考えずに、泣き叫んだの」

今思うと、なんて軽率な行動だったんだろうか。

緊急事態には、冷静に対処しなければならないのに。

「そのとき、一真君が、『大丈夫か？』って聞いてくれて。あたし、大丈夫じゃなかったんだけど、反射で頷いちゃったんだ」

自分の心に嘘をついた。
大丈夫じゃないくせに。

意地なんて張らないで。

強がりなんて言わないで。

あたし自身はそう言っけれど、言葉になって出てくる訳じゃない。

「気づいて欲しくて。頷いちゃった自分が情けなくて。いろいろ考えて、それでも、一真君に伝わるはずがなかった」

それなのに。

あの人は。

気づいて、くれた。

「そのとき、一真君が、『大丈夫じゃ、ないだろ！』って言うてくれたんだ。その時から、鼓動が速くなり出して、顔が熱くなって……」

一真君のことしか、考えられなくなった。

分からないはずの、自分の本当の気持ちに、気づいてくれたのはあの人。

友達としか思っていなかったあの人。

ずっとずっと、いい友達だと思っていたけれど……。

「それで、恋に落ちたって事ね？」

「うん………って、違ああ〜うっ！」

また反射で頷いてしまった！

違う違う違う！

あたし、好きなんかじゃないもん。

「どうしてよ？今までの話は、全部恋する乙女のお話だったけど？」

こ、ここに、恋する、乙女えええ〜！？

その言葉は、あたしに一番似合わない言葉ですう！

あたしは、一生独身になってしまふような、さえない女の子なんですから！

「あのさ。もっと、素直になりなさいよ。アンタ、自分の心隠しすぎ。恋って、もっとがむしゃらに突っ込んでいくもんでしょーが」

が、ガムシヤラ……？？？

「そうよ。女の子っていうのはね、恋するパワーだけで動いているもののよ。アンタが、今まで何の気もなしで動いてきたっていうのが不思議なくらいね。」

好きな人のこと追っかけ回して、その人のことを目で追って、自分から話しかけて……。そーゆー、強い精神っていうのはね、全て、恋から来てるんだから！」

恋するパワー…。

そんなパワー、あたしに、あるの……？

っていうか。

あたしは、恋をしているの？

誰に？

何時？

どうして？

ー真君のこと、あたしは、どう思ってるの？

好き？

嫌い？

友達？

嫌いじゃない。

友達だと思ってた。

でも、もう、友達ではいられない。

「好き、なのかな」

そうつぶやいた言葉は、きちんと瑞穂に聞こえていたようで。

「そうよ。まずは、その気持ちから始まるのよ、恋っていうのはね」

ニヤリと、ニヒルに笑った瑞穂は、美しかった。

「瑞穂、ありがとう」

「礼には及ばないわ。ま、とりあえず、明日からは、自分の気持ちに正直に、ね？」

うん。

素直な気持ちで、一真君を見つめてみるから。

ただひたすらに、ガムシヤラに。

「それじゃ、私は行くから」

あつ、ちよつと待って！

「何？まだなんかあるの？」

「瑞穂、あたしが初恋なんでしょう？なのにどうして、そんなに恋のこと詳しいの？」

初恋で、こんなに分かるものなのだろうか。

「……………昔。こういう、くだらないことを教えてくれた人がいたのよ」

……………え……………???

その言葉を言った瑞穂は、今までに見たことがないくらい、凛々しい顔をしていた。

第二十三話 好きってなあに？（後書き）

ハイ、どうも。

瑞穂ちゃん、雅へのご協力、ありがとうございました。

「そうよ、雅の相手するの、疲れたわ。報酬、あるんでしょうね？」

ありません。

「何ですってえ？」

……スイマセン、やっぱり、今度ケーキバイキングにでも行きましょう。

「オッケー」

っていうか、瑞穂ちゃん。

最後に出てきた、くだらないことを教えてくれた人って、誰？

「誰でしょうか？」

ええ、そんな、教えてよ。

ってことで、この、「謎の人」については、いつか書ける時が来たら書こうかな、と思っています。

第二十四話 意識しつつ…

昨日、瑞穂と別れた後に、お屋敷に戻ったあたしは、ベッドに直行！

そのままぐっすりと眠って、朝起きると……

「いいじゃーん、天音っち」

若松君に、せがまれていました。

「おっ、俺、困るし……っ」

「お願い！ほら、俺達、友達じゃーん！」

あ、可愛い……。

って、違う違う違う！

「ミヤコちゃんのメルアド教えてー！」

そう。

若松君はどうやら、ミヤコ（つまりはあたし）を気に入ったらしく、必死にメルアドを聞いてくるのだ。

諦めてください。

「俺、知らないし……」

「嘘ー！従兄弟なんでしょ？」

ウツ、そうだった……。
っていつか、そういう設定だった……。

「従兄弟、だけど……そ、そうだ！ミヤコには、彼氏がいて……」

カレカノ設定！

ふはは、これで若松君も、つきまとわなくなるだろう。

「ミヤコちゃん、彼氏いんの？」

「うん、そうみたいだね」

「そ……っか……」

一気にしゅんとしてしまう若松君。

い、犬みたいだよ……。

超可愛い。

イケメンLOVELOVE

「……じゃーさ！天音っち、女装して！」

……は……???

ジョ、ソ、ウ……。

ジョソウって、助走？

「天音っちが、ワンピースとか着たら可愛いと思うんだよね」

あつ、女装ね……。

って、はあ！？

あたし、女だし！

男装してるだけだからー！

…とは言えないあたし。

「ごっ、ごめん、俺、そういう趣味はなくて……」

これは本当です。

ワンピースなんか着る趣味ありませんから！

わざわざスカートを履く人が信じられませんから！

「一回だけでいいからさ！」

しつこく言い寄る若松君に、いい加減飽き飽きしてきた。
正直、ウザイよ？

「ねー、お願いお願い……！」

「いい加減に……ッ」

いい加減にしなさい！

そう言おうとした瞬間、聞き覚えのある声が降ってきた。

「若松。雅、嫌がつてるじゃん。やめろよ」

一真君……。

「あれっ、橘？」

若松君の不思議そうな顔。

どうやら、話題はズレたらしい。

よかった……ほっと一安心。

「若松。お前、酒臭いぞ。それで学校行ったら、どうなるか……」
「うわっ、ヤベ！そーいや昨日、酒飲んだんだよな！。風呂行つてこよ〜！」

ものすごい速さで駆け出す若松君。

一方あたしは、かちんと固まったまま、一真君に背を向けていました。

情けない……。

「雅、大丈夫か？」

うつ、声、カッコイイ。

自然と頬が赤くなる。

あー、若松君に攻められるのも嫌だけど、一真君と二人つきりも、かなり嫌かも……。

っていうか、地獄？

「ダイ、ジョーブ！」

赤くなつた顔を見せられなくて、背を向けたまま答える。

それを、不審に思つたらしい一真君は、あたしに近づいてきた。
お願いですから離れてください。

「雅？お前、一体どうし……」

「あ、あああ、あたし、今から着替えるからね！じゅ、10秒いなしに出て行かないと、あたし、脱ぐから！」

ギャーーーーー！

あたしつてば、いくら一真君を遠ざけるためでも、これはないで
しょ！

一真君、啞然としてるし。
口が開いたまま閉じてない！

「あ、え、お、そ、その、ゴメン！で、出てく、からっ！」

茹でタコのように真っ赤になった一真君は、一目散に部屋から逃
げていった。

ふー、やれやれ……。

「こんなじゃ、あたし、一真君とマトモに話せないよ……」

ほえー……先が長いなあ……。

第二十四話 意識しつつ…（後書き）

重大発表です。

あたし……“中学一年生”です。

ハイ。

そうです。

まだ、義務教育終わってません。

つてなことを発表したのには、訳があります。

実は、もうすぐ、「中間テスト」があるのです。

私、成績は悪くないのですが、テストの点数はやはり高めの方がいいな、と思ひまして。

一週間程、休みを取らせていただきます、たぶん。

もしかしたら、勉強に飽きて、更新するかもしれませんが……。

とりあえず、勉学に励みます……。

第二十五話 たどり着いた結論（前書き）

お久しぶりです！

お待たせして、申し訳ありません。

中間テストも無事（？）終わりました。

第二十五話 たどり着いた結論

「好き、なのかなあ……」

一真君に、「着替える」と宣言してしまったので、素直に（？）着替えるあたし。

ピンクの執事服（気持ち悪い……）に着替えて、髪型もキツチリ整える。

……一真君は、こういう短い髪、嫌いかな。

やっぱり、女の子らしく、長い髪形の方が、いいのかな。

「ぐあああああ！！何乙女してるのよあたし！引ッ込めこの乙女妄想ッ！」

せつかく整えた髪を、自分でグシャグシャにってしまった……。もう嫌、最悪……。

「み、雅？入っていいか……？？」

……か、一真君……？？？

ま、まだ居たの！？（何気にひどい）

「あ、えと、うん、入って、いいよ……っ」

何言ってるんだあたしー！

入っちゃダメ、NO！

今あたし、顔赤いから！

こんな顔見せられない……！

「じゃ、入るぞ」

「……ッ」

顔が、熱い。

何コレ。

なんか、世界が桃色に見える。

あ、足元がフラついてきた……。

「雅、あの……さ……？どうした？顔が真っ赤だぞ」

ヒィー！

気づかれた……！

「そ、そうかな。気のせいじゃない？」

見ないで見ないで。

どこか行つて。

好きかもしれないけど、っていうか気になってるけど、とにかく、今はどこかへ行つて下さい。

恥ずかしすぎて、一真君の顔を見れませんから。

「熱あるんじゃ……」

あれ、と思った時にはすでに、あたしの額に一真君の手が当てられていた。

……な、何をしているの……？？？

「か、かかか、一真君！？何して……っ」

「何って、熱があるかどうか、確かめて……」

近い！

近いから！

近寄ってきている！

触られた額が、熱い。

一真君の整った顔が、目の前にあって、それで……。

「一真君……」

カッコイイ。

相変わらず、美少年だ。

「みや、び……？」

目を丸くする一真君。

そんなに驚かなくても。

「一真君、あたし、ね……」

え？

あたし、何を言おうとしてるの？

嫌だ、何これ。

あり得ない……冷静になるのよ雅！

まだ、好きかどうか分からないんだから……。

「あたし、一真君のこと……！」

「とうっ！若松陽太、ここに参上！」

……ものすごく、素敵なタイミングね……。つ。

自分が何を言おうとしたかなんて分からない。
でも、これだけは分かる。

…若松君って、ものすごく、馬鹿。

「わっ、わわわ、若松！お前、なあ……。！」

「えっ、何々！？俺ってば、邪魔だったあ？そういえば、橘と天音
っち、なんか近い……」

ポツと顔を赤くさせて言う若松君。
それを見た瞬間、あたしの頬がカッと熱くなって、そして…

「ぎゃあああああ！離れて一真君！」

気づけば、一真君の頬を平手打ちしていました。
ああ、どうして、好きかもしれない人にこんなことを……。

「あはははっ、橘、痛そっ」

ニヤニヤ笑う若松君。

「痛えっ……」

少し腫れている頬を押さえる一真君。

そして。

「ふっ、二人とも、最ッ低！いい、いい、意味、分かんないんだから！」

おそらく、真っ赤になっているであろうあたし。

狂っている。

でも、楽しい。

こんな風に、ずっと、みんなで笑っていたい。

恋愛なんて、いいや。

あたしには、似合わない。

ずっとずっと、友達でいよう。

第二十五話 たどり着いた結論（後書き）

ふうー。

更新できて、やっと一安心。

さてさて、ただいまです！

読者の皆様からの、暖かい応援メール……本当に、ありがとうございます！
ございました！

えっと、雅ちゃんが、ものすごく変な結論にたどり着いちゃった
んですけど…（汗）

こうなる予定じゃなかったのに…。

恋する乙女はピンクが嫌い？の登場人物たちは、私が思っている
通りに動いてくれないから困ります。

だんだん脱線していくんですよね…。

とりあえず、脱線したのを戻してから、ストーリーに移らないと
（笑）

第二十六話 気のせいでありますように

きつと、この気持ちは、「好き」なんかじゃない。
友達に対する想いなんだ。

あの時感じたときめきも、胸の高鳴りも、全部、あたしの気のせい。
い。

「そうだよ、ね？」

そうじゃないと、困るよ。

だって、あたしが一真君の事好きになっても、向こうはたぶん、
あたしのことを、友達だと思ってる。

そんなの……寂しすぎるよ……。

「ああー！もう、やめやめ！考える事なんて、あたしには向いてないんだからー！」

……よしつ、邪念を追い払った！

さあ、学校へ行く準備をしないと……。

「雅！まだかー？」

あ、ご主人様。

今日も見事にピンク三昧……。
派手だなあ。

「スイマセンご主人様！いつ、今行きますからー！」

ええっと、忘れ物は……ないよね？

オッケー！

レッツゴー！

急いでご主人様の所に走る。

ぎゃー！

遅刻するー！

あ、でも、どうせ車でお迎えだし？

大丈夫かな…。

「急げ雅！遅刻だぞ！」

「わ、わわわ、分かってます！」

とうっ、とジャンプして車に飛び乗る。

ふーっ、間に合ったあ…。

って、もうみんないるし！

あたしのせいで待っていたの…？

……ゴメンナサイ。

「み、皆さん、俺のせいで遅れてしまつて、スイマセン！」

頭を下げてお詫びをする。

許してくれるかな…。

遅刻ギリギリだし…。

「謝らなくてもいいって！」

「そうそう、天音っちのせいじゃないし」

「いや、若松、それは違うだろ。雅のせいだ」

「何だコイツ。雅様の邪魔をする気か？」

「ヒイツ！い、いえ、そんなつもりは……ッ」

…みんな……！

ありがとう。

やっぱり、友達って大切だね！

「さ、早く乗りなよ」

大柄なイケメン君が、自分の隣の席をサッと譲ってくれる。

ああ、いい人……ッ！

「あ、でも、貴方の隣には、人が……」

「いいから！こんな奴は立ってればいいんだよ。さあ、雅様、こちらへ！」

あ、あははは……。

でもそれは、隣の人に悪いし……。

「とりあえず、空いてる席に座りますから。ありがとう」
「チッ」

し、舌打ち！？

何それ！

あ、あたしに何か恨みでも……（違います by 作者）。

「えっと、どこか空いてる席は……」

「天音っちゃん！ここここ、ここ空いてる！」

若松君の元気な声。

ここつて、どこ……な、んです、か……。

「か、一真君……」

自然と頬が引きつる。

意識しちゃダメだよあたし。

友達なんだから。

「……よお。隣、空いてるから」

座れば？とでも言いたげな口調。

でも、それを言わないのがもどかしい。

やっぱり、一真君はあたしのこと、好きなんかじゃ……

「すつ、座れば、いいじゃん」

最初、その言葉が一真君の口から出てきたのだとは分からなかった。

あまりにも、普段の一真君とかけ離れていたから。

……一真君の顔、真っ赤…

さっきまで引きつっていた頬が、自然と緩んでしまう。

それどころか、顔が熱くなってきた。

やだ、急に気温上昇？

「……すつ、すすす、座るからっ！」

あたしの口から出た言葉は、甘い言葉でも、可愛い言葉でもなく、

っけんどんな言葉だった。

もう少し可愛いく話せればいいのに。

「…おう」

「……ッ」

隣に座るだけで、ものすごく胸が高鳴っている。

ときどき、ときどき。

顔も熱い。

っていつか、体中が、燃えるように熱い。

……どうか。

どうか、この高鳴る鼓動が、気のせいではありませんように。

そう願わずにはいられないのは、あたしが意地っ張りなせい？

第二十六話 気のせいでもありますように（後書き）

テストが返ってきました。

……死んだ……。

結構頑張ったのに理科がダメでした（泣）

あたしは理系じゃないんだから！！！！

って言っても、意味ないよなあ……。

第二十七話 電撃お付き合い

よくあるでしょう？

漫画や小説で、お金持ちのご主人が出てくるときに、真っ赤な絨毯を広げて、トランペットを吹く、みたいなシーン。でも、忘れないで欲しいんだ。

そういうシーンには、いつも、密かに頑張る、裏方さんがいるって事。

「よし、学校へ到着した！レッドカーペット用意！吹奏楽部隊準備はいいか！？者ども、一列に並んでおりんだぞ！列を乱すな！一人だけ目立つなんてことは無しだ！いいか、目立つのはご主人様のみ！我らは脇役だぞ！！」

イエッサー！

と、完全にどこかの軍事モノみたいになってます。

今は、ご主人様が登場する準備。

みんないそがしそうに働いていますよ。

吹奏楽部隊は、トランペットや小太鼓、フルートなど、様々な楽器を持って待機してるし。

レッドカーペット係は、完璧に敷けるように準備中。

そして、あたしのように、何の係でもない凡人は、ひたすらにまっすぐ並ぶ事をイメージトレーニング。

「……よし。それでは、ご主人様はいつも通り、最後に着いてきてくださいね」

「ああ」

「うつしやー！ テメエら、準備はいいかー！？」

『おおー』

「行くぞー！」

きゃ、キャラが変わってます、中川さん。

この小説で一番影が薄いだろうと密かに作者に思われている中川さん、だが今は、軍事モノのカッコイイリーダーだよ！！

「……作者、そんなことを思っていたのか……」

「あれ、中川さん、聞こえてました？」

「筒抜けだ」

あっちゃー、聞こえてたらしい。

って、今はそれどころじゃないよな。

車の扉が開く。

そして、最前列の執事が前へと進んだ。

順々に進んでいき、ついにあたしの番。

前の執事と、息を合わせて、身長に……！！

なかなか、よくできたと思う。

パンパカパン、パンパンパン、パン！

派手な音が、校内に鳴り響いた。

吹奏楽部隊の、トランペットの音だ。

それに会わせて、小太鼓、大太鼓も、リズムに乗る。

フルートは、音を軽く上乘せ。

タイミングを見計らい、中原さんが叫んだ。

「桃原家御子孫、桃原スモモ様の、おなあーりー！」

『おなあーりー！』

そして、ご主人様登場！

……はあ。

今日も朝から、目立ってるよな…。

「皆、今日もよい朝だな。この快晴のもと、よりよい一日を過ごせるように、努力しよう」

爽やかな笑顔で、ご主人様が言った。

うーん、カッコイイ。

例えピンクでも、ド派手でも、あり得ないくらい目立っていても、カッコイイものはカッコイイのだ。

「それでは、執事一同、解散！」

中川さんの一言で、あたしは自由の身！

さーと、瑞穂はどこにいるのかなーっと……。

「雅くう〜ん」

…はて……？

この、甘ったるい声、どこかで聞いたことがあるような…。

あたし（っていうか俺）の名前を呼ぶのは、誰？

「おはよう、雅君 今日朝から、大変だね！」

ッ……！

み、みみみ、み……瑞穂お！？

そうか。

どこかで聞いたことがあるような声、って……瑞穂が、ぶりっこ
しているときの声だったんだね！

納得！。

「み、瑞穂、どうし……」

「雅君ってば、やだあ もう忘れたのお？私と雅君は、付き合っ
とになったんだからあ」

……は、はああああああ！？

第二十七話 電撃お付き合い（後書き）

瑞穂ちゃん、不思議な行動に出ました。
さて、これからどうなるのでしょうか？

第二十八話 全ては思うままに（前書き）

今回は、雅、一真、瑞穂の三人の視点でお送りします。

第二十八話 全ては思うままに

「みつ、瑞穂？何を言って……」

「雅。静かに」

いきなり口調が変わる。

それと同時に、声の音量も小さくなった。

「いい？アンタ、モテるのよ。昨日私、不本意にも、アンタに告白したでしょ？その時、アンタ、告白交わすの大変だったじゃない。あんなのだったら、携帯に女の子のメルアドがたまっていくな」

げげっ…！

女の子のメルアドたまりっぱなしだななんて…。

しかも、男としてメールしなくちゃならない！？

む、無理…。

「分かったわね。だ・か・ら、私が、彼女の代わりしてあげてるの。別にー、橘君に頼んでもいいんだけどー？」

意地悪そうな目つきで、ニヤリとこちらを見る瑞穂。

むー……。

少し悔しいけど、赤くなっている顔を瑞穂に見られなくて、俯いた。

「どうする？橘君と恋人同士になって、Bしと言われるか、私と

恋人同士になつて、美男美女のカップルだと言われるか」

自分で自分のことを「美女」と言うあたりが、瑞穂らしい。
つていうか、あたしつて、美男？

「……瑞穂、よろしく……」

「はいはい、任せておきなさい！」

ニコツと、無敵の笑顔で笑う瑞穂。
綺麗だなー。

「雅くん、行こっか」

うつわ、甘つたるい声。

瑞穂の口から出たとは信じられないや。

「あ、ああ……」

「あのねえ、瑞穂ねえ、雅くんのために、お弁当作ってきたから、一緒に食べようね！」

「え」

驚いて目を丸くすると、「嘘に決まってるでしょ」と小声で言うてきた。

あー、嘘ね。

それもそうか。

瑞穂が、あたしのためにお弁当作ってきてくれるなんて……ねえ？

「さあー、行こお？」

「う、うん……」

女子生徒からの熱い視線（あと、瑞穂のファンからの冷やかかな視線）を背中に受けながら、あたし達は手を組んで歩いていった。

+++++

「何なんだ、アイツは…」

雅と、髪の長い少女が歩いていく。
手を組んで。

いつ、いつの間に、同性愛者に！？

「レス……？」

「どうした、橘？」

何も知らない、陽気な若松が近づいてくる。

「あつ、天音っち？あれ、彼女なんだよなー。美人さん」

カノジヨ……。

その言葉が、生々しく俺の胸に突き刺さる。

……奪われた。

別に、俺のモノじゃなかったけど。

でも、雅を、女に奪われたのは、かなりショックだ……。

「ん？橘、もしかして……諦めた？天音っちのこと」

諦め、なくちゃ、いけないよな……。

くそつ。

女なんかに奪われるなんて！

つつか雅、お前、イケメンが好きなんじゃねーのかよ。

あの女、イケメンではないだろ！

「まーまー、そう落ち込むなよ。ドンマイ！俺が合コンセッティングしてやるからさー」

「……悪い。俺今、冗談に乗れる気分じゃない……」

「そんなにシヨック！？天音っち、童顔だけど、男だよ？」

女だよっ！！

とは言えないのがもどかしい。

ぐああああああ！！！！

どうしてこの俺が、女ごときに雅をとられなくちゃならねーんだよ！

くっそー……。

畜生…ッ！

「あー、ムシヤクシヤする。若松、一発殴らせろ！」

「はー！？俺を殴っても、何の解決にもならな……」

「ストレス解消」

「ぼっ、暴力はんたーい！！！！」

あーくそっ！

むかつく。

それもこれも、雅が、あの女なんかについて行くからだ。

それを、嫉妬やヤキモチと捉えることは、今の俺にはレベルが高すぎた。

+++++

「あらあら。怒ってる怒ってる」

ちらつと後ろを振り返ると、橘君が若松君に怒鳴っていた。
殴らせる、だとか言っていたような？
隣で雅が首をかしげる。

「誰が？」

「秘密よ」

「うわっ、何その目つき！悪戯しようとしてる！？」

フフフ。

いいのよ、雅。

アンタは分からなくても。

この私が、アンタと橘君の仲人^{キュービッド}になってあげるんだから。
感謝しなさい。

「この私が、全てを完璧にしてあげる」

知らず知らずに、言葉になっていた心の声。

また、雅が怪訝そうな顔をする。

あーあ、これじゃあ、せっかくのイケメン君が台無しね。

……いけない。

これじゃあ、セッティングの時間に間に合わない。

全ては、計画通りに進めなくちゃね。

世界は、私の思うとおりに。

「急ぐわよ」

「えっ、瑞穂！？どこに行くの！？」

計画通りに。

思うとおりに。

さあ、ショータイムの始まりよ。

第二十八話 全ては思うままに（後書き）

さてさて、どうなることやら...？
この一日は、長くなるかも…。

第二十九話 彼の誤解

突っ走る瑞穂。

引きずられているあたしの気持ちも考えてください。

「雅、遅い！」

「も、もう無理だってば」

瑞穂みたいに、体力ないし。

どうせあたしは、運動不足に陥っている女の子ですよーだ。

「急がないと、間に合わないんだから！」

「だから、何に間に合わないの!？」

「いいから!とにかく走る！」

あたしがその質問をすると、逃げるようにスピードを速める瑞穂。

うっっ……!

し、死ぬうっっ……。

「よし、何とか間に合うわ」

「え???」

キンコンカンコン……。

丁度、鐘が鳴った。

まるで、計算されていたかのように。

「セーフ、ね」

ニヤリと笑う瑞穂。

その笑顔には、裏がありそうで、怖い。
び、美人がそういう顔を見ると、本当に怖いんですけど……。

「ねえ瑞穂、これから、何が始まる」

「み、雅！？」

なんとというタイミング。

丁度、偶然にも……というには、あまりにもできすぎているけれど……とにかく、一真君が現れた。

ハイ、ありえない。

何これ。

どこの神様が、悪戯でこんな運命にしたのかは知らないけど、タイミング良すぎ。

……これって、本当に、偶然なの？

「一真君……」

「……雅。お前って……お前って……！！」

なんだか怒りを抑えているような口調だ。
どうしたんだろう、一真君。

「お前、って、さあ……！！」

「うん？」

一瞬視線をそらす一真君。

その後、すぐにあたしに視線を戻し……

「お前って、同性愛者だったのか！？」

……は……？？？

ドウセイアイシャ……？

漢字変換ができない。

脳が正常に働いていないのかな？

「レズか！？」

「っ、え、ええ！？」

れず、って……。

女の人と女の人が、愛し合う、っていう、意味だよね？？？

あたしが！？

「そっ、そんなわけ、ないでしょう！？」

「じゃあ、その女は何なんだよ！！」

その女……って、瑞穂のこと？

何って……友達、だけど？

一真君に言っただけだったわけ？

「この子は、あたしの……」

「どうも」初めましてえ！私い、雅君の彼女でえす！よろしくお
願いしまあすう」

は！？

カノジヨオ！？

それは、女の子達の前での設定でしょ？

一真君には、バラしてもいいのに……。

「 ツー！！ じ、じゃあなー！！」

猛ダツシュで走り去っていく一真君。

走り出す直前、一真君の顔がゆがんだように思えたのは、気のせい？

……なんか、嫌だな。

「ちよつ、瑞穂！どうして……っ」

「雅。アンタ、橘君のこと、どう想ってるの？」

瑞穂を問いだそうとしたのに、瑞穂に逆に問いだされてしまう。
どうって、言われても……。

「……友達で、いなくちゃいけない、と思う」

「そう……」

「友達でいないと、あたしも、一真君も、辛い思いをする気がする

……」

「ふうん……」

自分から聞いてきたくせに、さらっと受け流す瑞穂。
な、何よお！！

「それなら、今の橘君を見ても、なんとも思わなかったんだ」

……。

それは、言わないでほしかった…。

自分でも気づいてるんだよ。

一真君の、ゆがんだ顔を見た瞬間、あたしの顔もゆがんだんだろ
うな、って。

この気持ちの正体が、何なのかっていうのも、想像がつく。

…でも！

でも、さ……

「やっぱり、よく分かんないんだもん…」

正直な感想を口に出すと、瑞穂が笑う。

「オーケー。その結論ができれば、上出来。さあ、次のセッティング
に間に合わないわよ？」

だから、セッティングって何なの？

あたしがその言葉を口に出す前に、瑞穂は走り出していた。

第二十九話 彼の誤解（後書き）

不思議な展開に…。

とりあえず、ハッピーエンド目指して頑張ります！

第三十話 これも実力？（前書き）

記念すべき三十話なのに、くだらない内容です…。

第三十話 これも実力？

「瑞穂！もう、一時間目始まつてるんだけど…っ」

「分かつてるわよ！今日は大切な日だから、アンタは一日サボリよ！」

えー！

サボリ、ですかあ？

それはちよつと、困る…。

「いいから！次は…よし。とりあえず、話し合いよ！」

「は！？」

「乙女トーク」

乙女トーク…。

それは、つまり…

『恋バナ』

…だよね…。

恋なんてしてないのに。

一真君は、あたしの大切なお友達で…。

だから、あたしは、恋なんて、してないんだから…。

「とにかく、屋上へ行きましょう？そこで、アンタに気づかせてあげるから、さ」

???

気づかせる、って、何を……？

なんだか、すごく嫌な予感がする。

気づくも何も……話の内容が、全く分からないんですけど。

「屋上へレッツ・ゴ」

上機嫌の瑞穂。

その瑞穂に引きずられるあたし…。

「あれ、天音っち……？」

げげげっ。

わ、若松君……？

会いたくなかったー。

「……天音っち、聞こえてるんだけど」

えっ、嘘。

あはは、ごめんごめん。

悪気はないんだよ？

つい、本音が出ちゃって…。

「……」

黙り込む若松君。

黙るって言えば、瑞穂がさっきから大人しいなあ…。

「…計算外だわ…」

えっ？

今、瑞穂が呟いた声が聞こえてきた気がする。

計算外、って……？

「……。…こんにちは あ、私い、天音雅君の彼女のお、青木瑞穂あおきみすほで
えす！若松君ですよ〜？雅君から、お話は伺っているんです。
とってもおもしろい方って、雅君がほめていましたよあ？」

さっきまでの、計算しつくした瑞穂とは違って、ぶりっこした瑞穂になる。

うわー、切り替え早えー！

っていうか、“魔性の女”？

顔がいいから、何人でも男をだませそう…。

「えっ、おもしろい？そうかなあ〜！えへ、えへへへ。おもしろい、
かあー」

急にデレデレし始める若松君。

あーあ、これだから、男の人って嫌なんだよ。

綺麗な人見ると、すぐに赤くなっちゃって。

……あれ？

なら、どうして、一真君は赤くならなかったんだろう？

それは、もう……心に決めた人がいるから……？

それは、誰？

気になる……すごく、気になる。

……どうして、あたしは、一真君のことが、こんなに気になるの？？？

「それじゃあ、失礼しますねえ」

「えっ。でも、もう一時間目が……」

「失礼します」

「一時間目……」

「失礼、しますからね　いいですよねえ、若松君」

瑞穂の甘い声。

その声を聞いていると、自分が瑞穂のことを好きだと思ってしま……い、いや、違うぞ。

あたしは、同性愛者なんかじゃないんだからね！？

ノーマルノーマル！！

「それでは　雅君、行きましょ？」

「えっ、あ、うん」

「だから、一時間目が……」

しつこく言ってくる若松君に、瑞穂の肩が震える。

……これは、相当怒っていらっしやいますね。

「み、瑞穂？少し落ち着い……」

「若松君、だあゝいすきい」

………はあ！？

瑞穂は、怒っていたにもかかわらず、いきなり若松君に抱きついた。

あたしは呆気にとられ、若松君は固まって動けない。

そんな空気の中、瑞穂一人だけが、甘い声を出して、若松君に抱きついていた。

「瑞穂ね、若松君のこと、だあいすきだよお？」

「え、あの、でも、天音っちは…？」

「雅君よりも、好きになっちゃったのお」

「ッ…!!」

「だ・か・ら　一時間目が、とか、言わないでね？」

あっ！

そうか、おねだりのために、甘い声を…。

効き目はバツグンで、若松君はメロメロ、完全に、瑞穂の下部状態。

「い、言いまひえん!!」

「おりこうさん」

とどめに、瑞穂は若松君の頬に、チュッとキスをする。
若松君は、茹でたタコのようになって、倒れた。

「瑞穂、すごい!!」

「このくらいは、簡単よ」

……怖ッ。

第三十話 これも実力？（後書き）

笑ってもらえれば幸い。

第三十一話 この気持ちの正体

ヒエヒエ………！！

あたしの体に、寒々しい風が当たる。

あ、あのお、瑞穂さん。

もう冬なので、屋上で乙女トークは、さすがにキツイかと思われ

……

「何言ってるのよ雅！恋バナは屋上が基本よ、基本！」

言葉は頼もしいけど、瑞穂の体は震えている。

……瑞穂も、寒いんだね。

「さっ、寒くなんてないわよ！！これは、ちょっと、震えているフリをしているだけで……」

ツ・ン・デ・レ・さん

「ぎゃあああああ！！！！私は絶対ツンデレなんかじゃないんだからあ！！！！黙れ雅！！！」

瑞穂が怒れ狂い、屋上での追いかけっこが始まる。

逃げるあたし、追う瑞穂。

一時間目終了のチャイムが鳴るまで、あたしと瑞穂はずっと追いかけてっことをしていた。

「はあ、はあ……ッ」

「ひい……!!」

「ま、まてえ……っ」

「い、嫌だあ……!!」

既に戦場。

自分では、素早く動いているつもりなのに、足はスローモーションで動く。

瑞穂も同じようにスローモーションだから、追いかけてここに影響はないんだけどね!。

「って、何やってるのよ!? あー、タイムロス! 計画が……っ」

いきなり冷静になる瑞穂。

さっきまでのスローモーションはどこへやら、テキパキと動き回っている。

「あー、もういいわ! こうなったら一番手っ取り早い方法よ!

雅っ! アンタ、いい加減に、一真君が好きってことを認めなさい!」

……へ……?

瑞穂の喋っている言葉が分からない。

一真君が好キツテコトヲ認メナサイ

それはつまり……瑞穂は、あたしが、一真君のことを好きなんだ
と思いこんでる???」

「ち、違うよ瑞穂! それは誤解……」

「誤解でも何でもないわよ！恋するっていうのはね、その人のことを考えるだけで、ときめいて、でもその人に会っちゃうと、顔が真っ赤になって、ろくに話せない……そういうことを言うのよ！」

その人のことを考えるだけで、ときめく……。

そういえば、一真君のこと考えると、ときどきするかも……。

その人に会っちゃうと、顔が真っ赤になって、ろくに話せない……。

今日の朝、一真君に会ったとき、嬉しかったけど、顔が真っ赤になって、恥ずかしくて、全然話せなかった……。

……そうか、これって。

「これって恋なのか」

口に出して言うと、顔が赤くなった。

うわー、あたし、恋してるよ。

何年ぶり？

小学一年生以来だから……八年ぶりくらい？

「そう！そうなのよ！よく、その結論までたどりついたわね、雅！」

「え、あ、うん……？」

目をランランと輝かせて、あたしの肩を揺さぶる瑞穂。

あ、でも……。

あたしが一真君に恋をしても、一真君はあたしに恋をしていない。

「……瑞穂。あたし、この恋心、無かった事にする！」

「……………は……………？」

「それじゃーね！」

悲しすぎるよ。

この気持ちに気づいたって、一真君は、あたしに振り向いてなんかくれない。

むしろ、今の「友達」という状態から、もっと離れていくに決まってる。

「ちよつ、ちよつと待ちなよ雅！何故その結論にたどり着く！？」

何故、って……。

「……一真君は、あたしのこと好きじゃないでしょ？そしたら、あたし、悲しいだけじゃん。告白して、フラれて、失恋するの、嫌だもん」

あたしだって……両思いに、なりたいたいけど。

それには、一真君の気持ちが大切でしょう？

いくらあたしが、一真君のこと好きでも、どうにもならないんだから……。

「……雅。アンタって、臆病なのね」

ッ……！！

……言われなくなかった。

臆病、だなんて。

「告白する勇氣どころか、恋する勇氣もないのね！アンタって、そんなに臆病なの！？あの、完全無敵の雅はどこへ行っちゃったのよ！！」

「しょ、しょーがないでしょ！？あたしだって、怖いものはあるんだから！ピンクも嫌い、お兄ちゃんも嫌い、高いところも嫌い！恋も、大嫌い！！！！」

叫んだら、余計に悲しくなった。

本当は、好きだよ。

恋してるときのときめきや、あの、燃えるような感じ。好きだよ。

「雅！！！！意地なんか、張るな！！！！！！」

瑞穂の言葉が、胸に突き刺さる。

……そうだった。

あたし、素直になりたいんだった。

意地なんて張っていちゃ、駄目なのに。

……あの、エレベーターでの事件のときに、心に誓ったはずなのに。

「……………ごめん、瑞穂。あたし……………やっぱり、恋が好きだし、一真君が好き。両思いに、になりたい」

「それでこそ雅よ。だいたい、橘君が雅のこと好きじゃないなんて、決めつけない方がいいと思うわ」

慰めないでいいから、瑞穂。

あたし、玉碎すると思うけど、告白するから。

一真君に、この気持ちをも、伝えるから。

「……いいわ、雅。力を、貸してあげる。まあ、雅に言われなくてもやるつもりだったけどね。

あたしの、言うとおりにするのよ？ じゃないと、計画が台無しになるんだから」

そう言つと、瑞穂は、ニヤリとほほえんだ。

第三十一話 この気持ちの正体（後書き）

実は、このお話には、隠れエピソード（？）もあるんです。いつか書きたいんですけど……いつ書けるかなあ（遠い目）瑞穂ちゃんの恋のお話です。

以前出てきた、謎のあの人も登場題名も決まってるんですよ？

「恋する乙女はピンクが嫌い？」の続編ということだ……

って、これ以上話すとO U Tですね。いつか、書きますから！

第三十二話 最悪は重なる

瑞穂の言葉を信じることにしたあたし。
でも……

「あたしがここににいる意味ってあるの……？」

今あたしがいる場所は、図書室。

本がたくさん立ち並ぶこの場所は、あたしには似合わない空気がある。

……どうせあたしは、図書室が似合うような体質じゃありませんよーだ。

「だいたい、『ここに居ればいいから』って言われても……」

そうなのだ。

つい先ほど、瑞穂に、

『次のセッティングは図書室よ！ほら、早く行きなさい！……って、図書室の場所を知らないですって？そりゃ、アンタに図書室と縁があるとは思っていなかったけど……！！』

と言われたのだ。

そして、何故図書室に行かなければならないのか、と理由を尋ねれば、

『とにかく、図書室に居ればいいから』
などと言われてしまった……。

「とりあえず、本でも読むかなー」

図書室だし。

日頃滅多に立ち寄らないから、場所もつろ覚え（っていうか知らなかった）。

そんなあたしが読めそうな本は……

「あ、この本知ってるー。女の子と男の子の、純愛系だったよーな……」

あたしが手に取った本は、今話題になっている、「王子様を求めて。」という本。

女の子と男の子の、純愛物語だったはず……。
これなら、あたしも読めるかなー……。

「あれ、雅じゃないか」

あ、ご主人様。

何故ここに……？

「僕は図書委員だよ！昨日決まったじゃないか」

へー、そうなんですかあ。

別に、興味が無いので、すっかり忘れてました。
っていうか、知りませんでした。

「さあ、雅！どんな本でも借りていいよ！」

エヘンと胸を張るご主人様。
なんか、可愛い……。

きゅん。

……べ、別にいいじゃん!?

例え一真君のことをあたしが好きだとしても（好きだけど）あたしがイケメンを好きなことに変わりはない!!!

「えっと、じゃあ、この本を……」

ご主人様に本を手渡す。

そして、ご主人様は本の貸し出しを……

「んっ？バーコードが読み取れないぞ？」

貸し出しを……

「うわっ!!!な、何でこんなに貸し出しされるんだ!？」

貸し出しを……

「機械の故障か？故障なのかつ？それならば、新しい機械に変えさせよう。ついでに、ピンクの機械にしよう」

貸し出しを、行えませんでした。

ご主人様、機械音痴かい!!

「はあ……。もういいです。ご主人様は引っ込んでいてください。貸し出しは俺がやりますから」

単純に、その方が早いと思ったただけなのだが……ご主人様の、ご

機嫌を損ねたらしい。

いかにもムツ、としかご主人様は、完全に負けず嫌いの本性が現れている。

「いい！僕一人でやれるから！」

「俺がやりますって」

「いいって言うてるだろう！！ほら、大人しく僕に任せろっ」

「ご主人様に任せきれないから俺が名乗り出ているんでしょうが」

押し問答が続き、ついには、本の取り合いにまで及んだ。

あたしが借りる本を、二人で持って、取り合う。

本気の勝負なので、本が破けないか心配…。

「俺に、任せてください、ってば！」

「僕に任せると、言っているんだ！」

どっこいどっこいの勝負。

この勝負に決着をつけたのは、男女の力の差だった。

「うわっ！？」

「おお！？」

最初の声があたしで、二番目の声をご主人様。

ご主人様が引つ張ったせいで、本と一緒にあたしまでもが引つ張られてしまったのだ。

そのせいで、お互いの顔が急接近するというピンチに陥ってしまった……。

「……ッ」

「み……や、び……？」

間近にあるご主人様の顔は、とても綺麗だった。
幼さが残るながらも、美形である。

……そして。

最悪のタイミングで、彼は来た。

「……雅、と、ご主人様???」

……一真君、だ。

今日は最悪。

どうしてこうも、タイミングが悪いんだろう。

「一真君、これは違っ……!!」

「隠さなくていいから」

「ちよっ、聞いてよ、ねえ！」

「雅、二股はよくないぜ。どーせなら、ご主人様と付き合えば？」

「待つて、一真君！」

「じゃーな、お幸せに」

即座にご主人様から離れたものの、誤解は解けない。

それどころか、二股だと言われちゃってる。

それは、酷くないですか???

……最悪の事態は、重なるものだ。

「……み、やび」

「何ですか、ご主人様」

一真君が図書室から去っていった後、固まっていたご主人様が話
しだした。

その口から出た言葉は、あたしのパラダイスをぶっ壊そうとして
いた……。

「お前って、女なのか」

第三十二話 最悪は重なる（後書き）

ヒー！！

バレた、バレた、バレちゃったー

雅ちゃんピンチ~~~~！

そしてどうなる恋の行方！

ということで、今日の後書きには特別ゲストの、ご主人様が来ています。

「やあ。僕が、ピンクが大好きと名高い桃原スモモだよ」

うわ、いきなり影が濃い！

それでは、早速質問。

どうして雅ちゃんが女だと気づいたんですか？

「……胸が当たったから」

いーやー、不潔ー。

「な、ななな、何を言っているんだ君は！君がそういう設定にしたんだろうが！」

いーやー、この人、赤の他人に罪をなすりつけてきたー。

コーワイー。

「あー！もう、うるさいうるさい！」

ではー。

第三十三話 密かなる失恋

「お前って、女なのか」

ば、ば、ば、

バレたあああああゝゝゝ！？

「な、ななな、何の、事、デスカッ！？」

「女なのか」

「そ、そんなわけ、ないじゃな、いですか！あ、あた、俺、が、女、だなん、て！」

焦りまくって上手くしゃべれないあたし。

大ピンチ！

絶体絶命！

っていかどうしてバレた！？

「……女なのか……」

「な、何勝手に納得してるんですかご主人様！！」

「女だったのか……」

「ぎゃあああ！！……ち、違いますってば！」

これはなんとしても、隠し通さなければ。

もしバレたら、この仕事をやめなければいけない。（要は、パラ

ダイス消滅）

それに……一真君と、こんなに仲良く話せなくなる。
もしかしたら、会えなくなるかもしれないのだ。

「いや、いいんだ、雅。女でも、僕は構わないんだ。寧ろそっちの方が、この気持ちに納得がいくし……」

は？

どういう意味ですか、それは。

ご主人様も、自分で言ったことに驚いたらしく、口を手で押さえ
ている。

「いや、な、何でもない！こら、変な目でこっちを見るな雅！」

真っ赤になって怒り出すご主人様。

今度こそ、訳が分からない。

何でそんなに赤くなっているの？

「と、とにかく！雅、君は、女なんだな？」

うっ。

もうすでに、言い訳は通用しなくなっている。

どうする、あたし。

ここで素直に頷いて、パラダイスを消滅させるか？

それとも、しつこく粘るか？

「……」

結局、何も言えずに黙り込んでしまっあたし。

こ、この沈黙は耐えられない……ッ！！

そして、ふいに思い出した。

あのとき……エレベーターでの、事故の時。
あたしは……素直になろうって、決めたんだ。

「……う」

「ん？なんて言ったんだ、雅？」

「そう……そうなんです、ご主人様」

言ってしまうと、心の重荷がとれる。

それと同時に、パライス消滅と一真君に会えなくなる、という
悲しみも一気に襲ってくる。

「……そうか。正直で、いいんじゃないか？」

ご主人様が笑う。

なかなか格好いいじゃないか。

「だが、雅をこのまま我が屋敷に置いておく訳にはいかん。もし、
まだ働きたいというならば、メイドとして働くか……。または、辞
めるか」

メイド？

辞める？

二つの選択肢。

あたしに残された道は二つ。

“ピンクのメイド服”という、最悪最低の組み合わせの服を着る
代わりに、一真君と会って話すか。

“ピンクのメイド服”という、最悪最低の組み合わせの服を着な

い代わりに、一真君とサヨナラするか。

どっちだ???

「……少し、考えさせてください」

もう、一真君は、あたしの中で、ピンクと争える程に大きくなっていた。

好きなものランキングでの、ベストスリーに躍り出そうな程。

「もっ、もし、屋敷で働いてくれるのならば、特別にピンクのメイド服を用意させるぞっ!」

「辞めさせていただきます」

ハッ!!!

いかん、つい反射で声が…。

ご主人様が、泣きそうな顔になる。

整った可愛い顔が、ゆがんで、目に涙がたまる。

「あー、嘘嘘嘘!!や、辞めるとか、働くとかは、あたし一人で決められる事じゃないし!!考えさせてください…ッ」

「え、あ、うん…」

少し弱気なご主人様。

あたしがいなくなっても、そこまで困らないような気がするけど…。

あっ、そうだ!

一真君に、ご主人様との関係を勘違いされていたんだっ!!!

「ご、ご主人様！あ、一真君が、あたしとご主人様の関係を勘違いしているので、一緒に誤解を解いて欲しいのですが…」

「関係を、勘違い？それは、つまり、僕と雅とは、何も関係がないと？雅は、僕に何の気持ちも抱いていないと？」

「えっ、関係なんてないじゃないですか。使用人と主人という関係はありますけど…」

ガーン、と効果音が付きそうな程、ご主人様は落ち込まれた。それも、いきなり。

ど、どどど、どうしたんですか！？

「ご主人様？」

「だ、大丈夫、だ。あの、誤解は、解くから。あは、ははは。少し、一人にさせてくれ…」

泣きそうな顔で笑いながら、フラフラと図書室を出て行くご主人様。

だ、大丈夫ですか……？？？

第三十三話 密かなる失恋（後書き）

ご主人様、ドンマイ。
しょうがないよ。
雅ちゃん、鈍いから。

第三十四話 俺が行かなきゃ誰が行く

ご主人様が去っていった後、図書室に残されたあたしは、しばらくボーツとしていた。

これから、どうしよう…。

一真君には誤解されたままだし、ご主人様行っちゃうし。

「あ、もうこんな時間…」

気づけば、昼食タイム。

あー、道理でお腹が鳴る訳だ。

「お弁当、^こ図書室で食べていいかなあ…」

いいよね、たぶん。

鞆からお弁当を取り出して、手を合わせる。

「いったただつきまーす」

本に囲まれながらお弁当を食べるという構図は、変な感じ。でも、旨い。

デリシヤス

「んー！！ハンバーグ美味しい！」

ちなみに、このお弁当は、桃原財閥の使用人さんが作ってくれたものです。

いやー、さすがコック長！
美味しい！！！！

あたしが、黙々とお弁当を食べていた、そのときだった。
ものすごい音が、鳴り響いたのは。

「んっ！？」

ちょうど、卵焼きを口に入れたとき、音が鳴った。
たっ、卵焼きが、喉に詰まっ、た……！！！！

「ゲホッ！！ううー、な、何なのお？」

卵焼きが……。

美味しいのか不味いのかも分からなかった…。

「あ……ッ」

外を見れば、どす黒い雲がかかっていた。
な、何っ？？？

警報です。暴風警報が流れました。学生の皆さんは、直ちに避難をしてください。

……ボウフウケイホウ？？？

「う……」

嘘でしょう……。

今、この図書室には、あたし一人。
そして、この図書室は、別館にある。
だから……誰も、あたしがここにいることを、知らない。
というか、分からないだろう。

「あり得ない、んだから……ッ」

お弁当を置きっぱなしにして、図書室の扉へと駆け寄る。
お願い。
普通に、開くよね？
開かなかったら困るし。」

カチャリ

嫌な音がした。

鍵……？？？

「嘘ッ！……ちよつ、ちよつと待ってください！先生！あたし……じやなくて、俺、ここにいます！開けてください！」

この扉は、中からは開かない造りになっている。
そして、最悪な事に、さっき、先生が、この扉の鍵を閉めた。
窓は、あるけれども、かなり小さい窓がいくつかあるだけだ。
あたしは、通れそうにない。

他に出口はない。
つまり……密室。

「う、うー…。あり得ないんだからあ…」

あたしの声は、自分でも分かる程に弱々しかった。

「誰か、助けに来てよ…」

外は、嵐。

既に風が吹き荒れていて、どうにもなりそうにない。

「もしかして…かなり、ヤバイ状況？」

あたしは、しばらくの間、図書室に突っ立っていた…。

あーあ…どうしよう…？

+++++

「暴風、警報？」

教室に戻って、弁当を我武者羅に食べていると、放送が。皆、慌てて荷物を片付けている。

えっ…と、これは、帰らなくてはいけない雰囲気なのか？

「橘ー。天音っち知らねえー？」

若松が話しかけてくる。

天音っち…って、雅のことだよな…？

「……知らない」

知ってるけど。

図書室で、ご主人様とイチャイチャしてた。

……くっそあ……。

苛々（イライラ）する。

っつーか、気に障る。

雅、お前って、ご主人様に、恋愛感情持ってたのか？

あの、“彼女”はどこへいったんだよ。

まさか、浮気……っ？

「そっかー。さっき、ご主人様が帰ってきて、すっげえ落ち込んでるからさー。何かあったのかな、って」

落ち込む？

何だそれ。

どうして落ち込むんだ？

「それに、暴風警報出てるから、帰らないといけないだろ？車に乗り遅れるんじゃないかな」

車に乗り遅れる、って……。

つまりは、置いていかれる、ってことだよな。

……べ、別に、俺には関係ないし。

どーせ、彼女がご主人様が、助けてくれるだろう！

「橘君」

冷たい声がした。

完全に冷え切っていて、まるで雪女。

その声の持ち主を見たとき、俺は一瞬固まった。

「お、お前は……ッ!」

雅の彼女だった。

最初に出会ったときの、ぶりっこした声とは違い、雪女のように冷酷な声。

……キャラが違いすぎないか???

「そうよ。雅の彼女の……“フリ”をしていたの」

……何を、言っているんだ???

フリって、どういうことだ?

……まさか……彼女ではない?

「そっ……それって、どういう……!」

「私、青木瑞穂。雅のお友達、よ。名前くらいは聞いてると思うんだけど?」

アオキミズホ……。

そういえば、雅にそんな名前の親友がいる、とか聞いたような……。
顔は知らなかったけど……へえー、コイツが、青木瑞穂か。

「えっ……と、よろしく、青木瑞穂」

「フルネームじゃなくて結構よ、橘君」

氷のような美人だ。

正直怖い。

「さて、本題に移るわね。雅は、まだ、図書室にいるわ。さっき、

先生が鍵をかけてた。……つまり……。私が言いたいこと、分かるかしら？」

つまり……雅は、閉じ込められたって事か？

「食べ物はお弁当を持っていたから大丈夫だけど……。もし……暴風で、図書室に被害が起きたら……。どうなるかしら、ねえ？」

……っ……！！！！

理性が、もう諦めろと言っている。

たとえば彼女がフリーでも、既に雅にはご主人様がいるんだ。だから……。だから、諦めなければいけない。

それは分かっている……！！

でも、分かっているても……。雅を、助けに行きたい。

「あ、言っておくけど、ご主人様とかいう人は、雅に失恋したみたいよ？だから、雅を助けに行く人は、いない」

……！！！！

「……悪い！俺、行つて来る！」

反射で駆け出していた。

俺が行かなきゃ……。誰が行くんだよ……！！

「……ったく、手間のかかる人達よねえ」

俺には聞こえなかったが、青木瑞穂がそう呟いたらしい。

第三十四話 俺が行かなきゃ誰が行く（後書き）

一真君走れ！

Let's go!!!

突然ですが…このお話は、できれば今月中に完結させたいな、と思っています。

すいません突然で。

でも、今月中に完結させないと、予定が狂うんです……。

もう少しで皆さんともお別れとなりますが、どうぞよろしく願います。

少し変な主人公達を、応援してあげてください。

いざ、ファイナーレへ……！

と言っても、次のお話で完結するわけじゃないのですが…。

第三十五話 正義のヒーロー？

「うー、寒ッ」

現在状況！

まず、密室。

これ、前提ね？

次に、寒い。

図書室には暖房がないので、ものすごく寒い。

次に、誰も助けに來ない。

……少し、酷くないですかあ？

最後に、風がすごい。

古い校舎なので、ただでさえガタガタになっているのが、暴風のせいで更にガタガタ…。

「ヒイヒイッ」

寒い寒い。

手が冷えるー。

凍え死んでしまいますよ、あたしゃ。

「誰か、助けてーっ」

届かないだろうけど、一応助けを求めている。

これで、正義のヒーローとか現れたらカッコイイんだろうけどない。

……が、現実はその甘くはありません。
……あ、あはは。

分かってたけどね。

正義のヒーローなんてこの世に存在しないことは分かってたけど。

でも、少し期待してたり……。

ガンッ!!!

「……へ……??？」

い、今、がんっ、て音が……？

気のせい？

だよな……？

「……や……。……び……。み……。……び……」

ぞぞぞぞつ。

さ、寒気が、鳥肌が……!!

どうしてあたしの名前を知って居るんだ!？
しかも呼び捨て!

……これは……まさか………幽霊???

今はもう、幽霊の季節じゃありませんよー？
季節はずれの幽霊さんですねー!

なんてこと言ってる場合じゃない!!

「…とつ、とにかく、行ってみよう」

声がしたのは、扉の方。

もし、幽霊がいるならば、そこにいるはず。

「ゆ、ゆゆゆ、幽霊さ～～ん。居るなら出てきてください…」

出てくる訳ないだろ！と、自分で自分に突っ込みつつ、扉へと進んでいく。

ああ、もう少し。

後、三メートルで、扉に……

「雅……ッ」

「ぎゃあああああああ！！！！」

扉の窓に現れた顔。

その顔は、暗くてよく分からないけど、すごく恐ろしい表情だった……気がする。

驚きすぎて、つい殴ってしまった。

……だけど、あたしと幽霊さんの間には窓があったので、思いっきり窓を殴ってしまう。

痛ッ！！

「お助けください神様仏様！ピンク嫌いを直しますから！兄とも仲良くいたします！兄……いいえお兄様！一生お慕いいたします故、お助けください～～！！」

もう何がどうなっているのかも分からず、何故か兄に拝むあたし。あー誰でもいいから（こうなったら兄でもいいわ！）助けて！！！！

「……雅……？」

……あれ。

この声、聞き覚えがあるぞ。

……ま、まさか、ねえ？

あり得ない、よね……？

……お願いです神様、嘘だと言ってください。
だって……

恐ろしい顔の幽霊さんが、あたしが恋した、一真君だなんて……。

「か、ずまくん……？」

「……恐ろしい顔の幽霊で、悪かったな」

怒ってるううう……！！

完全に怒ってますよ一真君！

怖いッス怖いッス怖いッス……！！

幽霊よりも兄よりもピンクよりも高いところよりも怖いです！

「あ、あは 聞こえてたんだあ」

「……とにかく、開ける」

開きません！

開いていたらとっくにここから脱出してます！

「はあ！？それじゃ、俺が中に入れないだろーがっ」

「しょうがないでしょ？あたしだって、好きでここに居る訳じゃないんだからっ」

……違う。

こんな話がしたいんじゃないかって!!
もっと……伝えたいことが、あるはずなのに。

「仕方ねえな……。ドア、蹴破るか」
「……はい？」

一瞬、一真君の言葉の意味が分からなくて、呆然としてしまった。
ちよ、ちよっと待って。
蹴破る、って……。

「雅、下がってるよ」

「む、無理だよ!だって……」

「こんなボロい校舎、誰かが全力でぶつかったら壊れるっつーの」

「で、でも、弁償……」

「生徒を閉じこめた先生が悪い」

「せめて、鍵を……」

「そんな暇があったら、中に入って、お前に……」

そこで、一真君の言葉が途切れる。

扉の向こうの彼は、目を泳がせている。

……お前に……???

「とっ、とにかく、蹴破るぞ!」

そ、そんな……。

反射で一步後ろへと下がり、身構える。

バキッ、という鈍い音がした後、あたしは……

一真君に、抱きつかれていた。

「力、カズマクンツ!？」

焦りすぎて、言葉が片言。

な、ななななっ!？」

一体、どうなって……

「よかつ……た……」

一真君の口から漏れた言葉。

その言葉で、どれだけ心配をかけたのかが、一瞬で分かった。

「……ご、めん……」

謝罪の言葉を口にすれば、

「何でお前が謝るんだよ」

と憎まれ口をたたかれた。

でも。

そんな言葉も、照れ隠しだと思える今は、許してあげる。

謝罪がダメなら……

「一真君。ありがとう」

第三十五話 正義のヒーロー？（後書き）

いよいよラストスパートです！

この時点で、時間は午後二時くらい…かな？

もう少し、ゴタゴタあつて、その後…

おっ楽しみに〜！！

第三十六話 完全に密室

「…………あの、さ」
「おう」

「気まずい。
非常に気まずい。」

抱きつかれたはいいが、その後の沈黙が非常に気まずいぞ。
どうなっているんだ一体！

「…離れよう、か？」
「駄目だ」

「そんな即答されても…。
この状態で気まずいんだから、まずは離れたいんだけど…。」

「むう…………」
「泣いても離してやらねえぞ？」

「な、なんか意地悪になってるし！
一瞬ムカついて、その後、言葉の意味を考えて顔が赤くなる。
泣いても離してやらねえぞ、って…………ずっと、抱きつかれてるっ
てこと？」

「は、恥ずかしい…。」

「離して離して離してえええ！」

ジタバタと暴れ回ると、一真君が腕の力を緩める。
よし今だ！

チャンスを見つけ、そのわずかな隙間の中に入り込もうとした、
その時……。

カチャリ

……嫌あゝな、予感

「一真君！」

「雅？」

事の大きさに気づいていない一真君が、焦っているあたしを見て、
首をかしげる。

今は、そんなことしてる場合じゃなくなつて！！

「か、鍵が！！」

鍵が、閉まつた！！！！

「……はああ？」

一真君の腕の中から抜き出す。

あたしの言葉に、啞然としている一真君からは、簡単に逃げ出せ
た。

「……あ……」

蹴破ったはずの扉は、何故か修理されていて。

い、いつの間にッ……！！

そう思ったとき、扉の向こうに、意地悪そうな顔が見えた。

「み、み……瑞穂！？」

どうやら、扉は瑞穂が修理したらしい。

そして、鍵を閉めたのも瑞穂。

……ちよつ、と、待ってよ…。

「開けて開けて開けて……！瑞穂！言うこと聞いてよ……？ねえ、瑞穂っ」

一生懸命叫ぶが、扉の向こうの瑞穂は、聞こえていないのかのよう
うに、平然としている。

チャララ、と、この場に相応しくない携帯の着信音が鳴り響い
た。

「あ、メール……」

差出人は……瑞穂？

無題

雅、元気にしてる？

橘君とも仲良くやってるでしょーね？

まあ、抱き合ってたから大丈夫か

これから私は、アンタ達の愛を深めるためにも、家に帰るから。

まー、要するに、学校に残ってるのはアンタ達だけ、ってことよ

(^ - ^)

「... ㊦㊧㊨㊩㊪㊫㊬㊭㊮㊯㊰㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿」

第三十六話 完全に密室（後書き）

瑞穂ちゃん怖い。

恐ろしいですよ！。

瑞穂ちゃん本領発揮！

ガンバレ雅！

負けるな雅！

あ、ついでに一真も頑張れ！

オマケでご主人様も！

失恋のショックから立ち直るんだ~~~~！

って、馬鹿ですね私。

第三十七話 ヤキモチ？（前書き）

予定だと後三話……なんですが、絶対無理。
いろいろ無駄に執筆してしまったので…。

なので、もう少し続きます。
四十何話かで……。

第三十七話 ヤキモチ？

しーん……。

さつきから、図書室は恐ろしいほど静まりかえっている。それもこれも、瑞穂のせいだ。

瑞穂が、一真君が蹴破った扉を、修復して、鍵をかけたか
ら。

「……」

黙っている一真君につられて、あたしも黙る。

…あー、この空気、耐えられないんですけど…っ。

「一真君。お、お腹減ったね！」

あたしの馬鹿ーっ！

どうして出てきた話題が、食べ物のことなんだー！
どこまで食い意地張ってるんだよこの馬鹿野郎！

「そっ、そうだなー！」

一真君の、ぶっきらぼうな返事。

完全に、あたしに背を向けている一真君。

……これはこれで、気まずいんですが…？

「誰か、助けに来てくれるといいね」

これは、本心。

だって、こんな所に一真君と二人っきりなんて……嫌だもん。
恥ずかしいし。

「おう」

一真君が返事をしたとき、携帯が鳴った。
それは、あたしの着信音ではなくて……

「あ、俺の携帯……」

どうやら、一真君の携帯だったらしい。
濃い青の、シンプルな携帯を出して、メールのチェックをしている一真君。

そして、次の瞬間、彼は……ニヤけた。

「……」

なんか。

なーんか、おもしろくないんですけど？

「一真君、誰からのメール？見せてえ」

わざと甘ったるい声を出しながら、一真君に近づく。
ニヤけた原因を探るために。

だって、そうしないと、このモヤモヤした気持ちが収まらないし。

「う、わっ！？ちよっ、雅、やめっ……！……！」

「いいじゃあ〜ん、見せてよ……う……??？」

……正直に言おう。

あたしは、今日に映っているものが信じられなくて、数秒意識を失ってしまった。

立ちながら、意識を失ったあたしをほめて欲しい。

無題

好きです。

付き合ってください。

……は???

メールには、「好きです。付き合ってください」と書いてある。

…そして、一真君は、コレを見て、ニヤリと笑った。

つまり。

この、メールの送り主は……一真君の、好きな人？

「……帰るッ」

自分の声が、酷く怖い声になっていた。

モヤモヤする、イライラする、むかむかする。

一真君なんて、大嫌い。

……どーせ、あたしのことなんか、何とも思っていなかったんだ
…。

「み、雅！待てって！違うんだよ！」

「何が違つたのよ!?!一真君、告白されてニヤけてたじゃない!嬉しかったんでしょ!?!」

「に、ニヤけ……っ!?!」

明らかにショックを受けている一真君を放っておき、扉へと直進するあたし。

帰るつたら帰るんだから!?!!

「とああああああ!?!!」

扉に体当たりを食らわせる。

ガン、という音はするものの、簡単に壊れるはずがない。

くっそお、なかなかやりおるな。

お主は何者じゃ!?!

『拙者、伊賀の扉忍トビシノブと申す。お主を倒しに参つた!』
成る程。

それでは、こちらも、正々堂々と勝負するぞ。
いざ、参られ〜い!?!!

って、何を劇やってるんだあたしは!

「み、雅、やめ……」

「一真君は黙って!」

こうなったら、必殺技の、右ストレート!
女の拳、受けてみよ!

「じふっ」

この言葉を言ったのは、扉ではなくあたしだ。

あまりの堅さに、悲鳴を上げてしまった。

……悲鳴、じゃ、ないか。

「痛い……」

「だからやめとけって言っただろーが！ テメエは俺の言うこと聞け！」

ジンジンと腫れる拳を、一真君が、持っていたハンカチをミネラルウォーターで濡らして巻き付けてくれる。

……冷たい……。

「まったく……心配させんなっつーの」
「……」

だって。

なんか……嫌だっただもん。

一真君が、他の女の子とのメールで、ニヤけているなんて。

……この気持ちは……ヤキモチ？

第三十七話 ヤキモチ？（後書き）

もう少しでラストですよー。

頑張ります！

応援よろしくお願いします。

第三十八話 妬かなくてもよかったのに!?

好きです。

付き合ってください。

そう書かれたメールを見て、笑った一真君。

その顔を見て、何故かあたしは、モヤモヤした。
まるで、霧に包まれてしまったかのように。

「雅？」

「あ、一真君……」

「……あのさ、誤解だから、な？」

あたしの顔色を伺っている一真君。

そんなにあたしが怖いか。

「別に、気にしてないから。誤解だなんて言わなくていいよ」

気にしてます。

すごく、気にしてます。

誤解だと、嘘だと、言ってください。

お願いだから……。

「ちよつ、違つ!!ほら、ちゃんとメール読め!」

もう二度と読みたくない!

そんなメール！

むくれて、顔を背ければ、一真君の携帯が迫ってくる。

「好きです。付き合ってください」の文字が、携帯には出ている。

……二度と。

……二度と見たくないって、言ったでしょーがあああああ
あ……！

「一真君なんて最低！大ッ嫌い！！もう、二度と近寄らないで！
……！」

ありつたけの声で叫ぶと、一真君はたじろいだ。

一瞬、目をキョトキョトさせる。

今だ……！！

また扉に突進するあたし。

とにかく、攻撃を与え続けていれば、何とかなる！はず……！！

「雅、危ないから、やめろ……ッ！」

「やめろと言われてやめる馬鹿は、いなあーい！」

右ストレートが効かないのならば、キックだ！

左の足を軸にして、右足を振り上げる。

せえええーのおおお……！！！！

ドガッ……！！！！

図書室に似合わない音が。
そして、ミシミシ、と扉が軋^{きし}む。
ヤツタ、壊した！

と思ったのもつかの間。
扉は、軋^{きし}んだだけで、壊れた訳ではなかったのだ。
がーん……。
しかも、痛みが跳ね返ってきて、足が痛い…。

「雅！お前って、学習しない奴だなー…」

呆れた顔の一真君。

……そんなこと、言わないでよ。
だって、あたしが、扉を怖^{ワケ}そうと思った理由は……。

「だって……だって、一真君が悪いんだから……！」

大声で叫ぶと、図書室中に響く。

一真君は、驚いて目を丸くしている。

「俺が、悪い？」

「一真君が、他の女の子に、デレデレしてる、と思って……。そしたら、悲しくなって、悔しくて、イライラしたんだもん……」

うう……。

今でも信じたくないよ。

一真君が、デレデレしてたなんて…。

「……ばあーか」

ツつう……!!

デコピンをされて、オデコに、痛みが走る。
といっても、そこまで大きな痛みではない。

「痛……。な、何するのよ!」

「だから、人の話をちゃんと聞けって言ったのに。だいたい、俺は
ニヤけてなんかいいえよ」

どこことなく嬉しそうな感じで、あたしに言ってくる一真君。
でも、その言葉はどう見ても嘘だ。
だって、ニヤけてたじゃないか。

「ニヤけてないっつーの」

またデコピンが降ってくる。

ピン、とはじかれた時の、一時的な痛みが辛い。
…痛い……。

「ほら、メール読め!」

ほぼ強制で、携帯のメールを読まされる。

「好きです。付き合ってください。……これのどこが告白じゃない
って言うの!?!」

「その下その下」

その下あ?

画面をスクロールさせて下を見てみれば、確かに何か文字が書い

てある。

どこことなく、嫌な予感……というか、ある意味では良い予感がした。

一真君が読めと催促するので、嫌々ながらに読む。

「好きです。付き合ってください。……って言ってみたよ。そしてら、返事はOKだってさ。ヤツたねお兄ちゃん!……」

棒読み。

だって、だって……。

……これ、告白メールじゃなかったのぉ!?

しかも、お兄ちゃんって何!?

返事はOK?

どんだけ羨ましいんだ畜生!

って、そうじゃなくて。

「……」

「分かったか?つまり、このメールは、俺の弟からのメールだ。好きな子に告白できて、めでたくOKもらいました、っていうメールニヤける要素なんてどこにもねーだろ?」

…確かに。

もしかしたら、一真君は、ニヤけてたのではなく、ほほえんでいたのかもしれない。

紛らわしい奴だな…。

「だから、ヤキモチ妬かなくてもよかったのに」

……は……？

—真君の口から飛び出した言葉に、あたしは、眉間に皺をつくる。
ヤキモチ妬カナクテモヨカッタノニ。

……どうして、あたしがヤキモチ妬いた事を知っているんだ！？

第三十八話 妬かなくてもよかったのに!? (後書き)

あっははっのはあく！

バレちゃいましたね。

どうも、無駄に陽気な作者です。

今日は良いことをしたので、気分が上がっています。

……が、しかし、もうすぐ期末テストが…。

それまでに終わらせたいです。

頑張らなければ！

第三十九話 この想いを伝えたい

「だから、ヤキモチ妬かなくてもよかったのに」

神様。

お願いします。

どうか、目の前の現実を、変えてください……。

「雅ー？大丈夫か？」

「……」

明らかに、顔が不機嫌になっているあたし。
それと対象に、何故かご機嫌の一真君。

端から見れば、どう見えるのだろうか。

「どっ、どうして……」

「どうして？」

「どうして、あたしが妬いてるって分かったの！？」

……自分で言うけど、案外恥ずかしいものだなあ。

「普通分かるよ。雅の反応見てれば」

カァーッ、と、顔が熱くなるのが分かる。

恥ずかしすぎる……！！

バレてたなんて。

しかも……妬いてたってバレたら、あたしが一真君のこと、好きなもの、分かっちゃうよね？

……最悪だあ……。

「……」

「それで、雅？」

落ち込む……。

シヨックが大きすぎるんですけど……。
バレた、なんて……。

今まで通りに過ごせない、よね……。
もう友達でもいられないよ。

「お前の気持ち、聞かせてほしいんだけど？」

ッ……！

耳で囁きかけられて、ビクリと体を震わせれば、一真君がクックと笑う。

……あ、あの、近くないですか……？

「なっ、ななな、何のことっ……」

とりあえずシラをきれば、一真君が、口元をゆがめる。
でも、そういう顔もカツコイイ。

「何って……分からない？」

「分からない！恋心とか恋心とか恋心とかは分からない！」

「分かってるじゃん」

「あ……」

馬鹿ー！！！！

あたしって、とことん阿呆だ。

どこまで馬鹿なら気が済むのやら…。

「……むうー……」

俯いて、赤い顔を隠そうとすれば、一真君の顔も下にずれ、目と目が合う位置になってしまう。

どっ、どこまであたしを追いつめるの？

だいたい、急に一真君って変化（？）するよね？

あの時も、あの時も、あの時も……。

「言つてよ」

「……あ、」

言っしか、ないの？

玉砕するとしても？

フラれると、分かっているも……？？？

……いつか、誰かが言っていた事を思い出した。

その人は、あたしには構ってくれなかったけど、幼馴染みの瑞穂にはやたらと優しくて。

確か、その人が、引越すときに、あたしに言ったんだっけ。

「人には、言わなくちゃいけない時があるんだよ。例え、断られると分かっているもね。

付き合っで欲しいとお願いすることと、好きですと伝えることは違うから。

断られても、それはそれでいいんだ。

だって、好きだと伝えることが目的であって、付き合つていつかは、オマケでしかないのだから」

あの時は、意味が分からなかったけれど、でも、今なら、分かるよ。

……あたしの気持ちを、伝えなくちゃ。

「あたし、一真君のこと、好き」

思い切つて、顔を上げて、そう宣言すれば、一真君は、嬉しそうに笑った。

……例え、フラれるとしても。

この笑顔が見られたならば、それはそれで、いい。

そう思えるようになったあたしは、成長したよね、何処かの誰かさん。

「よくできました」

一真君がそう言つて、あたしの髪をクシャクシャに撫でる。

その行為が、異性として意識されていないと分かつて、泣きそうになつてしまった。

嫌だ、泣いちゃ駄目だよ。

泣き脅しなんて、あたしに向いてないし。

泣いちゃ、ダメなんだか……

「ハッ！？何で泣いてるんだよ！」

一真君が焦る。

あーあ、だから泣いちゃ駄目なのに。

でも、溢れる涙は止める事ができなかった。

悲しすぎるよ……。

「い、今まで、アリガト。あたし、付き合ってなんて言わないからフラれても、ぜ、全然、おっけ……」

そこまで呟くように喋ったとき、一真君が、あたしにキスをした。あたしの言葉を止めるかのように。

実際、あたしの言葉は止まってしまふ。

長いキスの後、一真君が話したず。

「そんなこと言うな。俺が困るだろーが」

赤くなっている一真君を見て、意味が分からなくなる。

だって……これだと、一真君が、あたしを、好き、みたいになっちゃうじゃん。

そんなはずなのに……。

「う、誤解させるようなこと言わないでよ！だいたい、あたしのフアーストキスを、よくも……」

「誤解じゃねえし。お前、物分かり悪いなあ……。これくらい言えば普通分かるだろーが……」

ぶつぶつ呟かないでよね。
意味分かんないし。

あたしはどーせ普通じゃないから、分かんないわよ！

「だーかーらー！俺も、お前のことが好きなんだよ！！悪いか！？」

……夢ですか？

それならば、どうか、正夢になってくれると嬉しいです。

「夢じゃないって！……もう一度だけ言っぞ。俺は、お前のこと、好きだ」

第三十九話　この想いを伝えたい（後書き）

もう少しです！

あと少し、この主人公達にお付き合いくださいませ。

第四十話 恋色の花

「俺は、お前のこと、好きだ」

……！？

し、信じられない。

一真君が？

あたしのこと？

……す、す、す……

「好き……って……。あたし、一真君のこと、異性として、“好き”なんだよ？」

念入りに確認すれば、一真君は呆れたように口を開いた。

「俺もだよ。お前のこと、異性として好きだ」

……こうもはっきり、好きなんて言われると照れる。

夢みたいだ。

でも、夢じゃないんだよね？

「……嬉しい」

ボソッと呟くと、それは一真君にも聞こえていたようで、ニコッと満面の笑みを向けられた。

うわっ、笑顔が輝かしい。
なんか、いつもに増してカッコイイ。

「俺も、嬉しい！」

……可愛い。

きゅん、ときたよ今。
ドキドキする。

このときめきが……恋、してる、って言うのかな。

「でも、こんな姿をご主人様達に見られたら、俺達なんて言われる
だろうな。やっぱり、“男同士”って見られるんだろうな」

あ……。

そういえば、一真君にはまだ、あたしが女だってバラしたこと、
言ってなかった…。

「あ、あのね、一真君」

「ん？どうした、雅」

勇気を出すんだあたし！

だって、例え、一緒に仕事ができなくても……あたしが、一真君
のことを好きなことに、代わりはない！

「ご主人様達に、バレちゃったの。あたしが、女だってことが」

ハッキリと宣言すれば、案の定一真君は目を丸くした。
ごめんね、一真君。

「どっ、どうして！！あんなに、パラダイスだ、パラダイスだって、騒いでたのに……ッ」

「パラダイスは、一真君が居てこそだよ」

「えっ……？」

やっと分かった。

あたしが、奇人変人で、阿呆で、馬鹿道ばかどうを突っ走れたのは、支えてくれた人がいたからだって。

パラダイスがあるのは嬉しかったし、本当に素敵だった。

でも。

あたしにとって、パラダイスよりも大切なものは、支えてくれる人……つまり、一真君だよ。

「例え、一緒にお仕事できなくても……一真君と会えれば、それでいいの。一真君が、そばに居てくれたら、パラダイスなんて、どうでもいい！」

だから、そばに居てね。

ずっとずっと、隣に居てね。

あたしと、一緒に、居てね。

「……ったく、雅は……」

はあ、とため息をついた後、一真君は笑って、手を広げた。

「分かった。それが、雅の決めたことなら、俺は止めない。お前の願いも、叶えてやるよ。おいで」

手を広げる一真君に、あたしは抱きついた。

大好き!!!

ドンっ…………!!

『エッ!?!』

大きな音がして、地割れが。
どうなってるの!?

「か、一真君、これって…………」

「わ、分かんねえ。どうなってるんだ、一体……………あっ!」

一真君が周りを見渡してから、声を上げた。
えっ、何!?

「どうしたの……………ってあ……………」

扉が、開いていた。

鍵もかかっていて、頑丈になっていたから、開かないはずなのに。
何故か、扉は開いていて、その向こう側が見えていた。

向こう側には、瑞穂がいて。

ニヤリと笑ったかと思うと、手招きをした。

……………来いって事?

「か、一真君…っ」

「行こうぜ、雅。せつかく、解放してくれたんだ」

一真君が、あたしの手を握る。
とても暖かくて、大きな手だ。
包まれている感じがする…。

「うん。行こう、一真君」

貴方が居れば、どこへだって行ける。
ついて行くよ、一真君。

ゆっくり歩いていくあたし達。

それを待ちかまえる瑞穂。

そして、扉の目の前まで来た時に、また、大きな音と地割れが響いた。

「な、何ッ!？」

驚いて、一真君に抱きつけば、瑞穂が露骨に嫌そうな顔をする。
な、何よお…。

「いつまでイチャついてんのよ、あんた達は。ほら、最高のラストを提供してあげたんだから、早く来なさい」

ベリッ、と音がしそうな程、強くあたし達を引きはがした後、瑞穂は、校舎を出た。

それに続いて、引きはがされたあたし達もついて行く。

「ほら。この私に、感謝なさい!」

エヘンと胸を張る瑞穂の後ろで、“花火が上がっていた”。

「うわぁ……ッ」

既に薄暗い夕暮れ時。

暴風はもう過ぎ去り、静かな場所だけが残る。

そんな、静けさが戻ったこの場所に、花火が上がっていた。
煌びやかに、派手すぎず、地味すぎず……。
季節はずれのくせに、とっても素敵だ。

「雅」

気づけば、一真君が隣に立っていて、あたしの肩に手を回していた。

「一真君……」

冬の足音が聞こえてきそうなこの場所で、夏の風物の花火が上がっている。

それはとっても不思議で、おかしい風景だけど、でも……

あたしは、幸せだ。

彼は、花火が上がると同時に、口を開く。

それと同時に、あたしも口を開いた。

花火の上がった音で、一真君の声は聞こえなかったけど、でも、
あたしが言ったことと同じ事を言った気がする。

『大好き』

第四十話 恋色の花（後書き）

まだ終わりじゃありませんよー。

第四十一話 恋する乙女はピンクが嫌い？（前書き）

ついに最終回！

あー、ここまで来たかあ…。

第四十一話 恋する乙女はピンクが嫌い？

あれから数日。

あたし達は、めでたく恋人となり、周囲からヒューヒューとかわれた。

一真君はずっと赤面して俯いていたし、あたしはあたしで、顔が真っ赤になるのを抑えられなくて、「タコみたい」と言われたり。

（もちろん、そう言った奴は後でぶん殴っておいた）

いろいろあったけど、一真君と一緒にだったから、楽しくて、嬉しくて、ときめいて。

ずっとずっと、この幸せが、続けばいいと思う。

いつまでも、永遠に……。

「天音雅。入れ」

「はい」

今あたしは、ご主人様の部屋へ入ろうとしている。

勇気を出すのよ雅！

例えピンクだらけでも、「気持ち悪い」などとは言ってはいけないのよ！

「うえつ。いつ見ても気持ち悪い部屋ですね」

あつ、いけない。

つい本音が。

あたしの暴言に、ご主人様は苦笑する。

「相変わらずだな、雅」

「はははっ、ご主人様も、相変わらずのピンク三昧でございますね。こちらは吐き気がしてくる始末であります」

笑顔で言つてやると、ご主人様も笑顔になる。

というか、笑いをこらえているようだ。

……失礼なっ！

「プツ。……オホン。それじゃあ、本題へ移るぞ」

急に重々しい口調のご主人様。

跳ね上がる心臓。

でもこれは、ときめきじゃない。

ときめきは、もっと……体中が熱くなって、切なくて、でも嬉しくて……。

あたしがときめく時は……

一真君と、会った時とか。

「本当に、執事を辞めるんだな？」

そう。

あたしは、執事を辞め、この屋敷からおさらばすることを決意した。

もちろん、メイドとして働く気もない。

家に帰るつもりだ。

どうせ、兄が働いてくれるから、仕送りはもらえるだろう（人に頼りますよ、あたしは）

「はい、辞めます」

「では、この契約書にサインを」

差し出された契約書。

この紙にサインをすれば、今までのパラダイスは消滅し、これからの給料も消える……。

中原さんに、「執事になろう」と誘われたあの日。

イケメンウォッチングとお金の為ならば、と意気込んで男装したんだよね。

それから、一真君と遭遇して、若松君とも会って、ご主人様とも会った。

初めて、“男”として聖夜学園に来たあの日。

瑞穂と会って、告白されて、でもすぐにバレて……。

兄とデートして、脱走して、一真君とエレベーターに閉じこめられて、そして……

そして、その時初めて、ときめいたんだ。

前日のときめきがまだ残っていたあの日。

瑞穂が、何かを企んでいた。

それで、一真君や、若松君や、ご主人様達と、いろいろもめて。

最後には、告白して、告白されて、花火を見た。

……この屋敷に来てから、たくさんのがあったね。

もし、お屋敷でメイドとして働いていくならば、これから先も、たくさんの素敵なことがあるだろう。

それを望まないということは……つまり、これから起こるたくさ

んの素敵なことが、消えるということ。

でも、あたしには、これからの素敵なと同じくらい、大切なものが残ってるから。

ね、一真君。

「えっと……天音雅……っ」と

印鑑を押さないと…。

えーっと、印鑑印鑑…。

……そういえば。

あたしが、“女”だと知ってからの、若松君や他の執事さん達は、みんな驚いてたなあ。

みーんな、目を見開いて、口をポカンと開けてるから、笑っちゃった。

あの中でも特に、若松君は驚いていたっけ。

数秒固まってから、目を輝かせて、「メールアドレス、交換してくれないかな？」って言うてきたんよね。

相手が女の子なら、誰でもメルアド聞くのかなあ。

その後、「一真君と付き合ってるの」って言ったら、更にみんな驚いてた。

っていうか、怒り狂ってたかも…。

若松君は、今度はここぞとばかりに落ち込んで、携帯握って部屋に帰っていつちゃった。

「楽しか…」

楽しかった、と言おうとして、慌てて口をふさぐ。

嫌だ、これじゃあ、みんなと離れたくないみたいじゃない。

あたしは、これから、このお屋敷を、出て行かないといけなの……に……ッ。

「うう……」

気づけば、泣いていて、嗚咽が止まらなかった。

ヒック……。

もう、何泣いてるのよ、あたしってば……。

「ヒクッ……」

涙で顔がグシャグシャになったあたしを見たご主人様は、顔色を変えて慌て始めた。

「ちょっと、雅、何でここで泣くんだよ！あー、なんだか僕が泣かせたみたいになってるじゃないか！そんなことしたら、橘一真に何言われるか……」

オロオロ、キョドキョドするご主人様を横目に、笑いながら泣いた。

おもしろい……でも、悲しい。

そしてそのとき、部屋の扉が開いた。

「え……？」

「あつ、執事諸君！」

入ってきたのは、執事の仲間達。

お仕事の辛さを、一緒に乗り越えた、あたしの、友達。

「雅様、何泣いてるんだよ」

「そうだよ。涙はレディーに似合わないぜっ」（キザ 気障なので執事達に殴られる）

「天音っち、俺達、友達だよな！そうだよな！他人とか言われたら、マジで悲しくて死ぬ…っ」

「引っ込め若松！テメエは雅様と同じ部屋だったろーがあ！羨ましいー！」

「そうだよなー、俺も雅ちゃんと同じ部屋がよかったあー。いろんな意味で」（全員に睨まれる馬鹿）

「泣かない方が雅っちらしいよ」

……みつ、みんな、ありがとお……！！

もう泣かないから。

あたし……みんなと出会えて、よかった！

「雅」

凜とした、張りのある、素敵な声が聞こえた。

その声は、あたしの好きな人の声。

ずっとずっと、一緒に居たいと思える人の声。

「一真君…ッ」

なんだか安心する。

一真君が見ていてくれるというだけで、元気が何倍にもなる。
よし！

「この度、天音雅は、女であることを発表し、執事を辞めることを

決意します！皆様、今までありがとうございました！貴方達の事は、ずっと忘れません！……それから、ずっと、友達で居ましょう！」

大きな声を張り上げれば、みんなから拍手が。

うう……っ、なんか、泣けてきちゃったよお…。

「雅」

あつ、一真君。

「あのなー、お前さ、何で俺の所に来ないんだよ」

はえっ???

それはどういう意味ですか？

「何俺以外の奴に、慰めてもらってるわけ？ム力つく。俺、嫉妬やヤキモチ激しいんだからな」

あ、すねてる一真君。

ぷぷっ、なんか可愛いんですけど。

「だーから、これは、俺以外の奴等ヤツラに涙を見せたお仕置き、な」

へっ!?

頬に、軽く唇が押し当てられる。

チュッ、という軽いリップ音と共に、頬が赤くなるのを感じた。

な、な……ッ。

「ヒューッ、熱々う」

「くそお、羨ましいぞ橘一真！決闘だあー！」

「いいな、橘……」

「天音っちー、顔赤いよー？」

「な、何でもみんなの目の前で、ほっぺにキスするんですか！？」

「だから、お仕置きだつっーの。もう俺以外のヤツに涙見せるんじゃないぞ」

そう言つて、一真君はあたしに抱きついた。

く、苦しい……。

でも、ときめく。

だって、好きだから。

……だけど、ね……。

「離れろ一真君ー！！！！何故ピンクの執事服を着たまま抱きつくんだあー！！気持ち悪いー！！！！」

ウゲツ、キモイ。

吐きそうかも……。

「なっ！？恋人に向かつて離れるは酷くないか！？」

「ピンクが抱きついてきたから」

「既に俺“色”になつてゐるし！俺は人間だー！」

「どうでもいいけど、ピンクは止めてえ……」

「ま、待てよ雅っ」

あたし、一真君の腕の中から脱走。

第四十一話 恋する乙女はピンクが嫌い？（後書き）

はい、どうも……。

ゆながりかです、こんばんは（または「こんにちは」「、または「おはようございます」）

ついに、このお話もここまで来ました。
グフフフフ。

ええーと、最後は、「恋する乙女はピンクが嫌い？」らしく終わってみました。

雅ちゃんのピンク嫌いは、結局直っていませんねえ（遠い目）

えっと……

今までご覧になってくださった、読者の皆様。
本ツツツツ当に、ありがとうございました！

こんなヘッポコ中学生のお話を読んでくださり、喜ばしく思っております。

もし、暇なら、感想評価レビューどんとこいです。

……もちろん、アドバイスもどんとこい……。

ええっと、ここで長々と書くのもアレなので、次に、作者からの長い後書き（？）を書かせていただきますので、暇で暇で仕方がない方は見てください。

一応主人公達も登場させるつもりですよー。

それでは、また会う日まで！

暇な方のみどうぞ！ 後書き（前書き）

登場人物達も登場します。

暇な方のみどうぞ！ 後書き

どうもどうも、ゆながりかです。

いやー、長かったですねえ、ここまで来るのが。

この場を借りて少々自己紹介…（何故でしょうね）

名前：ゆながりか

年齢：今は12歳

性別：（文章見ていて分かりますよね！？分からなかったらシ
ョックです）

身長：150程度

体重：レディーの体重を知るなんて、そんな無礼なこと、皆さん
はやりませんよね？

趣味：小説を書くこと

夢：小説家

っと。

それでは、後書きへと入ります。

「恋する乙女はピンクが嫌い？」を読んでくださり、どうもあり
がとうございます。

更新も遅かったですし、文章能力無いですし、誤字脱字もかなり
あったですし……。

悔やむところは何個でも見つかりますが、今はとりあえずプラス
思考でいきましょう。

こんな阿呆な主人公、雅ちゃんを応援してくださった方、挙手！
(って、見えません)

うう、ありがとうございます…。

雅も大変喜んでいま「みんなー、ありがとうねー！これからもよろしくー！」……。

コラコラ、まだお前の登場するときじゃないぞ。
引っ込めこの馬鹿主人公。

また、「私もピンクが嫌い」とか、「男装してみたい」というメールもいただきました。

共感してくれるとは思っていなかったので、少し嬉しかったです。

そして、「一真カツコイ」という声援を送ってくださった方々。
一真はただただ無愛想な人です。
好意を持っていたくのは結構ですが、雅とイチヤイチャラブラブしておりますので、邪魔はなさらぬように。

と、いろいろ書きましたが。
作者がこれだけダラダラ書いても、つまらないので。
待ってました！の、登場人物達が勢揃いです。
どうぞ！

「はいはい！天音雅です！みんなー、応援してくれてありがとう！
嬉しかったよー」

「こら、雅。出しゃばりすぎるな」

「あ、一真君…ッ」

雅、頬をポツと赤くするな。
どこまでバカッフルなんだ、一体…。

「ちょっと雅、顔赤くしないでよね。見てるこっちが恥ずかしいわ」
(そうだそうだ！by作者)

「あ、瑞穂」

「全く、バカツプルにも程があるってものよ。公衆の目の前でキスするなんて恥ね」

「グハッ！ー！相変わらず瑞穂の言葉にはぐさつとくるなあ……」

「フフンっ。どうせ私は、冷たい冷酷女ですから。ケンカ大好き的美少女ですから」

瑞穂ちゃん、自分で自分を美少女とか言うのやめようよ。

「あら、何か言った？作者」

ヒッ……！！

な、何でもございません。

瑞穂様は、誰がどこから見てもヒロインでありまして……

「コラ待て作者！主人公はこのあたし、天音雅よ！」

あ、忘れてた。

「ひ、酷ッ……」

「天音っちー、傷つくなよ」

「若松君……」

「そうだぞ、雅。泣くな」

「ご主人様……」

「泣くなんてみっともない」

「中原さんは相変わらず冷たいお方……」

「雅ー、愛してるぞー」

「黙れ兄貴」

雅、キャラ変わってるって。

何故兄が出てくるとキャラが変わるのでしょうか……？

あと、兄は読者様にも嫌われております。

「えっ！！」

あれ、気づいてなかったの、雅兄。

「ガン！！！！」

おいおい、自分で効果音つけるなよ。

と、こんな調子でお送りしてきました。
はははは。

……もう喋る事がなくなってきたので、最後にお礼を。

こんなおかしい主人公達の暴走と恋愛に付き合っていただき、どうもありがとうございます。

ピンクが嫌いなんていうむちゃくちゃな設定にしまいました
が、読者様はこんな私を見捨てずにいてくださり、感謝感激です。
それでは、これからもしょしくお願いします。

『今までありがとうございます！ではでは！』

さようなら。

また会う日まで！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8568k/>

恋する乙女はピンクが嫌い？

2010年11月14日21時26分発行